

子宝さんの、おもうて
たんと違うんだけど

ミレニアムいたっちー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ちよっとお馬鹿で、脳足りんで、ドジで、女子力壊滅的でほんのり男前な子宝ゆたかは、男として生きてきた前世を持つ女の子。

彼女は紆余曲折ありながら普通に結婚し、普通に旦那さんを貰ったんだけど、人生思った通りにならなくて……。

この物語はTS転生した子宝ゆたかの、思ってたのとちよっと違う、そんな日常を描いた愛と青春と何かが詰まったラブコメな物語である。

注意) 不定期更新。

目次

おもうてたより、がつつりプロローグ	
——	
なんだけど	1
——	
おもうてたより、旦那がべつたりなんだけど	10
——	
おもうてたより、愛されてるみたいなんだけど	22
——	
おもうてたより、デートって大変そうなんだけど	32
——	
おもうてたより、シスコンの来襲が早かったんだけど『前編』	45
——	
おもうてたより、シスコンの来襲が早かったんだけど『後編』	59
——	
おもうてたより、雨が止まないんだけど	
——	
おもうてたより、友人になつかれてるんですけど	71
——	
おもうてたより、友人になつかれてるんですけど	82
——	
おもうてたより、充実してるみたいなんですけど	98
——	
おもうてたより、サプライズが難しいんですけど	113
——	
おもったより、夫がチャンレンジャーな友人関係築いてるんですけど	127
——	
おもうてたより、大変そうなんですけど	140
——	

- おもうてたより、体がハツポコなんで
すけど ————— 154
- おもうてたより、残暑が厳しいんです
けど ————— 168
- おもうてたより、自分の気持ちが分か
らないんですけど『前編』 ————— 182
- おもうてたより、自分の気持ちが分か
らないんですけど『後編』 ————— 196
- おもうてたより、複雑みたいなんです
けど ————— 209
- おもうてたより、ときめきが止まらな
いんですけど ————— 222
- おもうてたより、冬の訪れが早いで
- すけど ————— 314
- おもうてたより、特別だったらしいん
ですけど ————— 251
- おもうてたより、クリスマスが待ち遠
しかったりするんですけど。 ————— 264
- おもうてたんと違うんだけど【前編】
279
- おもうてたんと違うんだけど【後編】
293
- おもうてたより、蛇足なんですけど編
- おもうてたより、乙女心は難しいみた
いなんですけど ————— 314

おもうてたより、がっつりプロローグなんだけど

皆さん、いきなりですがTSFって言葉の意味が分かるでしょうか？正式にはTSF—
|transsexual fictionと呼ばれるもので、その言葉がさすのは異
性への性転換を扱うフィクション。つまりは男の子が女の子になったり、女の子が男の
子になったりする事を主軸にした物語をさすものだ。

TSFというジャンルの歴史は意外にも古く、古代ローマ時代には『転身物語』など
という叙事詩が作られたりしてゐる。

近代においては医学的な性転換モノに始まり、ファンタジー、超科学、スピリチュア
ル、病氣、体質などなどetc——そういった様々な理由付けからなる性転換モノ
が存在するわけだ。

勿論それはあくまでフィクション。

空想上でのみ起きる超現象。

目の当たりにする事なんてないだろう。

そう、本来それは空想上でのみの出来事——の筈なのだ。本来なら。

「んあ?」

甲高いジリリリリという音に瞼を開ければ、目の前に七時を指す卓上時計が目についた。重い体を持ち上げ窓へと顔を向ければ、遮光カーテンの隙間からさす光の筋が見える。

ぼんやりとした頭で時計を眺め、七時という時間が頭に染み込んでくると、オレの体は布団の中から飛び出していった。

遅刻するやん。

怒り狂う担任である林ちゃん34歳独身彼氏募集中の姿を脳裏に浮かべ、酷く焦りながらパジャマに手をかけ——ふと思いついた。

「いや、まて。卒業したやん」

枕元にあつたスマホを手にして画面を開く。

ロツクをといてアルバムをタッチすれば、卒業式の時にとつた写真がそこにはあつた。こちらを呪い殺すかのような殺意の視線をむける林ちゃんの写真がいやに目につく。現在進行形で呪われてそうで怖い。怖いよお。

しかし、そうなると何でこんな時間に時計が鳴ったのか。休みの日はしつかりとア
ラームを止める派のオレがそんな間違いする訳がないのだ。

不思議に思っていると背後から扉を開く音が聞こえてきた。

「——ゆたか」

不意に掛けられた声に振り向くと、見慣れた仏頂面のデカブツの姿があった。

「おつ、高虎。おはよ。今日もデカいなあ。また伸びたか？そろそろ天井に頭つく？」

「おう、おはよ。あのな、もう直ぐ19だぞ。そうそう伸びてたまるか」

高虎と呼んだそいつはオレの幼馴染だ。

身長185cm（去年は）、体重80kg（去年は）、視力は両目とも2,0（去年は）。ガ
タイは良いし目付きがちよつと悪い事を差し引いてもそこその顔してるのだが、常に
仏頂面な為モテた試し無しな生粋のチェリーボーイ。

母親同士交流があつたので、それこそバブバブ時代から顔を付き合わせていた筋金入
りの幼馴染である。

物心がつくころにはいるのが当たり前のやつで、オレの幼少期の記憶はこいつと遊ん
でるのが大半だ。そしてそれは幼稚園に入っても、小学校に上がっても、中学校に上

がっつても、高校に上がっても殆ど変わりなく、オレ達は馬鹿やって毎日を楽しく過ごしていた。

そう、ただの幼馴染として。

じつと高虎に見つめられ、オレは何故目覚ましを掛けたのか思い出した。

「……ああーお弁当か」

思い出したそれを口にする高虎は呆れたように溜息をついた。何だか最初から期待してなかったとでもいうかのような塩対応だ。いらつとする。

「なんだよお……」

「初日からこれだと先が思いやられてな。昨日も言ったが無理しなくて良いぞ。食堂でテキトーに済ますから」

そう呑気に高虎は言ってくるが冗談ではない。

そんな事したらどうなるか。

「お前がどうだろうと知ったことかっ!! やらないとオレが怒られるだろうが!! マイマザーに!! お昼にちゃんと食材使ってるか冷蔵庫チエックに来るんだぞ!! 聴取された時とか、バレたらどうしてくれる!!」

「気持ち良いくらいに自分本意だな、本当に。はあ、じゃ頼む。というか、冷凍食品とか詰めてくれりゃそれで良いからな? また何焼か分からないのは作るな。流石に食えな

「い」

ほ、ほほう。これはこれは。ははっ……馬鹿にされてる、馬鹿にされておるわ。このオレが、まるで火を使う事を許されぬお子様扱いよ。

「良からうっ!!そこまで言うならっ、貴様の好物であるだし巻き卵をつ!ああっ!作ってええやろおうじやないかあああつあ!!目にももの見せてくれるわああ!!」

「なんで歌舞いてるんだ?ああ、走るな、走るな。危ない。八艘飛び止める。……っか、だし巻き卵も止めろっ。まだ懲りてなかつたのか」

フライパンをコンロに叩きつけ、冷蔵庫から卵パックを取った所で高虎にがっつり拘束された。

熱意だけは買ってくれるそうだ。

結局冷凍食品とご飯をテキトーに詰め、お弁当は完成と相成った。個人的に納得はしていないが、高虎は当分これで良いらしい。成長を期待することのこと。

蓋を開けて改めて見てみるとハンバーグとか唐揚げとか、肉類が敷き詰っててやっぱり納得出来ない。なんか茶色いだらけの弁当とかうんと思ってしまう。うん?本当に良いのだろうか?

なんか、おもうてたんと違う。

想像だと、こう、なんていうか、色んな色があつて、お洒落ーみたいな感じだったの

だ。意味もなくパプリカとかいれたい。今手元にないけど。

「せめてハートマークくらい入れとくか？」

「その手の一味唐辛子は置き、馬鹿」

ハートマークはお気に召さないらしい。

恥ずかしがり屋だな、こいつは。

高虎が作ってくれた半熟の目玉焼きとウインナーの朝食を食べ終わる頃、時刻はすっかり高虎の出発時間。

なのでさっき丹精込めて作った弁当を渡し、玄関でお見送りしてやる。

「げっ、元気でな、高虎・・・！」

「何処に行くんだ、俺は。戦地か？」

「向こうについたら、落ち着いてからで良い、手紙書くんぞ・・・うう。スマホみて、待つてるから」

「本当にいるか、それ？お前にメッセージ送って、返ってきた試しがないんだが」
いつまでもそうしてると遅刻してしまう。

オレは優しさで不満そうな高虎の背中を押し、心を鬼にして玄関から外に出してやる。

ついでにゴミ袋も渡してやった。

曜日も考えてちゃんと燃えるやつだ。

「ゆたか」

玄関を閉めようとした所で声が掛かった。

不思議に思つて手を止めると、高虎が仏頂面のまま近づいてくる。何事か？とぼんやりしてたら、ゴミ袋に目がいった。いや、正確に言えば、そこに入っていた『クリームたっぷりプリン』と書かれたプリンの蓋だ。脳裏に昨日食べた高虎のプリンの姿が浮かんできた。甘党の高虎がとっておいた、そのプリンの姿が。

「ひよっ!?ちよっ、まてまて!怒るなよ!うつかりしてたつていうの?!忘れてたつていうの!?でも今日代わりのやつ買つてくるつもりだったんだよ!あいむそーりー! ジュヌレパフェエクスプレーー!スクーズイ ノン ロ ファット アップスター! エントシユルディグングー!!」

「?なんの話で何処の言葉だ。またお前は無駄な知識を・・・まあ、良い。動くな」
「ひいえっ!」

思わず目を閉じると、オデコに温かくて柔らかい物が触れた。びっくりして目を開けるとオデコに高虎がちゅーしてきていた。

「あつ、い、いきなり、なんだよおー」

「悪い、あんまりにも可愛くてな」

「かわつ、かわわ、可愛い? . . . お前、本当趣味悪いなあ」

「そうか? でも仕方ないだろ。俺はそういうお前が好きなんだから。じゃいつてくる。留守番よろしくな」

そう言うが高虎はもう一回オデコにちゅーして出掛けてしまった。触れられた場所が何だか少し熱い。きつと拒否反応が出てるせいだろう。後でウエットティッシュでフキフキせねば。

それにしてもつくづく思う。

あいつは本当に趣味が悪い。

オレなんかを、嫁にするんだから。

「——ふう、さあてと、高虎も出掛けたし . . . ゲームでもすつかなあ!!」

これは男だった前世の記憶を持つオレ『子宝ゆたか♀』と『子宝高虎♂』（旧姓・藤崎高虎）の、おもってたと違うTS結婚生活、その実録を綴った物語である。

「ゆたかあああああ!!!あんた家事もしないで、朝から何してのおおお!!」
「きやあああああ!!マイマザーさん!?!なんでっ、ちよ、早くない!?!まってまって!セーブ
するか——ああああああ!!!」

おもうてたより、旦那がべつたりなんだけど

物心がつく頃、オレは前世の事を唐突に思い出した。

丁度高虎と公園でダンゴムシを転がして遊んでいた時で、スバババビューン的にかつての自分の記憶が頭に入り込んできて頭痛が発生。あまりの苦しさに高虎へベンザプロツ●を要求したのだが、救急車呼ばれてしまったのは良い思い出。あの時は大変だった。

前世のオレは男だった。

覚えてる限りだと名前こそ分らないが、何処にでもいそうな高校生くらいの思春期男子だったらしい。彼女はいないし、朝起こしに来てくれる美少女幼馴染も、妙に若い義理の母も、甘やかしてくれる義理の姉も、ツンデレだけで実はお兄ちゃん大好きな義理の妹もない普通の家庭の普通の男の子。・・・まあ、仮にそんな者がいたとしても、趣味がかなり強めのサブカル系だったので、先は無かつたらうなとは思うが。

日曜日の朝から児童むけのアニメみてたり、ゲームのキャラを嫁と呼んだりしてたら、そらあかんですよね。

そんなオレは今世、普通にきやわいい女の子だ。

名前は子宝ゆたか。マザーのお可愛い顔と艶々な黒髪、パピーのキラキラした青目と白い肌を持って生まれた清楚さとイケイケさが融合したハーフ系女子である。

皆も分かるだろうが、オレはモテた。

幼稚園の頃からモテた。めっちゃモテだった。

だってそうだろう？ブルーアイズホワイト大和撫子なんだよ？そらモテるよ。艶々の黒髪、おめめはぱっちりサファイアブルーなんだから当然だよ。

何故か男子より女子人気が強かったけど・・・おかしいなあ。

小学校に入ってから下駄箱に手紙が入ってるなんてことよくあった。高虎にはよく自慢したものだ。

まあ、半分は女子からのラブレターで、半分は男子からの果たし状だったけど・・・高虎にはよく爆笑されたなあ。

そんなある意味モテモテだったオレだが、誰かと付き合った事は一度もない。というのも、気持ち的に微妙だったのだ。元の記憶があるせいで男を恋愛的に好きになれなかった。TSものではよくガールズラブに発展してる話があるけど、あれはあれで相当気合い入ってないと出来ない事なのだ。世間体って一番のハードルだしね。創作物は創作物ということなんだろう。

それで色々と踏ん切りつかなかったオレは一生フリー宣言をしたのだが——それが良くなかった。その言葉が変に両親を刺激してしまっていたのだ。

結果、運命の大学入試を綺麗さっぱり全て落ちたオレに両親が突きつけてきたのが「旦那用意してやるから結婚しろ」という一言であった。

当然拒否った、全力で拒否った。

今風に無理ポヨと叫んでおいた。

けれどマザーは「こんな馬鹿大学に落ちといて、選択肢があると思うな!!馬鹿娘!!見守りタイムは終わったわ!!戯け!」とこれを一蹴。大体味方になってくれるパピーも優しい顔で「素敵ナボーイヲ紹介スルヨ。安心シテ、マイプリンセス」と敵対宣言。

抵抗虚しく捕らわれ、お見合い祭り開催まで残り僅かとなった所で、『お祖父ちゃん家に逃亡計画』の相談に乗ってくれていた高虎が言ってきた。

「なら、俺の嫁になるか?」と。

高虎にはオレの前世の話をしてる。初めて話した時はポカンとしてたが、今ではすっかり一番の理解者で色んな面で助けて貰っていた過去があった。

だからその時は事情を知って親友として助けてくれようとしてるのだと考えた。高虎にバツ一つつけてしまう結果がくるかも知れないのは申し訳ないと一瞬思っただけど、ありがて——と一つ返事で頷いて茶色い紙にスポポーンと判子を押しした。これでひとま

ず時間は稼げる！なんて思いながら。

だから……だから、まさか、高虎がオレの事、マジにラブだとは思わなかった。

そんなオレは現在、高虎とさんえるでーけーのマンションで二人暮らしをしてる。高校を卒業すると同時に実家を出る高虎についていく形でお引越したのだ。高虎の好意に気づく前だった事もあって「別に別居でよくね？」とも思ってたけど、マザーがそこらへん煩かったし、高虎もそうするつもりだといっているのでそうした。

ん？さんえるでーけーなんてお高そうな所、学生の方際でどうにかなるのか？良いところを目をつけたな。君は。

そう、最初は高虎の財力にみあった普通の場所だった。

引越しを決めた当初、オレの引越し先は高虎が借りる予定だった一人暮らし用のワンルーム。でも流石に二人で生活するには狭いだろうと部屋を探し直していた所、事情を聞いたお祖父ちゃんが持ちマンションの一室を格安で貸してくれる事になったの

である。

え？ そうなのよ。自慢じゃないけど、家のお祖父ちゃんマンションとか普通に所有してる金持ちなんよ。未だになんの仕事してるのか分からないけど兎に角リッチーな人で、遊びいったらお小遣いくれるし、お年玉とかお祖父ちゃんだけで六桁とか当たり前だった。

よっってお祖父ちゃん大好き。

高虎的にはお祖父ちゃんのマンションに住むのは嫌そうだったけど、お祖父ちゃんと二人きりで男の話し合いをした結果——高虎の方が折れてマンションに住む事になっって今に至る訳だ。

『次の新婚さーん、いらっしやいませー』

「いらっしやいませー」

洗濯物に太陽の光が降り注ぐ午後。

ソファーに寝そべりながら、落語家のおっちゃんやんが新婚さんをあの手この手で弄り倒すバラエティー番組をみていると、不意にチャイムが鳴った。

なんじやるかとドアホンのモニターを覗けば、マンションの入り口の所で両手に買い物袋を提げた高虎の姿があった。なのでマイクのボタン押し声を掛けてみる。

「いちらHQ。どうした、タイガー01、おーばー」

『……あー、こちらタイガー01。H.Q.、鍵を開けてくれると助かる。オーバー』

いつも高虎が鍵を置いてる所をみれば、キーチェーンのついたそれが目に入った。どうやら忘れていったらしい。家はオートロック様。出る時はスツと出れてしまうせいもあって、高虎はアホだからよくやるのだ。オレも本当にたまに忘れる。たまに。

「タイガー01、情けない限りだ。いつになつたらお前はオートロックを理解するのか？ 減俸だ、おーばー」

『そつくりそのまま返す、H.Q.。ゴミ出しにいつて部屋に戻れなくなる事八回、忘れたとは言わさないぞ。オーバー』

「……小さい事を気にする男は嫌われるぞ。オレは嫌いだ、おーばー」

『そろそろ開けてくれ、腕がきつい』

ボタン操作で鍵を開けてやれば『助かった』と一言いつて高虎はカメラの端に消えていった。

玄関で少し待っているとドアがノックされる。スコープを覗いてみれば高虎の仏頂面があつた。

「合言葉をいえ」

ドア越しにそつと囁く、本物であれば言える筈だ。

しかし返つてきたのは静寂。

もしや偽物……!!おのれ本物の高虎を何処にやったのか!許せぬ!

「子宝ゆたか、高三年の時の全国模試の順位は——」

「よっし!!本物だな!さあ入れ!」

「一応、羞恥心はあつたんだな」

順位はいけない。

それだけはいけない。

風邪で調子が悪くて仕方ない所はあるけど——だからといって言っていないものではない。

お口チャックだ、高虎よ。

高虎の荷物を半分持つてやって部屋に戻り、買ってきた物で冷蔵庫に入れなきやいけない物をしまつてく。

小さい事かも知れないけど、この作業も大分様になってきたと自画自賛である。初めの頃は何処にしまいか悩んで冷蔵庫の兄貴から「はよ閉めるや!」と言わんばかりピーピー鳴られたものだが、もうそんな事はない。いまやロボットのようにならぬ様に正確に迅速にしまえる。

「ゆたか、それは冷凍庫に入れてくれ」

「知ってるし——!」

「じゃあ、最初から入れてくれ」

高虎のイヤらしい注意を聞いていると、『ピーピー』という電子音が聞こえてきた。勿論、冷蔵庫の兄貴からだ。

「あつ、な、鳴られた、だど!? 高虎のせいだからな! 謝れえ!」

「? そうか、なんか悪かったな」

「違う、オレじゃない! 兄貴に謝れ!」

そう言うとき高虎は遠くを見る目になった。

「……俺が育斗さんに謝ると、かなり面倒な事になると思うぞ。本気か?」

「そつちには謝らなくて良い。面倒だから。冷蔵庫の兄貴に謝れ」

「勝手に兄貴増やすな。育斗さんだけでも手に余ってるんだぞ」

・ ・ ・ うん、そうな。

かなり面倒臭いシスコン野郎だからな、やつは。

冷蔵庫にしまい終えたらまた定位置に戻りテレビ観賞を再開。さつきみたいにしてファアに寝転ぼうとしたけど、高虎が隣に座ってきたので大人しく抱き枕を抱いてデレーンと座しておく。

『旦那さんホンマかいなあー』

「お前またこれ見てたのか……面白いかこれ? というか、こんな時間までやってたか

「？」

椅子から転げ落ちる司会の人を見てたら、そんな事聞かれた。

改めて聞かれてもなんか困る。めっちゃ面白れえーとか思ってた見てる訳じゃないからだ。

「スペシャルらしいぞ。てか他に見るの無いし？なんか見たいのあんなら良いぞ、チャンネル変えても。あつ、ゴルフは駄目だぞ。サッカーならまだ良いけど。ゴルフ見るなら、もうお前とはやってられない。離婚だ」

「重いな、見ただけで離婚か。まあ、取り敢えず今はゴルフに興味はないな。一昨日録画した映画見たいんだが」

「あー、最後の方、ゴリラがでつかいトカゲ倒すやつな。キングゴリラのなんだっけか？」

「ああ。．．．さらつとネタバレしたな、お前」

．．．ふむ。

優しいオレはリモコンをポチって『キングゴリラ骸骨島の巨猿』を再生してあげる。高虎の何か言いたげな視線が気になるが、それは放っておく。．．．見ないで欲しい。わかった、ごめん。ごめんってば。謝るから。

反省を込めてCMスキップ係に就任したオレは高虎の隣でぼーっと映画を眺めた。

一回目はスマホ片手に見てたので結構見落しだらけだった。知らないシーンがいっぱいである。これもうほほ初見じゃんね。

淡々とCMをスキップしていると、その内ふらっと立ち上がった高虎がお菓子を持ってきた。映画のお供ポップコーン先生である。飲み物も欲しいなーと思つてたらお茶のペットボトルとコップも持ってきてくれた。もつとも、炭酸の気分だったので褒めたりしないが。

「オレ、コーラ」

「太るぞ、お茶にしとけ」

「ぶろううううう」

お茶やお菓子の準備を終えると、高虎はソファアームに座り手招きしてきた。股を大きく開いた様子にピンとくる。だつてつい先週もやられたのだ。

「お前、またオレを抱き枕にするつもりだな。イヤだ！あつっ苦しい！」

「買い物代わりについてやつたら」

「気前よく行くなどは思つてたけど……そういう事か。この野郎お。」

「……しかたねえな」

別に断つても良い。どうしても頼んだ訳じゃないんだから。ただ、ここで断ると今度買いい物についてくれなくなる可能性が出て来てしまう。基本的に家事担当はオレだ

から、それは必然自分の仕事を増やす事になってしまふ。それはイヤだ。働きたくない、のんびりしたい。

だから、仕方なく、仕方なく座るのだ。

言われた通り股の間に腰掛け、高虎へ体重を掛ける。

すると又イグルミが如くぎゅつと抱き締められた。

やっぱり暑苦しい。

「やつてる俺が言うことじゃないんだが……こういうの気持ち悪いとか思わないのか。俺は兎も角、お前からしたら同性に抱きつかれてる状況だろ？」

「ん？んーんー暑苦しいからイヤだけど、別に気持ち悪いとかはないなあ。……昔から一緒にいるし慣れだろ。ていうか、ちゅーしといてそれ言うか？どっちかって言ったらアレの方が違和感あるぞ」

「はは、まあな。……慣れか……。じゃあ、育斗さんとこれ出来るか」
「止める、気持ち悪い」

兄貴とかマジ無理。オレの全鳥肌が立ち上がってしまうわ。

想像してゾクゾクしてるとさつきより強く抱き締められた。ちよつと苦しい。

「ちよつときついで。なんだよ？」

「いや、何でもない」

「??」

毎週毎週、こいつは良く飽きないもんだな。
そう思いながらオレはまた映画を眺め始めた。
時折流れるCMをスキップしながら。

おもうてたより、愛されてるみたいなんだけど

四月も終わり迎え、ゴールデンウィークも目の前に迫った今日この頃。

夕飯を食べ終えたオレは壁に掛かった時計を眺めた。

時刻は夜の7時45分、ぼちぼちな時間だ。

「マザー、そろそろ帰っても良いんだよ?」

早く帰れと願いを込めて、そつと目の前に座り縫い物をしてるマザーに声を掛けてみた。マザーは手を休める事なくこちらをチラ見すると、また手元に視線を落とす。

はい、帰る気ないのが分かりました。

ゲームはお預け決定です。

「……ゆたか、貴女そんなに暇そうなら手伝いなさい。女の子が縫い物の一つも出
来ずにどうしますか」

「古くない?今や女が働く時代だよ?——ナンセンス!まったくもって、ナンセンスっ
!いつまでも悪しき風習に従ってはいけなさいよ!未来を見ようぜ、マイマザー!!」

「働く能力がないから、せめて縫い物くらい覚えなさいと言っているの。ひねた事言っ
てないでやりなさい。ピンタしますよ」

ひいつ……!

オレはマザーから差し出されたソーイングセットを素直に受け取った。怖かったからとかじゃない。純粹に身の安全の為にである。しかし今時手縫いとか。

「……で、これ何を作れと?」

貰ったのは児童向けにデフォルメされた乗り物が沢山ちりばめられた可愛い布。何か作ったとして、それを誰が使うのか。ファンシー過ぎる。

「お弁当ポーチを作りなさい」

「お弁当、ポーチ……誰に?」

「翔大くん、覚えてるでしょ。貴女が前にポーチ作ってあげた子よ。幼稚園で使ってる前のやつがそろそろ寿命だから、新しいの作ってあげなさい。暇なんだから」

「ああ、しょーくんか」

翔大くんはマザーの妹の子、つまり従兄弟だ。

実家にいた頃はたまに遊びにきていたので、帰宅部のオレはよく相手をさせられていた。

しかし、前に気紛れであげたボロポーチ、まだ使ってるとは驚きである。

「別に作るのはいいけどさ、普通にマザーのやつあげれば良いじゃん?」

「一回あげただけど、貴女のが良いって聞かないみたいなのよ。あんな”ゴミ”みた

いな物の何が良いのか……貴女も大概だったけど、子供って本当に分からないわね」
「可愛い娘の作った物、普通ゴミとかいう？酷くない？傷つくんですけど。褒めて伸ばそうとかしない？」

「あら、この程度で傷つく柔な心なんて持ち合わせてたの？驚きね。0点の答案用紙を紙飛行機にして窓から投げ飛ばし証拠隠滅を図った、真性の馬鹿の言葉とは思えないわ。貴女も成長したのね、お母さん嬉しいわ。それとゴミはゴミでしょ。悔しかったらもう少しマシな物作りなさい」

夜だからご近所さんに気を使って怒鳴らないのは心臓に良いけど、これはこれで激しく胸に突き刺さる物がある。辛い。いつそ怒鳴ってくれた方がいい。辛辣過ぎないかな、マイマザー。泣くよ？そろそろ。

あー、はいはい。

やります、やりますよ。

だから、そんな目で見ないでっ。

チクチクヌイヌイする事30分程。

折り返し地点に辿り着いた所でスマホが鳴った。

覗いて見れば高虎からメッセが入ってる。

「高虎くん？なんて？」

「なんでマザーに教えなくちゃなんな——」

ずいつ、とマザーが顔を近づけてきた。

凄いい笑顔で。

「——なんて？」

「……え、えつと、『遅くなるから先に寝てていい』つて。よく分からないんだけど、サークルっていうの？それがアレなアレで遅くなるつて」

「サークルの歓迎会か何かでしょう。高虎くん、なんのサークルに入ってるの？」

「いや？知らないけど」

突然スッパーンと頭をひっぱ叩かれた。

痛いし、目がチカチカする。

「なんで旦那さんのサークルぐらい把握してないの？普通聞くでしょ？高虎くんに限ってないと思うけど、悪い男なら別の女性と逢い引きくらいしてるわよ」

「だ、だって、別に気にならなかつたしいー。オ、お、おー……わたくしには関係ないしいー」

マザーにめっちゃジト目で見られた。

危なかった、やられる所だった。

間違つてマザーの前で、「オレ」なんて言った日にやあどうなる事か。まあ、まず間

違いなくゲーム売られるな。

「……はあ、普通気になるものでしょうに。束縛しろとはまでは言わないけれど、多少は手綱を握るものなのよ。……本当に大丈夫なの、貴女達。あの時は勢いでお婿さんに貰っちゃったけど、なんか心配だわ。特に貴女が」

「んな事言われてもなあー」

「私はてつきり、貴女がまた馬鹿な相談して、高虎くんがそれに付き合ってるだけだと思っただんですけどね。だって貴女達、結婚するっていうわりには、態度がいつもと変わらないんだもの」

「……おおう。」

「なんだ、マザーは超能力か。」

「何故に分かった。」

「さて、今日の所はもう帰りますからね。高虎くんには宜しく言っておいて頂戴」

「マジか、気をつけてねえー」

「あれだけ入れるのを渋っておいて、随分と早く見送るのねえ貴女。何かやましい事でもあるのかしら?」

「なっ、なにもおおう?!!」

「……高虎くん、この子の何処が良いのかしら。ポーチは作っておきなさいね。明後

日とりに来ますから。それと、たまにはパパに顔見せに来なさい。じゃないと仕送り止めますからね」

たまにつて……まだ家出てから一ヶ月ちよいなの。どんな頻度で顔出せば良いのだろうか？一週間に一回？多くない？

じつと探るようになってたらマザーと目が合った。

「——嫌になったら、無理しないでいつでも帰ってきなさい。良いわね、ゆたか」
怒つてない優しい目。

久しぶりに見たそれに、オレは頷いておいた。

「……うん、分かった。……でも、大丈夫だと思うけど。高虎だし」

「ふふ、そうね。高虎くんだものね。それじゃあね」

マザーの帰りを見送り、オレは縫い物を再開した。それから大体一時間程度の時間を
使いお弁当ポーチが出来上がった。オレは出来上がったそれを天井の照明に掲げる。
某妖精族出身の勇気の証を持つ少年のように。

でっでででーん。

「……」

なんてアンバランス。大丈夫だろうか。

まあ、馬鹿みたいにがちり縫ったから多分壊れたりしないと思うけども。

まあ、いいや終わり。

これは終わりー。

それから二時間と少し。

寝惚け眼を擦りながらゲームしていると玄関の開く音が聞こえてきた。迫る敵をマシンガンで蜂の巣にした後、ゲームを一旦ストップして顔を覗かせれば、妙に顔を赤らめた高虎が丁度靴を脱いでいた。

「おかえりー思ったより早かったなー」

「ああ、ただいま。まだ寝てなかったのか」

「ん？なんだこの臭い：：ははん、飲んだな？悪いやつだ、未成年の癖に。ひゅーひゅー
大学デビューー！張り切ってるうー！」

「子供か。というか飲んでない。空気に酔ったのは認めるが」

フラフラしながら上着を脱いだ高虎は「風呂は？」と聞いてきた。勿論風呂くらいやっつてあるのでゴーサインを出しておく。

「泡風呂にしといたぞ!!」

「あーーそうか。この間買ったやつだな。．．．なんでよりもよって今日だ」

「なんだよ、入れ直すか？」

「いや、勿体ないだろ」

そう言った高虎だったが、いざお風呂へ入ると「予想以上にアワアワだな」と盛大な愚痴を溢してきた。

・・・哀想だから、今度から一言断つてから入れようか。いや、オレの気分が勝つたら結局入れるけどもさ。

それから程なくして風呂から上がった高虎が「腹減った」などとのたまるので、マザーが用意した夕飯を温め直して出してやる。テーブルに並べて箸を渡せばモクモク食べました。どうやら飲むのも食うのもまともに出来なかつたらしい。

「新人って飲まされたりするもんじゃないのか？」

「ガチガチの法学部の先輩に飲酒を止められてな。一滴も飲まなかつた。まあ、最初から飲む気がなかつたから助かつたが・・・」

「それならご飯でも食べてれば良かったのに」

「経済学部先輩に捕まってな。飯食ってる暇がないくらい延々語られた」

「あーうん、どんまい」

モクモクしてる高虎をテーブルに頬杖ついて眺めていると、さっきのマザーの姿が頭を過つていった。

だから、ちよつと聞いてみた。

「なあ、高虎」

「……どうした？」

「オレが実家に帰つたらどうする？」

「？好きに帰れば良いだろ。まあ、遅くなるようなら連絡しろ、迎えに行く。泊まる時も

早めに教えてくれ」

そういう事じゃないんだけど。

なんて言つたら伝わるのか……ううん？

言葉に悩んでると高虎が何かに気づいた顔をした。

「……ああ、そういう事か」

テーブルを挟んだ反対側から手が伸びてきて頭を撫でた。いつもなら撫で撫でで終わる所なんだけど、今日は妙に撫で撫でしてくる。撫で撫で撫で撫でくくらいだ。

髪の毛グシャグシャになるから止めて欲しいなあー。

「取り敢えず、迎えに行く」

「ん」

「それでお前の話を沢山聞いて、帰ってきてくれるよう沢山頼む」

「ふうん、ただで？」

そう聞くと高虎が笑った。

「花束でも持っていくか？」

「どうせなら美味しい物持っていこい」

「分かった、そうする」

それから二人でゴールデンウィークの予定の事で話した。のんびり過ごすのかと思つてたけど、どうやら色々考えていたらしい。まあ、事前に頼まれてたから、予定だけは空いてるから良いんだけども。

「なあ、ゆたか。もし俺が出てたらどうする」

「放つて置く。その内帰ってきそうだし」

「・・・喜びづらいな、その返しは」

おもうてたより、デートつて大変そうなんだけど

『俺はお前の事好きだぞ』

そんな言葉を聞いたのは高虎と暮らし始めて直ぐだった。夕飯を食べている時、何気ない会話の中で高虎は真顔でそう言ってきた。

『……?なんて?』

『繰り返しですが、異性として好きだぞ、と。だから別に気にするな。俺は好きでお前と結婚したからな。それよりお前の方が———どうした?』

『どどどどどどつ、ど、どうしたじゃねえ!!なんでそれを早く言わねえーんだあ!!いやあ!!犯されるううう!!公然と犯されるううう!!いやあああつ、チンコ突つ込まれるのはいやあああ!!』

『止めろ馬鹿。誰が犯すか』

結婚届けも出して法律上夫婦となっていた事もあつて、当時はメチャクチャ焦った。元男であるからこそ男の怖さは良く分かっているからだ。男は狼。それは言わずともしれた真理。どんなひ弱な奴でも、女に種付けしたくて仕方ないお猿さんなのだ。目の前に食べていい女体があれば、例えばブスであったとしても性的欲求をぶつけてくる物な

のだ。

そう思っていた。

だから即行でベッドの下に滑り込んだ。

籠城用にお菓子とジュースを持って。

『……おい、出てこい』

『出てきた所を襲う気だな!!騙されないぞ!!オレ、立て籠らせて頂きます!!』

『それ実家に帰るやつだ。なあ、騙さないから出てこい。何より手を出すなら、とつくに
出してるだろ。頼むから出てこい。顔を見てちゃんと話がしたいんだ』

『約束するか?手を出さないって』

『ああ、約束する』

そうして約束を取り付けベッドの下から這い出たオレは——いや、オレ達は改めて
話合った。長い時間を掛けてゆっくり。

高虎の気持ちとオレの気持ち。

これからの事も。

話し合いの結果、高虎はオレが許可するまで性的な事はしないと約束してくれた。そ
の代わりに頬やおデコへのちゅーとか、ハグとかは許してしまったが。

まあ、そもそもこんな事に巻き込んだオレが悪いのだ。助けられてる所が大きいし、

対価としてそれくらいはなという感じだ。

それにどちらかと言えればわりを食ってるのは高虎の方だ。オレが領かない限り、童貞で一生を終える可能性があるのだから。高虎の良心を信じるのであればだが・・・。

そんなオレは今、高虎の運転するレンタカー殿でお出掛け中で、絶賛渋滞に巻き込まれ中だ。俗にいうドライブデートという奴だ。動かないけど。

本当は泊まり掛けのプチ旅行を考えていたらしいが、宿がとれなくて断念したとか何とか。オレとしては貞操の危機があるので日帰りで全然良いのだけでも。

さつきから動かない車の列を眺めるのを止めて、手元のスマホを見た。起動させてる地図アプリには、目的地まで後1時間と表示されている。15分前も後1時間だった気がするけど、気のせいという事にしておこうか。

「映画でも借りておけば良かったな」

ポツリ、高虎が呟いた。

顔を見ればいつもと変わらない仏頂面だったけど、オレには分かる。少しだけ不機嫌そう。渋滞の事もあるだろうけど、多分宿とれなかったのも気にしてるんだろう。

「イライラすんなよ。その内抜けられるだろ？」

「まあな。というか、お前に諫められるとは思わなかった」

「どういう意味だ、おい」

まああ、どちらかと言えばオレのが堪え性ないけどな。それくらいは分かる。でもだからといって、いつもそうだと思われるのは心外というものだ。まったく。

「てーか、いいな。車運転出来るの。オレもお前と一緒に車の免許とつとけば良かったなあ。夏の合宿だっけ？先生呆れてたよなあ、追い込みの時期にーって。でもお前ずっと言ったもんな、18になったら即行免許証とるって」

「ああ、そうだな。車は、まあ、ずっと憧れてたからな。ただ思い返すと、俺にはあの時期しかなかったんだとは思うが」

そういうと高虎は何処か遠くを見てるような目をした。運転中だというのにだ。まったく、危ない奴だ。

頬つぺたをつついてやれば、こっちをチラ見して目を細めた。

「余裕がありそうならお前の事も誘ったんだが。去年の夏は大変そうだったからな、お前。夏期の勉強合宿に補習、塾と家庭教師も雇ってたんだっけか？夏祭りに来たときゲツソリしてたもんな」

「地獄だった。．．．あれは地獄だった。．．．しかも報われない地獄だった」

憎しみと悲しみを込めてそういうと、隣で運転していた高虎が鼻で笑ってきた。

「それは馬鹿なお前が悪い」

うむ、成る程。

分かった。

よかろう、戦争だ!!この野郎おお!!

しりとりや古今東西で鎬を削り、ちようどオレが記念すべき十敗目をきつした頃。渋滞から抜けた車はその速度をあげて走っていた。

ビュンビュン変わっていく風景。

電車とはまた違った風情があるな。

嫌いではない。

「よし、なぞなぞしよう」

「何がよしか分らないが、良いぞ。俺が出すか?」

「いや、オレが出す!さっきの借は必ず返すからな!!1000人中1000人が答えられな

「いような難問を出してやる!!」

「そんなにか。なら、答えられたら何か賞品をくれないか?」

「賞品……」

そんな事言われても手持ちのバッグには大した物が入ってない。ハンカチとか化粧品とか財布とか……うむむ。

「紙ナプキンを授けてしんぜよう」

「他の物にしてくれ」

紙ナプキンは駄目だった。

「百円」

「生々しくなるから止めろ」

現金も駄目だった。

バッグの中身を確認しながら悩んでると「物じゃなくても良いぞ」と高虎が言ってきた。

物じゃなくても良い? 成る程。

「正解した時は手放しで褒めてやろう。一年ぶりに会う愛犬くらいによーしよしよししてやる。どうだ」

「……ちよつと悪くないなど、そう思ったのは認める。でも出来れば別の方が良いな」

「別のー?」

高虎は自分の額を指でトントンする。

意味が分からず首を傾げれば笑われた。

「俺がいつもしてるやつ、してくれないか?」

「ああ、ちゅーしろつてか。そんな事で良いのか。別に良いぞ。それくら——

ちよつと待て」

「待たない。了承したの聞いたぞ。問題出してくれ」

こ、この野郎ううう!!

なんたる策士!こいつもしかして天才か!?

日頃当たり前のようにされるから、なんだそんな事と一瞬思ってしまった!こいつこ

こまで読んでいたのか!?!諸葛孔明の生まれ変わりか!?

それりや、あれだけ毎日ちゅつちゅされてれば慣れたよ!慣れたもんさ!もうウエツ

トティツシュで拭かないさ!放置するくらいさ!

でもそれはあくまでされる事に慣れただけで、するのはまた別だ!次元が違うんだよ

!どれくらい違うかと言えば、ワニワニパツ●ンのワニをピコピコするのと、サバンのクロコダイルにショットガンぶちこむくらい違う!!もう、もうつ、うきゆううう!!

エンジン音とクラー音と音が聞こえる車の中で、オレは考えた。今持ち得るなぞなぞの

中で、最新にして最強のなぞなぞをだ。そこに優しさはない。無慈悲にして無感情。勝つ、それだけ。

「スマホ様！お知恵をおかし下さいませ！」

「まあ、そうなるだろうとは思った」

ちよつとポチポチして最強の力を得たオレは高虎へと振り返り人差し指を突きつける。

「——でん！問題です!!」

「ああ、こい」

「10を二つ足すととても早く動く事が出来て、10を二つ引くと全然動かなくなるもの、これなーんだ」

「『車』合ってるか？」

「・・・」

こ、この野郎・・・オレの渾身のなぞなぞを。

「正解だけとお・・・」

「ネットで調べたやつ出せば良かったろ」

「だって、それは反則だろ・・・くう」

「お前のそういう所、可愛いと思うぞ。後な、それ前に聞いたやつだ」

「なんだとお!?!ならチャラだ!!オレはのーかんを要求する!裁判長!!」

「ははっ、俺が裁判長で良いのか?棄却するぞ、普通に」

なにおうう!?

駄目だ!棄却するを棄却する!のーかん要求だ!!

あつ、なに笑ってんだ!!こつちの気も知らないでえ!

「おおー!これは綺麗だな!」

「本当だな。写真とは大分違う気がする」

そんなこんなでちゅーを回避したオレは目的地である湖のある公園に辿り着いた。ゴールデンウィークという事もあって人で賑わってるかと思っただけ、公園内はそこまですでもなかった。道路は馬鹿混みだったが。

天気予報では少し曇るかも知れないと言っていたけど、そこにあるのはカラッと晴れた良い天気。

なので予定通り来る途中で買ったお弁当を持って湖の周りを散策中である。

あまりこういう事はしたことなかったが面白いもんだ。

遠くに見える水面が光を反射してすごいキラキラ。

超りあるでヤバかった。これは見る価値あるなあ。

「正直家でゲームしてる方が良かったと思つてたけど、これは来て良かった。やっぱりたまにはリアルだな」

「まあ、あれはあれで見て面白いくけどな」

高虎は見た目のゴツさにも関わらず意外とインドア系だ。とは言つてもゲームとかはあまりしないし、アニメとかも見ない。小説を読んだり映画を見たりが大半だ。この間も糞難しそうな小説を読んでいた。

それにしてもオレがゲームやってると覗いて来る時はあるけど・・・面白いと思つたのか。

「見てるだけ派の気持ちは正直分からん。面白いか？やってなんぼだろ」

「面白いぞ。敵が出てくる度に体をビクビクさせる様とか、カーブ曲がる時に体が傾いてく姿とか——テレビの前でワチャワチャしてるお前見るのは」

「おう、お前がオレの事、馬鹿にしてる事だけは分かった」

「馬鹿にはしてない。可愛げだと思うぞ」

こいつう……こーいう事は言えば許されると思つてんじやなからうな。いや、元からこんなか。寧ろフォローしようとするだけマシか？前はさらつとデイスつて終わりだつたもんな。

あの日以来、高虎は少しだけ変わった気がする。

それは大きな変化じゃないけれど、ふとした時に気づくのだ。ああ、変わったなあつて。

具体的にどう変わったとかは言いづらい。

しいて言うならそれまでは男友達として接してくれてのが、女友達として接するようになったとかそんな感じ。嫌かと聞かれればそんな事もないけど、やっぱり違和感はある。

でも、直して欲しいとまでは思わない。

だつて前の高虎より、ずっと楽しそうに笑うから。

「——ゆたか、団子食うか？」

ふいに高虎がこちらを見た。

最近よく見るようになった笑顔と一緒に。

「ん？団子？いきなりどうした。湖より団子か？なんて風情のない奴だ。オレはガツカリだよ！こんな綺麗な湖を前に、もつとあるだろうが。こう、なんだ、うわあ、綺麗な

お水！美味しそうなお魚さんいそう！とか」

「風情のふの字もなさそうな奴に言われてもな。というか、どう行き着いたらそうなる。腹減ってるのか？・・・いやな、さつき看板見かけてな。少し行った所に茶屋があるみたいなんだ。甘い物嫌いじゃないだろ？」

甘い物は好きだ。

どれぐらい好きかと言われれば・・・どれぐらいだろうか？うむ？分からん。取り敢えず好きだ。

しかしそれよりも聞き捨てならん事があつた。

「はっ、茶屋？茶屋っていったか？」

「茶屋っていったな。どんな場所か分からないが」

「茶屋だああー！ーああ？！————行くに決まってるだろうが！！抹茶出るかなあ？こっ、カカカって泡立て機みたいなの掻き回してさあ！」

「欲望に忠実だな、お前は。抹茶好きだったか？」

「そんなに！ほら、行くぞ」

「ああ」

高虎の手を引いて歩く事少し、目的の茶屋が見えた。

思ってたより現代的な建物だったし、思ってたより混んでたけど、団子とジェラート

が美味しかったので許した。買ったお弁当も美味しかったし。

ドライブデートも終わったその夜。

風呂から上がるとソファでぐったりしてる高虎を見つけた。よっぽど疲れたのか揺すつても起きる気配がない。行きもそうだったけど、帰りの渋滞が相当効いたようだ。恐らくそれが止めだろう。

仕方がないので毛布を掛けてやった。

風邪を引かれても困る。看病なんて面倒臭い事はしたくないのだ。

「……今日はお疲れ様。ありがとな、そこそこ楽しかった」

元男にも二言はない。

約束通り高虎のオデコにちゅーしてやって、オレは部屋に帰った。慣れない事はやるものではないなど、暫くベッドの中でもモゾモゾしていたのは内緒にしようと思う。

おもうてたより、シスコンの来襲が早かったんだけど『前編』

ドライブデート以外特に出掛けず、ダラダラつと過ごしたゴールデンウィークも終わり——迎えた5月の半ば。

朝から絶好のお洗濯日和なその日。

いつも通り弁当を押し付け高虎を見送った後、洗濯物を洗濯機にぶちこみ、寝室から重たい布団を抱えてベランダへと向かっていると電話が鳴り響いた。魔王が降臨しそうな曲からマザーな事が分かる。

面倒に思いながらも何とかポケットからスマホを引き抜き、通話ボタンを押してから首の所に挟めばマザーの声が聞こえてきた。

「もーしもーし、マザー聞こえるー?」

『あつ、やっと出たわね。聞こえるわよ。なに、何かしているの? ガサガサうるさいけれど』

「布団干してるー」

『あら、ちゃんとやってるのね。そうね、今日は良い天気だものね。干しっぱなしにしな

いのよ、ちゃんと裏返すのよ。良いわね』

「分かつてるつてば、もう。てか、どーしたの？今日くる予定じゃないでしょ？」

『ええ、あのね、ちよつと前に——』

布団を抱えつつペランダに辿り着いた頃。

首に挟んだスマホから聞き捨てならない単語を耳にした。

「——はあ？兄貴が？」

思わず出た言葉に電話越しから溜息が聞こえてくる。

『兄貴？お母さん耳が遠くなったのかしら？』

「お、お兄ちゃん」

『よろしい。さつき育斗が帰ってきたのよ。心配してたわよ？貴女、育斗に何も話してなかったのね。ちゃんと自分から伝えるように言ったのに、まったく』

その口振りから大体察したけど、一縷の望みを込めて、一応念のために、もしかしたらと思つて聞いてみた。

「マザー、えつと……教えたの？」

『そりゃ教えるでしょう。家族なんだから。そろそろつく頃だと思つて——』

ピンポーン、と家のインターホンが鳴り響いた。

静かな部屋に音が木霊していく。

『——あ、着いたみたいね。そういう事よ。仲良くするのよ。また電話するわね——
——ッ』

「あれえ!? マザー! ねえ、ちよつ、マザー!? ママああ——! オレを一人にしないでえええ!! 嫌だああ!!」

切れた電話をかけ直してみたけど全然繋がらない。

恐らくマナーモードにしてるんだろう。こういう時のマザーはびつくりするほど連絡つかない。前は家電があつたからそつちに掛ければ出てくれたけど、もうその家電もなくなつてしまった。ちよつと前、壊れたと同時に解約してしまつてるのだ。

ピンポーン、と再びインターホンが鳴つた。

いつまでも放つて置く訳にはいかない。

それにもしかしたら A m a ● o n の宅配かも知れない。もしかしたらこの間ポチツておいた、ゲームのサウンドトラックかも知れない。いや、まだ発売日じゃないし、そもそも予約だった。それは違うか。

恐る恐るドアホンのボタンを押す。

するとマンションの玄関の所に黒スーツの人と佇む、花束を抱えた金髪のイケメンが画面に映つた。

『あつ、繋がったみたいだね。久しぶり、ゆたか。元気にしてたかい? —— ゆたかの

大好きなお兄ちゃんが、帰ってきたよ』

そうやって画面の向こうにいた金髪イケメン。

オレの兄貴である育斗は満面の笑みで笑った。

昔と変わらない甘い笑顔で。

姓を子宝、名を育斗。

現在海外を拠点に色々活動してる、オレより六つ年上の血の繋がった実の兄貴だ。

成績優秀、品行方正、容姿端麗、運動神経抜群。

パピー譲りのキラツキラの金髪とモデルばりの恵まれた体躯、マザー譲りの黒真珠の瞳と中性的な甘い顔立ちで、ご近所さんからリアル王子様と呼ばれ死ぬほどモテモテだった兄貴。

それなりに自慢の兄貴なのだが、ある理由から素直に自慢出来ない存在だった。

それは兄貴が気持ち悪いくらいシスコンな所だ

『……誰?』

『あ、ああ……』

5歳の誕生日を迎えた日。

オレは初めて兄貴と出会った。

当時11歳だった兄貴は、誕生日会のおめかししたオレを見ると一言『天使だ……』といつて抱き締めてきた。

最初は実の兄貴である事も知らず、知らない人の突然の抱擁に混乱してビビった。マジで変態だと思った。貞操の危機を感じて、思わずちよつとお漏らししたのはご愛嬌だ
と思う。

5歳で初対面とはこれいかに。

そう思うだろう。

兄妹ならそんな事になる訳ないと。

それにもちよつとした理由がある。

というのも兄貴の奴はオレが産まれる前に家を出て、お祖父ちゃん家に住んでいたのだ。学校に通学しやすいという理由で自分からマザーとパピーに提案したらしい。小学生にも満たない子供の言うことに毎日電話する事を条件に賛成するマザーとパピー

も大概だが、それをいう兄貴も大概であるといえる。

都内の頭良い学校に通っていた兄貴は全然帰って来なかった。それが寂しいかと言われれば、そもそも兄貴の存在すら知らなかったので何とも思っていないかった。遊び相手は高虎が一人いれば足りたし。

兎に角、兄貴は何かと理由をつけて帰らず、電話だけして一向に家の敷居を跨ぐ事はなかったのだ。

それで気がつけばオレは5歳、兄貴は11歳。

実の兄妹なのに希薄過ぎる関係を築いてしまったオレ達に危機感を覚えたマザーとパピーは、オレの誕生日会に呼んで顔合わせてをする事にしたのだと。

その結果、兄貴は立派なシスコンになった。

それからと言うもの、兄貴は事あるごとに帰ってきてはオレに構ってきた。高虎と遊んでれば割り込むように雑ざってきて、おやつを食べてればあーんさせてきて、お風呂に入っていると洗うのを手伝いにきて、寝ようとするベツドに潜り込んできて子守唄を歌う。

はつきり言つてウザかった。

兄貴が中等部へとランクアップすると、何処でお金の稼ぎ方を覚えてきたのか、財力に物を言わせプレゼントを持参するようになった。ぬいぐるみに始まり、アクセサリーや小物、洋服にバッグ、食べ物などなど。

因みに花束は当たり前のように添えられていた。

部屋にプレゼントが入りきらなくなった頃。

ようやくマザーからプレゼント禁止令が発令。

兄貴のプレゼント祭りは終着を迎えた。

けれど、兄貴は止まらなかった。

プレゼントが駄目ならと兎に角ベタベタしてきたのだ。

オレを見つければ絶対に抱き着き、耳元で『可愛い』とか『天使』とか囁きながら、頬擦りしたり撫で撫でしてくるのだ。その頃には一緒に風呂とか、布団に潜り込んできたりとかはなくなっていたけど、それでもかなり付きまとわれて気が休まる時がなかった。

高虎はその光景を見る度に同情するような視線を送ってきて、たまに助けてくれたりしたので、今でも感謝してたりする。

結局それは高等部を卒業し、海外の大学へと行くことで物理的に離れるまで続いた。

兄貴が旅立つ日、空港で見送った時は本当に涙が出たもんだ。勿論、嬉しくて。

その様子を見て変な勘違いした兄貴が『ゆたかが悲しんでるから行かない!!』と馬鹿な事を言い出した時は本当に焦ったけど。

それからもう6年。

海外で就職したと風の噂で聞いた兄貴。

一財産築いて楽しくやっていると聞いた兄貴。

「はあ、可愛いなあ、僕の妹は可愛いなあ。どうしてこんなに可愛いんだろう。不思議だ。もしかして本当に天使の産まれかわりなんじゃないかなあ? そうじゃないとしたら、ヴィーナスが嫉妬しないか不安でお兄ちゃん眠れないよ」

何一つ変わらず帰ってきやがった。

渋々ながら部屋にいれると、花束を投げ捨てた兄貴は即行で抱き締めてきた。そしてつむじの所に顔をつけると、臭いをかきながらめっちゃ撫で撫でしてくる。

はつきり言つてウザい。

「兄貴、取り敢えず離して」

「それは出来ない相談だよ。僕は今、足りなかった妹分を補給してる所だから。ああ、怒らないで、違うんだよ、ゆたかを怒らせたかった訳じゃないんだ。でも、怒った顔も可愛いなあ、ゆたかは。ゆたかはどうしてそんなに可愛いのか？僕の妹だから？違うな、ゆたかが可愛いのは奇跡。この世が産んだたった一つの奇跡。それはダイヤモンドより貴重な——」

「兄貴、気持ち悪い」

「はあ、そんな怖い顔しないで。——可愛いなあ、もう、なんでそんなにキュートなんだい？どんな顔をしてても可愛いとか、もう反則だよ。ああ、トキメキが止まらない。僕の天使は可愛い小悪魔でもあったんだね。もう離せないよ」

ウザいなあ……。

どうしようかと考えてるとピーピーと電子音が聞こえてきた。洗濯機が止まった音だ。なので洗濯物を干しに行きたいのだが——兄貴が離してくれない。

「ええい、鬱陶しい!! 離せ!! 洗濯物するんだから!!」

「洗濯物ならお兄ちゃんがやろう。ジョーディー」

「OK, boss」

兄貴が指パッチンすると、ずっと背後にいたサングラスの黒スーツの人が洗濯機のあ

る部屋に向かつていった。初めてにも関わらず迷いなく。

兄貴やつてないじゃんとツツコミたかったけど、それ以上に見逃せない事があつたので、オレは兄貴に視線を向け直した。

「兄貴、なんであの人、洗濯機のある場所知ってるんだ？」

「んー？ そんな事かい？ そりゃ知ってるさ。教えたからね、部屋の間取りは」

「教えた？ じゃあ、兄貴はなんで知ってるの？」

「だってこのマンション、元々僕が高等部に進学した祝いでお祖父ちゃんから貰つたものだからね。高等部時代は僕が使ってたよ？ 大学行つてからは放置してたけど、お祖父ちゃんからゆたかが部屋を探してるって聞いてね。しかもその条件的にここが一番だつて言うじゃないか。だからあげることにしたんだよ」

「妙に物が揃つてると思えば・・・兄貴のだったのか」

最初ここに来た時、家具の揃いように眉を潜めた。

ソファーもあればテレビもあるし、冷蔵庫も洗濯機もレンジも、いきなり住み込んで大丈夫なくらい何でもあつたから。お祖父ちゃんに聞いても、好きに使つて良いしと言つてくれなかつたから分からなかつたのだ。

そうこうしてると、黒スーツの人が洗濯物が満載の洗濯カゴを抱えて出てきた。最初は男の人かと思つたけど、どうやら黒スーツの人は女性らしい。

だっておっぱいの所、服が張ってる。

「兄貴の彼女さん？」

「いや、部下だよ」

「部下……兄貴向こうで何の仕事してるの？」

「んー内緒。こっちに来てくれるなら、教えてあげるけど」

「じゃ、いいや」

この感じ知ってる。だから聞かない。

前にオレに告白してきた男子を、家族ごとスリランカに飛ばした時と同じ雰囲気だも
ん。あの時ほど聞かなければ良かったと思つた時はなかつた。

ごめん、キョータロー。また今晚も一緒にネットゲしような。

「——まあ、他にも色々、つもる話もあるんだけど。ねえ、ゆたか？」

「ん？なに？」

「お兄ちゃん、どうしても聞きたい事があつたんだ。ゆたか——結婚したんだつてね？」

その言葉に背筋へ冷たいものが走つた。

「お兄ちゃん、ゆたかが部屋を探してゐるって聞いて、てつきり大学とかに通う為だと思つたんだ。もしくは趣味部屋とか欲しいのかなつて。昔お兄ちゃんに教えてくれたらう

？一日中ゲームしても怒られない部屋が欲しいって……なのに、お母さんから聞いたら、ゆたか結婚したって言うじゃないか。耳を疑ったよ。まさか、何処の馬の骨ともしれない男と、同居する為の部屋を探してるとは思わなかったからね」

「何処の馬の骨って……あの、高虎なんだけど」

「ああ、ゆたかの周りにチラついてた小僧か。そうか、小僧が純粹で心優しいゆたかを騙して……殺そう。うん、殺そう。ジヨディー」

兄貴が指パッチンすると、空になった洗濯カゴを抱えた黒スーツが戻ってきてシュパッと敬礼した。

「OK, boss」

「おーけーぼすすんな!!」

「OK, Sister the boss」

「オレの言葉聞いてくれた!？」

兄貴を見たら「当然じゃないか」と笑ってる。

何が当然なのか分からない。

いよいよ頭がいつぱいいつぱいになったきた頃、スマホが鳴り響いた。

タイガーなマスクの曲、高虎の着信だ。

何とか兄貴の腕の中から抜け出し、ポケットから引き抜き通知ボタンをタッチ。

耳に当てる。

『お義母さんから聞いたつ、育斗さん帰ってきたんだつてな。大丈夫か？』

「大丈夫じゃ——あつ！兄貴！」

電話していたら急に兄貴にスマホを取り上げられた。

取り返そうとしたけど手が届かない。

だからジャンプしたけど、軽くかわされた。

「久しぶり、高虎くん。僕のいない間に随分と面白い事してくれたじゃないか。早く帰っておいで」

『——』

「ははは、僕がゆたかに何かする訳ないじゃないか。心配するなら自分の身を心配した方がよいよ。それじゃ、待っているよ」

そう言った兄貴はスマホの電源を落としポケットに入れてしまった。逃げようとしたけど、玄関へ道は黒スーツの人が塞いでる。

孤立無援。

「さあ、ゆたか。彼が帰ってくるまで、兄妹水入らず久しぶりの再会の続きをしよう」

「あ、あわわ、こつ、こつちにくるなあ！兄貴！」

「怯えるゆたかも可愛いなあ」

「いにやああああああ」

それから三十分。

高虎が帰ってくるまでスリスリしてナデナデされた。
オレは犬とか猫じゃないと言ってやりたい。

おもうてたより、シスコンの来襲が早かったんだけど『後編』

時刻はすつかりお昼時。

マザーに言われた通り布団を一度ひっくり返し、ついでに軽く部屋の掃除を済ませたオレとジョーデーさんは、ちよつと前に配達されたピザを和室でテレビ見ながらモシヤモシヤしていた。

リビングで剣呑な雰囲気醸し出しながら見つめあう、高虎と兄貴の様子をたまに窺いながら。

・・・それにしても旨いなあ。

濃厚なチーズとスパイシーな香りが食欲をそそるよね。

たまには良いな、ピザ。

「What can I get you to drink?」

「ん?なんて?」

「aah……drink……ノムウ?オチャア」

「ど、どりーん?のむう?おちゃあ?・・・ああ、飲み物か。良いよ、オレとつて来る。」

ジョディーさん何が良い？」

「me?.....ジャパニーズ グリーンティー プリーズ。OK?」

「おーけー！」

ジョディーさんには座って貰ったまま、高虎の隣を抜けて冷蔵庫へと行く。幸い作りおきしてた冷茶が余っていたのでコップを一緒に持つてジョディーさんの所へUターン。帰る途中ふと高虎達の方を見ると、テーブルに飲み物すら置いてないのが目についた。もうお昼なのに。

「高虎と兄貴もなんか飲む?てーかお腹減ってない?ピザ頼もうか?今から頼むと時間掛かると思うけど.....」

そう聞くと高虎と兄貴が掌を翳してきた。

「俺はいつもの」

「僕もいつもの頼むよ」

いつもの?

高虎のいつものと言えば温かい緑茶だ。それも急須で入れる割りと本格的なあつつい奴。特に拘りのないやつだけど、これだけは矢鱈と凝ってるから嫌でも覚えてる。

まあ、ちやうど茶葉切らしてるから出せないけど。

兄貴のいつものと言えば紅茶だ。

こつちにいた頃、ジャン何とかっていう淹れ方を自慢気に見せてきたのを覚えてる。まあ、茶葉どころかティーパックすらないから出せないけど。

「面倒臭いからコーヒーナ」

間をとってそう言うと、何故か二人のテンションが目に見えて下がった。なんて失礼な奴らか。飲まず食わずで可哀想だからと気をきかせればこれだ。まったく、もう何もやってやらん。

「……お昼はー?」

インスタントコーヒーの粉をコップに入れながら、一応念のために最大限譲歩して聞いてやる。

すると高虎は朝渡した弁当をテーブルに置いた。

「大丈夫だ。ある」

なんだろう、凄い良い顔するな。

ご飯は炊いたけど、基本おかずは冷凍食品なのに。

唐揚げか? 唐揚げ一杯入れたからか?

兄貴の方を見れば笑顔が返ってきた。

あーはい。用意しろって事ですネ? はいはい。

幸い朝炊いたご飯がまだ余ってる。

おかずだけ考えればいいから簡単だ。

そんな訳で冷凍庫を開いて見ると、弁当の余りの唐揚げが目についた。なので封を開けて皿に盛り付け、ラップをしたらレンジにゴーする。あとは三分したら出来上がり。

「……ゆたか、お前」

声に振り向くと、弁当を開けた高虎が微妙な顔をしていた。

「なんだよ?」

高虎は何かを言おうとしたけど、直ぐ兄貴が割り込んで邪魔してきた。

なんかこつちも凄い良い顔してる。

「なんでもないよ、僕の可愛い妹。ただ、そうだね、ほんのちよつと、高虎くんが勘違いしてたみたいだから? いやー面白い。あはははつ、面白いねえ。あれ? どうしたのかな? 何かあるのかい? 高虎くん?」

「育斗さん。そういう事するから、既読スルーされるんですよ」

「……ほほう? 君はされてない?」

なんか見つめ合う二人の視線が厳しい。

昔から相性は良くないけど、今日はいつになく仲悪いな。——まあ、だからといって助けないけど。寧ろ助けて欲しいくらいだし。

だから頑張れ、高虎。

オレの平穩はお前に掛かっている。

それにしても便利な世の中だね。

冷凍食品って神だよ、本当。

チンって言ったらもう出来上がりだもんなあ。

「Is it a boss's lunch frozen food? Really? ————— H a h a h a h a ! N i c e j o k e ! Y u t a k a , s e r v i c e i s g r e a t ! H a h a h a h a h a !」

レンジの前で待つてたらいつの間にかジョディーさんがリビングに来ていて、こつちを見ながら大爆笑していた。レンジでチンする事の何が面白いのか。少し分かりあえてきたかと思ったけど、文化の壁って大きいんだなって。外国人のツボは分からん。

「ジョディー?」

「H a h a h a h a : : h a : : a : : : o o p s」

今のは分かった。

ジョディーさん怒られたんだな。

それから少しして、出来上がったコーヒー二つと唐揚げ丼（ふりかけon）を兄貴にあげて、オレはジョディーさんと和室に戻ってピザとしゃれこむ。

チンしてからというもの、何故だかジョディーさんが矢鱈と楽しそう。

基本英語?で何言ってるか分からないけど、兄貴の悪口とか言ってる気がする。ジョーデーさんとは良い酒が飲めそう。まだ飲めないけど。

「それにしても、何話してるんだろ?」

オレを救出した後、高虎は兄貴と二人きりで話してる。

ジョーデーさんとオレ放って置きっぱなしでだ。

そりゃあ、高虎に兄貴の相手を頼んだのはオレだけ……。

「んー、んー、んー、んー、んー」

ピザも食べ終わって、テレビも飽きてきて、いよいよやる事がない。普段ならゲームしてるけど、流石にお客さんの前ではやりづらいーというか、今やってるのギョルゲーだからジョーデーさんの前で凄いやりづらい。んー、いや、二人で出来るやつなら……気分じゃないなあ。

それにゲームやるならリビングのどっかい奴でやりたい。和室のはちっちゃすぎる。暇だからゴロゴロ転がっていると苦笑したジョーデーさんが手招きしてくる。何だろうかと思つて近づくと懐から携帯ゲーム機が出てきた。しかもオレがまだ持つてない、配管工のおじさんが絶大な影響力を持つ、あのハード機である。

微笑を浮かべたジョーデーさんは、二つあるコントロールの内一つを静かに差し出してきた。

「ジヨディーさん、マジか」

そつとそれを手にすると、ジヨディーさんは深く頷き親指を立てた。

「I love Japanese culture, manga, animation and games. . . . aah oh! ——— I am a オタク!

「オタク!?!」

「Yes! オタアク!」

「オタク!!」

思わず手を差し出すとジヨディーさんが握手してきた。

がっちり繋がった掌が熱い。

「アニメ大好き!」

「Yes! ダイスウキイ!」

「ゲーム大好き!」

「ダイスウキイ!」

「イエー!」

そういう訳でゲーム機のスイッチを入れ、大乱闘して、スマッシュして、ブラザツた。新キャラを増やすこと暫く。

いい加減布団を取り込む時間になった頃、ジョディーさんの胸元からモンスターをボールに捕らえそうな音楽が鳴り始めた。ジョディーさんの表情が曇る。どうやら帰る時間らしい。

「sorry Yutaka. I wish could play the game, but I have places to go:」

「よく分かんないけど気にする事ないって。それより連絡先交換しよ」

パツとスマホを見せると今日一番の笑顔と共に「of course!」の言葉が返ってきた。

仲良く連絡先を交換していると「随分と楽しそうだな」とぼやきが聞こえてくる。見れば高虎と兄貴がこつちを見てた。やや、いつの間に。

「話終わった?」

「割と、大分前にな。はあ・・・まったく、誰の為にやってると思ってるんだか」
「ん、なんだよお」

高虎に頭をグリグリと撫でられ髪が乱れる。

ムカついたので手をペシッておく。

この野郎が。

「・・・ん?高虎?」

「何だ」

「……んー？いや、なんでも……」

何となくだけど、少し寂しそうな顔してた気がした。

直ぐいつもの顔になったけど。

髪を直していると今度は兄貴と目があつた。

何か言いたげな顔をしてる。

「……ゆたか、お兄ちゃん取り敢えず今日は帰るんだけど」

「今日はずつて、また来る気かよ？」

「ははは、そりや勿論。暫くは日本に滞在するから、また遊びに来るよ……嫌かい？」

「……まあ、別に。たまになら良いよ」

「ははは、相変わらずゆたかはや言葉を飾らないね。そういう所も素直で可愛いけど、外で

は気をつけるんだよ？」

そういうと兄貴は頬つぺたをプニプニしてきた。

「なんだよお」

「ねえ、ゆたか。お兄ちゃん、向こうの国で凄く頑張つたんだ。だからね、ゆたか一人くらい面倒見てあげられるよ。好きなゲームも買ってあげる。美味しいご飯も食べさせてあげる。ゆたかは何にもしなくて良い。ゆたかが、ずっと好きな事出来る場所を作つ

てあげる。だから——」

「やだ」

断ると兄貴の手が止まった。

「そっか」

「だってそれ、大前提として兄貴のいる所にいかなきゃなんないんだろ？やだよ。英語喋れないし、読めないし。てーか、普通に日本好きだからな。日本食の無いところは住みたくない——」

兄貴が今住んでる場所とか知らないけど、英語が必須なのは理解出来る。そんな所で日本人一人とか、無理ポヨというものだ。正気の沙汰ではない。

それに——それに？

「——……ん、んん……なんていうか。うん。まあ、うん」

言葉に迷って兄貴を見上げると、優しい視線が返ってきた。

「通訳とかつけるよ？少し足を運べば日本食だって食べれる場所だ。移動には勿論車を出すし、ボディガードもつけてあげる」

「余計にやだよ。絶対気を使うもん、そんなの。それにそう言うのは気軽に一人でスッ

といけるから良いんだよ。風情だよ、風情。兄貴は頭良いけど、相変わらず分かってないなあ」

「……本当だね、僕は——全然分かってないね。教えてくれてありがとう、ゆたか」
それだけ言う兄貴は頬つぺたをプヨンプヨン弄つてからそそくさと帰っていった。
本当に忙しいらしい。

今度来るときは事前に連絡を入れるらしいが……無理して来なくても良いのにも思う。

ジョーデーさんは歓迎するけど。

兄貴が帰ってから何故だか高虎に付きまとわれた。

布団取り込む時も、洗濯物取り込む時も、夕飯作る時も、ずつつつと後ろから抱き着きっぱなし。超邪魔。

お風呂にまでついてこようとしたので、そこは金的して突き放しておいた。

風呂は駄目だ。風呂は。

貞操が、死ぬるだろうが。

変態ボケ野郎が。

「ゆたか、背中流すか？」

「入ってきたら離婚な」

「分かった」

おもうてたより、雨が止まないんだけど

カエルがびよこびよこし、カタツムリがつのだし、ひたすらに洗濯物が乾かない梅雨入りした6月のある日。

オレは部屋に干された洗濯物と、暗雲立ち込める空を眺めながら、雲が晴れるのをてるてる坊主と共に懇願していた。

「晴れる晴れる晴れる晴れる晴れる晴れる晴れる——もがっ」
「怖いから止めろ」

塞がれた口をそのままにちよつと振り返ると、ジト目の高虎と目があつた。

「ふあへえほ、ふあへえほ、ふあへえほ」

「そこは諦めろよ。というか、くすぐつたいから止めろ。止めないと、このまま1日抱き枕にするぞ」

「ふあい」

1日抱き枕にされるのは嫌なのでお口チャックしとく。

戦略的沈黙を選んだオレの様子に気づいた高虎は手を離して読書に戻った。

何を読んでいるのかと覗けば、また小難しい物読んでるようだ。ラノベならまだし

も、あんなの読んで頭痛くならないのだろうか。

昔から不思議に思ってたが、いよいよ気になったのでてるてる坊主のてる次郎に聞いて貰う事にした。

「高虎くん、高虎くん（裏声）」

「……？なんだ……本当になんだ？その可愛くないてるてる坊主」

高虎はオレの持つてる次郎を軽く横目で見て、華麗に二度見した。オレの可愛い、てる次郎（京劇フェイス仕様）を凝視である。

「ぼくねえ、聞きたい事があるんだあ（裏声）！ちよつと聞いてくれるかなあ（裏声）？
——聞いてくれないと、お昼がお茶漬けになるよ？」

「てる次郎、最後にゆたかの部分が出てきてるぞ。お昼お茶漬けか……今朝もお茶漬けだから、流石に別のがいいな。なんだ？」

「そんな難しい本読んで、頭大丈夫（裏声）？」

「てる次郎、言い方な。……はあ、まあ良いか。面白いぞ、読んで見るか？」
スツと差し出された本のタイトルを見た。

「めい、めい、めいもん……はっ！なると！なるとだ！なると……ひ……あゆ」
「鮎あゆではないな。最後のは帖ちょうって読むんだ」

ちよつとて読むのか。

へえ。

「ふうん？で、どんなん？最後のサムライ的な？」

「最後のサムライ的なのではないな。まあ、幕末の隠密の話ではあるが。……部類だと伝奇小説だな。まあ、時代劇みたいなやつだ」

「紋所が目に入らぬか系？人の世の生き血をすすする系？屍拾われぬ系？」

「それ大体似たり寄つたりの話じゃないか？……そう言えばお前、時代劇は結構好きだったな。どうだろうな、屍拾われぬ系が近いか？いや、違うな……あー、確かドラマ版があるらしいから今度借りてくるか」

ドラマなら見れるかなあ。

「うむ、宜しく頼むで御座る（裏声）」

「おう、分かったでござる」

「真似するなで御座る（裏声）」

「おう、で候う」

候う……。

なにそれ、超侍っぽいじゃん。

「今度からその候うはオレが頂くで候う（裏声）」

「なに気に入ってんだ」

暫く読書する高虎を眺めたりしたが、やっぱり暇なものは暇なのでテレビをつけた。日曜日のゴールデンタイムが終わって見るものがないけど、何もしないよりはマシだ。そのままぼけーっと、流れるニュースとか眺めるとお昼になった。

「お昼で候う、高虎殿」

「なんかパワーアップしてるな。そうだな」

「何食べたい？」

「何でも良いぞ」

なんて投げやりな言い方。

オレは今カチンと来ちやったよ。

もう、こめかみピクピクだよ。

「そんな言い方ないだろ！人が折角聞いてやってんのに！毎回ご飯のメニュー考えるオレの身にもなれよ！大変なんだからな！！」

「そう言うのはな、ある程度料理が作れるようになってから言え。お前のレパートリー数える程度もないだろ」

「数える程度はありますうう！！カレーとか、シチューとか、ビーフシチューとか、ハヤシライスとか、肉じゃがとか作れますうううー！！」

「ルー入れるやつばっかだな」

くつ、それは言わないお約束だろうに。

「じゃあ……あつ！すつ、スクランブルエッグー！ほらみよ！おら！奉りながら敬え
！」

「スクランブルエッグ……ああ、あのだし巻き——あ、いや、何でもない。いつもあ
りがとな。楽しみにしてる」

「はあ!?何がっ!?ちつ、違いますううう!!あれはスクランブルエッグになるべくして
なった、スクランブルエッグですう!!」

「うん、そうだな。分かってる」

こ、この野郎、絶対馬鹿にしにきてやがる。

もう怒った。堪忍袋の……堪忍袋の……切れたぞ。オレの何かが切れたぞ。

「高虎のばーか！お昼なんてな！お前のお昼なんてっ！」

「おう、俺のお昼どうなるんだ？」

「冷やし中華にしてやる！」

「お前、買い物行った時にラーメン屋の前通つたらろ」

うるさいわ！美味しいだろ、冷やし中華!!

茹でてくれるわ!!

失礼な高虎は放っておいて台所へ。

戸棚を開けるとラーメンと冷やし中華が目に入った。

少しだけラーメン食べたくなっただけど、ここは我慢して冷やし中華を選んでおく。言った手前つてのもあるし、やる気ある時やんないと季節跨いで残りそうだし。オレ、言うほど冷やし中華好きじゃないかね。

水を入れた鍋とフライパンをコンロにおいて早速加熱を始める。温まるのを待つ間、冷蔵庫から卵を二つ取り出し、殻が入らないように割って中身を器に。毎日割ってるので、流石にここではミスはない・・・あつ、マジか。ん？いや、何でもない。何でもないってば。高虎はこっちくんない!!

邪魔者を退けた後はマザーから貰ったメモ通り塩と砂糖、それとお酒をちよつと入れて、卵に混ぜるようによーくかき混ぜる。

鍋がグツグツしてきた所で中火にして、冷やし中華の麺をそこへいん。タイマーをセツトしておく。

麺を茹でてる間は、フライパンに溶き卵を入れて薄く焼く。全体的に固まってきたら蓋してちよつと待つ。待ち過ぎると固まるから、本当に少しだけだ。

少しした所で蓋を開けてみると、程よく火が通っていた。傾けても卵が垂れない。焼けたそれをまな板に置いて冷めるのを待つ。

ピピツとタイマーが鳴ったので卵のやつは一旦放置。代わりに茹でてた麺をささつ

とお湯切り。ラーメン屋のオヤジのあの後ろ姿を思い出しながら、心を込めてシユパツと。

お湯切りした麺を皿に盛ろうとしたけど冷やし中華だった事を思い出し、水にさらして熱をとってからもう一回シユパツた。

麺を皿に盛って、さっき焼いた薄焼き卵と在り合わせのハムを千切りにして更に盛り、麺と一緒に入っていたタレを掛ける。

最後に刻み海苔と小口切りしたネギも一緒に添えて出来上がりだ。

「……マザーに送つと」

一応、マザーに写メって送つておいた。

別に改心の出来とか、そーいうのじゃないけどね。

一応ね、一応。

「ほらよ、目を剥くが良い！どーん！」

「——ほう」

高虎は珍しく感心したような声を漏らした。

大した事ではない、これは大した事ではないのだが、高虎のその態度は思ったより気持ちの良いもので、はからずもちよつと鼻が高くなってしまう。

「ネギが繋がってない」

「あつたりまえだ！日々ロケットエンジンが如く加速的に成長するオレの料理テクを舐めるなよ！！ネコの手なんて完璧のペキペキよ！」

「怪我しなくなつて本当に良かった。帰つてきてまな板が血塗れになつてるの見たときは、本当心臓止まるかと思つたからな」

「うるさいわ！昔の事をネチネチと！」

「2ヶ月も前の話じゃないんだが」

ぶつくさと言ひ始めたので箸を渡してやる。

高虎は苦笑しながら「いただきます」と一言つて食べ始めた。

「なあ、別にこれはこれで旨いんだが……きゅうりとかトマトとか入れて貰つても」

「――」

「駄目だ。あれは人の食う物じゃないから」

「お前が嫌いなのは知つてるけどな……あー、お前の好きなケチャップな、トマトだぞ」

「違う、あれはケチャップだ。ケチャップはケチャップの木になる不思議な調味料だ。

トマトから出来てる訳じゃない」

「そうか、ケチャップの木かあ……」

良いから黙つて食え。

……なんだよ、きゅうりもトマトも絶対入れないからな！絶対だ！！……え？

自分でやるから？おまっ・・・良いよお!!勝手に切つて、勝手に入れればあ!?!でもあれだかな、ちゅーは拒否させて貰うからな!!やだ、だめ!絶対させない!

きゆうりトマト戦争を何とか勝利した午後。

吊るしまくつたてる坊主のお陰か、雨が止み少しだけ太陽が出てきた。なのでここぞとばかりに洗濯物達をベランダに移送、太陽の恩恵に預らせて貰う。

「そのポーズの意味は？」

太陽に感謝を捧げる為、太陽の方向を見ながら偉大な太陽戦士のポーズを取つたら高虎がつつこんできた。

知らないなんて、なんて恩知らずなやつだ。ぼくとわたしの太陽に謝れ。

「太陽を讃美する偉大な英雄のポーズだ」

「アニメかなんかの真似か？」

「ゲームだ」

「そうか」

一心に光を浴びていると、ふとそれが目についた。

遠くの空に掛かっている光の輪っこだ。

「高虎ー！大變だ、虹が出たぞ！」

レアな光景だったので教えてやれば、高虎の生返事が聞こえてきた。ムカついたので無理やり窓まで引き摺ってやる。小説読んでるから？——知らん！！

「おお、虹だ。久しぶりに見るな」

「だろ？感謝しろ、オレに」

「お前に感謝すんのか？」

「誰がこんなに吊つたと思ってるんだ！」

チラツと高虎がてるてる坊主達を見た。

「まあ、執念は感じるな」

そう言う和高虎は笑って、また虹を眺めた。

「晴れた日は晴れを愛し、雨の日は雨を愛す。

楽しみあるところに楽しみ、楽しみなきところに楽しむ」

「ん？なにそれ」

「親父から聞いた話、さつき読んでた小説の作者が言ってた事らしい。昔は意味分からなかったけどな」

「今はわかんのか？」

そう尋ねると高虎がこつちを見た。

「ああ、お前のお陰でな」

「?ふうん?」

それから暫く高虎とぼんやり虹を眺めた。

子供の時一緒にみた、記憶の虹と比べながら。

「よく分からんけど、感謝してるなら今日のお風呂は高虎やつて」

「なんの為に当番にしてんだ・・・はあ、今日だけな」

おもうてたより、友人になつかれてるんですが

6月の終わり。

天気予報で梅雨明けを聞いた今日この頃。

いつも通り弁当を作り高虎に押し付けたオレは、いつも通り部屋に籠る——事はなく、一緒に玄関を出た。キャリーケースを転がしながら。

別に高虎と何処かに行く訳ではない。

高虎はこれから大学だ。

今日は午後からしか授業はないんだけど、その代わりにサークルの集まりがあるらしい。

「あら、子宝さん。お早う御座います、お二人でお出かけ？羨ましいわあ」

戸締まりした所で丁度エレベーターから降りてきたお隣さんに声を掛けられた。ゆるふわ系の若奥様。最近お腹が大きくなってきた、ほんわか巨乳の山瀬さんだ。

「おはよーございます。山瀬さんはゴミ出しですか？」

「そうなのよお。もう、あの人ったら全然やってくれないのお。奥さんは良いわねえ、旦那さんよくやってってくれるでしょう？羨ましいわあ」

「言うほど立派でもないですよ？家にいるとずっとゴロゴロゴロゴロ。小説読んでるか、映画見てるかしかしないナマケモノなんですから——」

「基本的にゲームしかしてないナマケモノが、よく言ったもんだな？」

山瀬さんと仲良く話してたら、高虎がいらんツツコミをしてきた。

「——止める、この野郎!!」近所さんで出来る奥さんと噂のオレのイメージが崩れるだろうが!!」

「どこの噂だ、それ。面白可愛い奥さんっていうのなら聞いた事はあるが」

「誰が面白可愛いスパシーバな奥さんだ!こら!!」

「何処からスパシーバ出てきた」

二人で話しているとクスクスという笑い声が聞こえてきた。今ここにいる人間は三人だけ。つまりは山瀬さんに笑われているということ。確認する為に視線を送れば、やっぱり山瀬さんが楽しそうに笑ってた。

「本当、二人は仲良いいわねえ。見てて楽しいわあ。——あら?ふふふ、この子も仲間にもざりたみたい」

そういうと山瀬さんはお腹を優しく撫でた。

その顔はもうすっかりお母さんの顔だ。

「あとどれくらいで産まれるんですか?」

「そうねえ、あと二月くらいかしらあ。一応予定日は教えて貰えたけど、人によつて多少は前後するつていうから正確な所は分からないのだけれどねえ」

「へええ、もうどつちか分かつてるんですか?」

「ええ、でも教えて貰つてないのお。うちの人と相談してね、産まれてからのお楽しみつて事にしたのよ」

そのあとお腹を撫でさせて貰つてから、オレ達はマンションを後にした。電車まで一緒なので、高虎とは駅まで一緒。駅につくまでの間、先日見たシャークがトルネードする映画について熱く語り合つた。

オレも黄金のチェーンソー欲しいなあ。え、何に使う? うーん、知らん。料理とかは? だつてこの間料理漫画で使つてたぞ? え、できないの?

「あ、ゆたかー!!」

「せーんぱー!!」

駅前に辿り着くと元気な声が聞こえてきた。

声の方を見れば見覚えのある友人二人が手を振っていた。

顎に届く程度に伸ばした髪をすっかり赤茶色に変えた、同級生の島原天音。

それとツインが特徴的なまだ現役の高校生である、後輩の服部弓子だ。

懐かしい顔に手を振り返せば、倍になって返ってきた。

特に弓子の方。

「おっす、ゆたか。元氣そうね」

「先輩、お早う御座います!!私服めちゃ可愛いです!!マジ卍です!!」

「二人も元氣そうだな・・・マジ卍ってなに?」

気になって聞いたらマジ卍はマジ卍らしい。

うん、分かん。

一応天音にも聞いてみたけど「うん?しらん」と良い笑顔を返されてしまった。

だよ。

卒業式以来の再会を三人で喜んでると、ぬつと高虎が頭を突っ込んできた。

「二人とも、ゆたかの事よろしくな」

まるでオレが問題児のような扱いにピキンときたけど、ここはあえて黙っておく。

さつきみたいに余計な事言われてもつまらないからだ。

これ以上、面白可愛いなどと言われてたまるものか。

黙って見ると、天音が高虎の言葉に胸を張り豪快に叩いた。

「あいよ、この馬鹿の事はワタシに任しときなさい。あんた程じゃあないけど、扱いは心得てるからねえ。——てか藤崎が旦那かあ……なんだろ、まだ違和感あるわあ。あのヘタレがねえ」

「おい、島原」

「なによ？ 本当の事でしょ？ あ、今は藤崎じゃないわね。子宝だっけ？ 子宝、高虎……ぶぶっ！ やっぱり変だわっ！ あははは！ ね、子宝さん？ あっははは！」

「あのな……はあ、まあいい」

高虎の様子に天音がケラケラと笑う。

するとその天音の隣にいた弓子が、話を聞いて凍りつくような鋭い視線を高虎へ飛ばした。

「はっ、たった二月程度で、もう旦那気取りですか。けっ。いい気になっていられるのも今の内です。今に私が……精々残り少ない時間を、噛み締めながら楽しむと良いです、”藤崎”先輩。さ、その辛気臭い顔を見ると虫酸が走りますから、さっさと私の視界から失せて下さい。どうぞお」

「お前は相変わらずだな。まあ、ゆたかの事頼むな」

「頼まれる筋合いありませんけどお!? 何ですか!? 藤崎先輩は、ゆたか先輩の何だっとうんですかあああああん!?」

「一応旦那だけど」

「旦那でしようが」

ケンケン吠える弓子を天音と一緒に捕らえ、頭とか喉を撫で撫でしてやる。すると弓子は直ぐ顔を蕩けさせ、借りてきた猫のように大人しくなった。

ちっちゃいけど素早い所とか、おっきなクリンクリンな猫目とか、知り合いたてのツンツンモードも知ってるから、余計に飼い猫っぽく思える。可愛い。

買っておいしたポツ●ーを与えて弓子を大人しくさせてる間に高虎と円満にバイバイし、オレ達も目的地に向けて電車に乗り込んだ。

電車を乗り継いで一時間程。

東京じゃないのに東京と名のついた、ネズミーなテーマパークにやってきた。数ヶ月遅れになった卒業旅行をする為いだ。

6月の終わり。

行くにしても中途半端な季節。

勿論これは好き好んで決めた訳ではない。

というのも本当は卒業後、三月に行く事になっていたのだ。でもオレに結婚騒動があつて結局おじやん。

その後ゴールデンウィークに行こうと計画してたんだけど、天音に用事が出来てしまつておじやん。

それならもういつそ夏に行こうかつてなつたけど、今年受験生である弓子が駄目との事。

それで色々と話し合つた結果、こんな中途半端な日になつてしまつたのだ。学校をサボる形になつた弓子には本当に申し訳ない気持ち一杯である。

荷物をウエルカムセンターに預けた後、チケットを買つてパーク内に入ると弓子が早速動き出した。

何をするのかと二人で眺めていると、売店に売つてるネズミ耳のカチューシャをバージョンで3つ買つてきて手渡してきた。どうしても三人でこれを付けたかつたらしい。

少し気恥ずかしいものがあつたけど、可愛い後輩の頼みなので付けてやる。そしたら二人にめっちゃ写メ取られた。いや、勿論撮り返したが。

一番来たことのある弓子の案内で一番乗りたかつたアトラクションのファストパス

を取った後、園内を色々歩き回っていたらアヒルーを見つけた。ネズミーより人気がないとはいへえ、アヒルーにも人だかりが凄い。

「どうしたんですか先輩？あ、写真撮りに行きませんか？任せて下さい！！蹴散らして下さいよ！」

「ん？いや、そんなに興味ないな」

「えっ、あ、そうですか？じゃあ止めておきます。ふんっ、命拾いしたなアヒル！」

「弓子、あんたちよつとは落ち着きなさい」

ペしんと弓子の頭に天音のチョップが落ちた。

くぐもった悲鳴が聞こえてくる。

「それにしても、平日でもやっぱ混んでるわね。ネズミ様々だわ」

「ネズミ様々って……天音先輩、なんかおばさん臭いですよ？」

「余計なお世話だっつーの。でもまあ、あんた見ると思う所はあるけどさ」

オバサン……？天音が？人前でよっこらしよとか言っちゃう天音が？元男のオレよ

り男みたいな天音が？オレより女にモテた天音が……オバサン？

「天音はオバサンと言うより、オジサンだと思うけど」

「おーし、ゆたか。その喧嘩買ったわ」

「……えっおう!？」

咄嗟に逃げようとしたけどあえなく捕まり、天音よりキツイお仕置きを貰う事になった。そこはらあめえ！案件である。本当の事を言っただけなのに！と言ったら追加お仕置きを食らった。なんたる理不尽。

「——ふう、久しぶりにしばいたらスッキリしたわ！次何乗ろつか？」

「……島原天音のSは、ドSのSっ！」

「もう一回しばくわよ、馬鹿」

昼のパレードガン無視でアトラクションを回る事数時間。

すっかり日が暮れ街灯の光が目立ち始めた頃、園内では夜のパレードに向けてかお客様が場所取りを始めていた。

時間的には少し早かったけど一日歩いて疲れてたし、元々夜のパレードは見る事にしていたので、オレ達も案内に従って場所取りを始める。

パレードを待つてる間は近況報告をし合った。

たまに電話はするし、メッセは送りあつてるので大体の事は知ってるけど、やはり面と向かって話す方がいい事もあるから。

「はぁー受験かぁ。気が重いなぁ」

弓子の番になると一年前のオレみたいな事言い始めた。

気持ちは良く分かるので深く頷いて同意しておく。

分かる、分かるよ———ったい!? なに!? 天音! なんで叩いたの!?

「この馬鹿に同意を求めないの。失敗例なんだから」

「天音、このやろう。その喧嘩買ったたたたたっ! 痛いっ! 頬っへた、つねらないでえ!!

ごめんによさい!!」

「よろしい」

解放された頬っぺたがじんじんする。

頬を擦ってたら弓子と目が合う。

「……そうですよ。ゆたか先輩がちゃんと大学入ってくれたら、私こんなにモチベ

下がって無いんですからね」

「んー? ああ、そう言えば、オレと同じ所行くとか言ってたもんな」

「そうですよ! ゆたか先輩、反省して下さい! 悪いと思ってるなら今からでも一緒に夏

期講習の申し込みに来て下さい!! 最終的には同じ大学に来て下さい!!」

「それはやだ。もう勉強したくないもん」

「うえええん、せーんばーいーいーいーいー!」

せがまれてもこれだけは拒否する。

絶対に拒否する。

ええい、離せえ！

何とか振り払うと弓子は膝を抱えてどんよりした。

少しだけ可哀想に思つて余つてたチュロスあげたら普通に食いついてきた。まだ元氣そう。

「はあ、進学とか言われてもいまいちやる気でないんですよねえ。いつそ……あ、そうだ。ゆたか先輩の所で家政婦として雇つてくれたりしませんか？」

「どう考えたらそうなるんだよ。はあ、あのな、家に家政婦雇う余裕はない。却下だ」

「あ、いえ、寧ろ私がお金入れます。時給1,000円でどうですか？」

「お前が入れんのかよ。いや、却下だけど」

オレの拒絶を聞いてしよんぼりする弓子の前にポップコーンが差し出された。

「アホ、ここに極まれりね。ほれ、ポップコーン食べな」

「騙されませんよ……おいひい」

文句言いながらポップコーンを口にした弓子は幸せそうな顔をする。相変わらず簡単に食べ物に騙される姿に、思わず天音と笑つてしまう。

それから最近あつた事やら何やら話していたら、いつの間にか賑やかな音が聞こえ

てくるようになった。

音へ視線を向ければ沢山の歓声に押し出されるように、楽しい音楽と共にライトアップされた乗り物がやってきてた。

弓子がめっちゃ写メってる。

弓子の真似して写メりながらキラキラ光るそれをぼやーつと見てると、天音がそつと肩を寄せてきた。

「ワタシさ、ずつとあんたに悪いと思ってた」

「?何が?」

「進路勝手に決めた事とか、あんたの面倒みなかった事とか・・・そういうやつ」

受験なんて結局本人次第。

そんな事気にするような事じゃないのに、と思っただけど天音の真剣な顔に声が詰まった。

何かに気づいたのかいつの間にか弓子もこちらを見てる。

「仕方がなかったってき、思ってたよ。最初は。ワタシは特別頭良くないから、誰かに構ってる余裕とかなかったし——でもね、ワタシは後悔したんだ。あんたが落ちたつて聞いた時」

「あれから、ふとした時、頭の中で考えてる。あの時少しでも教えてやればとか、勉強や

るように尻蹴つ飛ばしておけば良かったとか、勉強見てやれば良かったとかさ……そうしたらあなたも同じ学校にいたりして、また一緒にいたんじゃないかって」

天音の目は少しだけ揺れていた。

「ゴールデンウィークさ、本当は用事なかったんだ。ただね、会う気になれなかっただけ。あんたとどんな顔して会えば良いか分からなかったから……ごめん」

なんて返したら良いのだろうか。

こんな時、オレは。

天音に、大切な友達に。

正直オレは友達が少ない。

話し相手が少なかった訳じゃない。

そういうやつは結構一杯いた。

でも、殆どのやつは上辺だけで付き合ってきた。

当たり障りのないように。

だって知られれば知られる程、オレは中途半端で人と比べて可笑しいやつだから。

オレは女である事を受け入れているけど、今も女には慣れてない。まだ何処かに男を残してる。

だから男を好きになれないし、かといって女の子を好きにもなれそうにもない。

直そうと思ったし、努力もしたつもりだけど、オレはずっとオレのままだ。

そんなオレと天音は友達になつてくれた。弓子もそうだ。二人ともオレがオレである事を知った上で友達になつてくれたのだ。

高虎以外。

初めてちゃんと分かつてくれた、大切な二人なのだ。

だから伝えようと思う。

上手く伝えられないけど。

ちゃんと気持ちを含めて。

「ありがとう」

「オレのことちゃんと考えてくれて」

「でもな、大丈夫だから。心配いらなから」

「オレ、今、ちゃんと幸せだからさ」

「なんていうか、二人と友達になれて、一緒にこれて、本当に良かったって思うし。その、二人とも大好き——おふっ」

言い終わりそうだった所で、いきなり天音に抱き締められた。なんか弓子までタツクル気味にまぎつてきて、耐えきれず後ろに倒れてしまう。

背中めつき痛い。

「馬鹿あ！何いつちよまえに泣かせにきてんだ！生意気だぞ、こいつ！！ワタシもお馬鹿なあんたが大好きだっつーの！もう！」

「うえええん！せーんぱーいーいー！！愛してますう！！私も一緒にこれて良かったですう！！あのクソ野郎に何かされたら直ぐ頼つてきて下さいねえ！どんな状況だろうと一生遊んで暮らせる慰謝料ふんどくつて別れさせてあげますから！！決めた！！私は

弁護士王になるう!!」

「弁護士王ってなに・・・うつ」

それから皆でパレードを見てホテルに泊まって、翌日はまたネズミーなランドの隣、ネズミーの海ランドの方へと行った。それで沢山遊んで、沢山話して・・・約束をした。

また皆で何処かに行こうって。

おもうてたより、充実してるみたいなんです

クーラー全開解禁令が高虎より発せられた7月。

マザーから頼まれた七夕飾りをぼんやり作りながら、オレはテーブルに置いたスマホに向かってある事を相談していた。

『誕生日のお祝いねえ……うーん』

電話越しに聞こえる声の主、天音は何ともいえない声色で唸り声をあげる。

「そう、誕生日のお祝い。どーしたら良いと思う？」

『いやさ、まあ、仲良くやってるのは良いと思うわけよ。うん。でもなあ、そういう事ワタシに聞かれても……知らんとしか言えないんだよなあ』

「そこはほら、男目線で」

『ワタシが何言っても傷つかないと思ったら、大間違いだからね。あんた。——はあ、にしても、一体どういう風の吹き回しよ。ゆたかが、お祝いとか。今まで碌にやってないでしょ？』

言われるまでもなく柄じゃない。

それはオレもわかってるんだが……。

「ちよつと前にさ、高虎がお呼ばれして、サークルの先輩のお誕生日会に行ったんだよね」

『サークルの？』

「そう、サークルの。先輩の彼女企画でやったやつなんだけど……まあ、それで、なんか、羨ましかつたみたいで……」

『……藤崎って、そういうやつだったのか』
「わりと。あいつ言わないだけだからな」

案外そういう奴なんだよなあ。

昔からあいつはあんまり欲を見せない。でも見せないからといって欲がない訳でもない。基本的に我慢するタイプのやつなのだ。

小学生の頃とか特にそうだった。

遊びたい遊具とかあつても人がいたら絶対寄り付かないし、余った給食のデザート争奪戦も例えそれが好物であっても遠くから見ただけ。プレゼント系なんてあいつの両親に頼まれて、よく聞き出しにいったもんだ。

中学に入ってから少し言うようになっていったけど。

お茶に関しては五月蠅いくらいだしなあ。

「最近期待するような目でチラチラ見てくるんだよね。この間なんてカレンダー見なが

ら7月ってなんかあったっけ?とか言い始めてさ。あれが鬱陶しくて。なにあれ、すげー面倒臭い。普通に言えば良くないか?」

『あははは、それは面倒臭いわ。あいつアプローチ下手くそだなあ。あつでも、アプローチするだけマシにはなったかあ?・・・まあまあ、でもさ、面倒臭い所は一旦置いておいて考えてもみなよ。藤崎の味方する訳じゃないけどさ、カレカノにそういうの期待するのってわりと普通じゃない?結婚相手なら余計にでしょ』

まあ、そうなんだよなあ。

気持ちは分からなくはないんだ。

だから何かしてやろうとは思うし。

「でもさあ・・・だったらさ、一言くらいさあ、なんかさあ」

『いや、無理だつて。誕生日祝つて、なんて罰ゲームでもなければ言えないでしょ』

「オレは言うけど・・・なんか文句あるう?」

『ゆたかは、そうね、言うわ。ズケズケと』

楽しく生きたいなら行動あるのみ。結果が伴わなくても、取り敢えず行かねば。

それが今のオレの心の座右の銘だからな。

それから色々話したけど、人の誕生日碌に祝わないコンビに良い案は浮かばず、時間だけが過ぎていった。

そして結局、なんの成果もなく天音撤退のお時間。電話切り際に『良い案が浮かんだら連絡するわ』とは言ってたけど、期待は出来そうにない。天音だし。さて、どうしたものかあ。

「サプライズマシーン弓子なら、幾らでも思い付きそうだけど・・・」
あいつには相談出来ない。

可愛くて頼りになる奴だけど、高虎が絡むと途端にチンピラになるからな。どチンピラさんになるからな。

「・・・うーむ。うーむ。うーむ。うーむ。うーむ」

一緒懸命悩んでるとスマホが鳴った。

誰からだろうかと画面を覗けば『ジョディー』の文字が映ってる。なので通話ボタンに軽くタッチした。

「もーしもーし、ジョディーさん？」

『Hi! ユタカ! ゴサブタシテマース。ジョディーデース!』

兄貴来襲から一ヶ月とちよい。

付き添いで来てるジョディーさんは日々の生活の中で学び、段々日本語喋れるようになってきた。まだおかしい所は多いけど余裕で会話出来るレベルだ。

最近アニメも字幕無しで見てるらしい。

「兄貴来るんですか？」

『No, 違イマース。ボスハ仕事シテマス。明後日ニ起コリマス。Japanese festival、ナナタバノ、ジヨディーカラノオ誘イデス。Let's go to
o ナナタバ!』

「ナナタバ?・・・ああ、七夕か」

『yes, ソウトモイウ』

てつきり兄貴関連かと思つて身構えてしまった。

やれやれだぜえ。

それにしても七夕か。どつかでイベントでもやるんだらうか？

「あー、でもごめんなさい。オレその日用事があつていけないんですよ」

『……………really!? Ah……………用事、早く終ル、ナイ? time 少シダケ』

「親戚の子が通つてる幼稚園の七夕祭に出なきや行けないんで……夜も多分どつかでご飯食べる事になると思うし……難しいですね。えつと、分かる? オーケー?」

『分カルマス。ユタカ無理。understood……………Oh my God』

凄いいしょんぼりした声が聞こえてくる。

何だかいたたまれない。

行ってあげたいけど、今更あつちをキャンセルは出来ないからな。でもなあ、このまま放置もなあ。前にジョディーさん結構忙しくてゲームあんまり出来ないって言ったから、きつと明後日も無理して休みとつたんだろうし・・・うーん。はっ、そうだ。

「ジョディーさん、幼稚園の七夕祭来る？」

『What?』



7月7日。

笹飾って短冊を掛けるそんな日。

笹飾りで入り口からワサワサしてる、従弟の翔大くんが通う幼稚園にやってきた。

門の前まで行くと「ゆたかちゃん」と聞き覚えのある声が聞こえて、そつちに振り

返ればマザーとよく似た黒髪黒目の叔母さんの姿があった。

「今日はごめんねー、でっ、ありがとう！助かるよお、うちの子がどうしてもって聞かなくてさあー。あ、あと飾り一杯作ってくれてありがとね、お姉ちゃんから貰ったわ」

「いえいえ、叔母さんにはお年玉いっぱい貰ってますし」

「あはは、そりゃ惜しまず貰いでおいで良かったわー。．．．で、後ろの人は？」

叔母さんの指差した方へと振り向けば、身長180センチオーバーのデカイ二人がいた。一人は言わずと知れたうちの旦那様。叔母さんが指差したのはもう一人の方だ。

赤毛の髪揺らすナイスバデー、Tシャツの上にジャケットを羽織った本場のジーニストガール。

兄貴の付き人ジョディーさんである。

「ご無沙汰します、高虎です。ご挨拶遅れて申し訳ございません。この度、ゆたかさんと結婚させて頂きました。今後ともどうぞよろしくお願いいたします」

「初メテマシテ。ユタカノー、友達ノー、ジョディー言イマス。今後トモ御鼻頂ニ才願イシマス！」

ビシツと高虎が腰を九十度に曲げるお辞儀をし、親指を立てたジョディーさんはウインクする。

そんな両極端な二人の挨拶を聞いた叔母さんは口を真一文字にした。それから少し

プルプルした後、盛大に吹き出す。

「あはははは!!どんな人がくるかと思えば・・・ゆたかちゃんは相変わらず面白いわー。もう、何処で見つけてくるの?こういう人。はー、おかしい」

「毎回変な人連れてくるみたいなの、止めて下さいよ」

「だって前に紹介してくれた子も面白かったし。ほら、頭の横からびよんびよんしてる」

「弓子は・・・まあ・・・そうですけど」

「ねえーそうでしょ?」

クスクス笑いながら叔母さんは高虎の肩を叩いた。

かなりの強さだったらしく高虎が揺れる。

「おっす、高虎くん。こうして会うのはお正月以来だったっけ?固い固い、息が詰まる。もつと気楽にしな。これで晴れてお親戚な訳だしねえー」

「は、はい」

「仲良くやんのよ。じゃないと・・・言わなくても分かってるでしょ?ん?」

「——っ?!はいっ!!」

高虎の背中が面白いくらいピンとした。

良いように叔母さんに玩ばれる高虎が、不覚にもちよつと可愛く見えてしまう。なにあれ。

「で、こつちがジョディーさんだっけ？」

「yes!! ジョディーデス！日本大好きデス。ナノデー、ナナタバヲ study 来マシタ。今日ハ、ドゾ御鼻頂ニ」

「オーケーオーケー！面白いからオーケー！じゃんじゃんスタディーしてきな！私が許可する！inオーケー！」

「Oh! Thank you very much ……オーバーサン！」

「おーおー、イエスイエス。おーイエス。あははははは！」

英語混じりの言葉に叔母さんは当然のように受け答えしてる。「日本人なら日本語知ってりや良いんだ」を子供に言い切った人なので、英語なんて全然出来ないと思ってただけに驚きだ。

「すげえな、高虎」

「あの人のどこら辺見て思ったんだ？そこによつて色々と変わるが・・・」

「英語ペラっペラだぞ」

「ある意味安心した」

「？」

叔母さんに案内され園内に入るとお子様と保護者でござつた返していた。凄いやつワザワして。人混みを掻き分けながら進んでいくと、叔母さんの旦那さんと叔母さん譲り

のサラツサラの黒髪とクリクリ黒目の翔大くんを発見。手を振ると翔大くんがダツシユしてきた。

「ゆーねえー!!」

「ふぬっ!!」

弾丸のようなタツクルを受け止めれば、キラキラした目がこつちを見上げた。

「ゆーねーほんとにきてくれた!!」

「約束したからね。しょーくんまた重くなったねえ」

「うん!ごはん、いっぱいたべてるの!はやくおつきくなるように!ゆーねーぬかすから、まっつてね!」

「そっかそっか。でもわたしが目標は止めとこうなあ、男でわたしサイズはちっさ過ぎるから。どうせならこつちの高虎を目指そうな」

頭を撫で撫でしてあげると翔大くんは目を細めてくすぐったそうにする。少しの間気持ち良さそうにしてたけど、はっとしたような顔をしてオレの隣を見た。

「よーかいでかぼつち!!でたな!!」

「妖怪だったのか、俺」

シユバつとオレから離れた翔大くん。

腰の入った蹴りを高虎に喰らわし、オレと高虎の間に割り込むように入ってくる。

フーフーと威嚇する翔大くんの頭を撫でながら、オレは拒絶された悲しきデカブツを見た。

「……妖怪でかぼつち、大丈夫か？」

「誰が妖怪でかぼつちだ。……翔大くんといい、服部といい、なんでこうも小さい奴に嫌われるんだ」

「オレ……わたしは嫌いじゃないぞ？」

「……おう」

オレの言葉に頬を赤くした高虎は、気まずそうにそつぽを向いて頬を掻いた。

その反応が思ってたのと違い過ぎて、なんか、こつちが照れてしまう。やめい。

「しねっ！ よーかいでかぼつち!!」

「っ!!そこは駄目だ、翔大くんっ」

「翔大!こらあ!!同じ男として、そこは駄目だ!!」

翔大くんのメガトンパンチが急所に決まり一区切りついた所で、叔母さんの旦那に挨拶し、七夕祭の為の準備を始めた。

——と言っても別に大したこと事はしない。他の親子と雑ざって係り先生から貰った短冊に願い事を書いて、空きのある笹にテキトーにつけるだけだ。

後はちびっこが合唱して……なんか色々やる感じだ。

「ゆーねえはなんてかいたの？」

貰った短冊をヒラヒラ遊ばせると翔大くんが覗いてきた。白紙の短冊を見せれば「えー」と残念そうな声をあげる。

「願いたい事にしようか？しよーくんはどうしたん？」

「んーないしよ！えへへ！つけてくるー！」

「走ると転ぶよー」

注意すると翔大くんは走りたいたい気持ちを押しえて歩いていった。ただ気持ちは走りたいのか、大股の変な歩き方だけだ。

「高虎はなんて書くの？」

「こういうのと言わない方がご利益があるもんだろ」

「そこを何とか、お代官様」

「誰がお代官様だ。駄目だ．．．お前の教えてくれるなら、考えない事もないぞ」

オレのか．．．うーん。

「特にないなあ．．．」

「欲がないな」

「欲がないと言うか．．．今やりたい事、大体出来てるし」

弁当作ったり家事するのは面倒臭いけど、それを除けば基本的に家でゴロゴロして

ゲームしてるだけだからな。アニメも幾らでも見れるし。パソコンもあるし。

「恵まれてるっていうの？満ち足りてるっていうの？今、オレ無敵だからさ」

「縛った俺が言うのも何だが、それはどうなんだ」

「縛った？何を？」

謎ワードに首を傾げたら高虎が眉をハの字に下げた。

「人生というか……」

「もしかして結婚した事言ってるか？」

「まあ……」

何言ってるんだこいつ？

「お前が結婚してくれなかったら、オレ今頃知らんやつと結婚してたかも知れないんだぞ。マザーもパピーもあん時はマジだったからな」

「……確かにな」

「感謝してるんだぞ？お前が結婚してくれて。知らないやつと一緒に暮らすのとか、普通に無理だったと思うし。無理して結婚しても、長続きしなかったと思うから……悪くないぞ、今。だから、そんな言い方すんな」

オレが言い終わると同時。

くしゃつという音が聞こえた。

見れば高虎の短冊が丸まっている。

「何してん?」

「書き直す。神頼みするような事じゃなかったんでな」

「ふうん?で、何にすんの?」

高虎は予備の短冊にささつと文字を書き込んだ。

恐らく日本で使いに使い古るされた『家内安全』というその四文字を。

「つまんな」

「・・・良いんだよ、これで。今から吊るしてくるが、ゆたかはまだか?」

「んー?じゃあ・・・」

特に思い付かなかったので『良いことありますように』とアバウトに書いておいた。この欲のない感じ、イイね。謙虚さに引かれた神様が、きつと何かしてくれるだろう。

「一周回ってイヤらしいぞ」

「だまらつしやい、一番上に付けるぞ。肩車用意!」

「叶える気満々か」

短冊を付けにいくと、翔大くんを肩車したジョディーさんを見つけた。同じ事を考えてやがる。

熾烈な一番上を求める戦いの果て、何とか勝利したオレと高虎の短冊は一番高いそこ

に提げられた。

まあ、その後、幼稚園の先生が梯子持ってきて、もつと高い位置に短冊がついてしまったのだが。

勿論やり直そうとしたけど、大人げ無さすぎると高虎に止められてしまった。くそう。

おもうてたより、サプライズが難しいんだけど

ギンギラギンの太陽輝く7月某日。

かつて海の日と呼ばれたその日。

オレはマザー指導の元、聖剣デュアルスティックを片手に女の戦場で死力を尽くして戦っていた。

「マザー!!」

「はいはい、どうしたの?」

「卵がどうしても巻けません!!」

「何カ月やってるの、貴女?」

あまり成果は宜しく無かったけど。

量産された崩れただし巻き卵・・・もといスクランブルエッグを見て、思わず溜息が溢れた。もう嫌だ、とわりと本気で思う。何故にこうもオレはぶきつちよなのかと、神様に三時間くらい問いたい。美人にしてくれてありがとう。でもね、もうちよつと器用に生きたいです神様。

「貴女、手先は器用なのに、なんで料理だけは駄目なのかしら?ちよつと貸してみなさ

い」

「マザーはオレの手から箸を取り、温めたフライパンに油をひき溶き卵をいれた。そしてちやちやつとだし巻き玉子を創造作り上げてしまう。神業である。」

「もしかしてだけど、マザーはだし巻き玉子を作る為に生まれてきた、だし巻きノ神なのでは？」

「何訳の分からない事言ってるの。ほら、もう一回やって見なさい」

「いや、でも、流石にもう・・・勿体ないし・・・」

「安心なさい。失敗作は。パパのお夕飯にするから」

・・・あーうん。それならいつか。

「パピーごめん、暫く玉子生活してくれ。」

「そう心の中で謝ったオレは、また戦場へと戻った。」

「オレのヴァルハラに辿り着く為に。」

「戦いは加速する、オレの熱意をもって。」

「うおおおお!!」

「掛け声はいいからフライパンを見なさい」

「はい」

「天音に相談してからずっと、オレはオレなりに高虎の誕生日について考えに考えた。」

何処ぞのパーティーピーポーの様に友達を沢山呼んでガーデンパーティーしちゃおうかとか、エキストラ雇ってフラッシュモブしようとか、いつそ逆に祝わないなんて事も考えた。

その結果、ちよつと贅沢な料理作って、ケーキ買って二人でお祝いする事に決めた。天音も祝う事が大切だって言ってたし。

・・・いや、言いたい事は分かる。考えたにしては普通過ぎると言うのだろうか？オレもそう思う。

でも考えても見て欲しい。前世に引き続き、基本的に外で遊ぶより家の中でゲームしたり、アニメみたり、漫画読んだりが好きで、学生時代バリバリの帰宅部で、脇目もふらず食欲に灰色の青春を過ごしたオレがだよ？そんな気の利いたサプライズとか・・・出来るわけじゃないか。そんなの不通に無理だよだつてーのお。

そんな訳でご馳走の一つとしてだし巻き玉子を作っていた訳だ。何故だし巻き玉子かといえば、高虎の好物だからだ。それ以上に理由はない。同じ理由でマザー指導の元唐揚げも一杯あげてあるし、カレーも煮込んだし、山盛りのキャベツの千切りも用意した。

・・・なんかしらんだけど、キャベツ好きなんだ。あいつ。定食食べる時とか、いつもキャベツ寄越せて言うんだ。オレあんまり好きじゃないから別に良いけどさ。レタ

スはあげないけど。

二度目の戦いを始めてかれ二時間。

再放送してる刑事ドラマが佳境に入り、「いい加減にしなさいあああ！」という主人公の叫び声が聞こえた頃。

オレの持つ長方形のフライパンの上には、綺麗に折り畳まれた黄色い塊が出来上がっていた。

形を崩さないように皿に移してみれば、多少焦げ目があるものの、何処をどう見てもだし巻き意外何物にも見えない、純然たるだし巻き玉子がそこにあった。

フライパンと箸を流し台に置いたオレは、側にあつた椅子へ静かに座り、これまでの日々を思い返す。

初めはただの焦げた何かだった。それがいつしか焦げた黄色の何かになり、スクランブルエッグという名前がつき……ようやく、今日、この日、だし巻き玉子にダーウィンした。目指していた、だし巻き玉子になったのだ。

もうこれ以上、何があるのか――。

「へっ、燃えた、燃えたよ。真っ白にな……」

「後片付けなさい、休むのはそれからよ」

「はーい」

はい、燃え尽きませんでした。

そんな気はしてたけどね！マザー見張ってるし！

「お誕生日お祝いねえ．．．ふふ、あの子がねえ」

「――？ねえ、マザー。なんか言った？」

「何でもないわよ。良いから後片付けなさい」

「はーい」

それから少し。

片付け完了するまで見張ってきたマザーを無事見送り、漸く一人になったオレは部屋の装飾を開始した。

七夕飾りを作った時に出してしまった、あげるにはちよつと不恰好になつてしまった飾り達を再利用。テキストに壁やらカーテンやらに付けていく。名目上は賃貸なので、傷とか残さないよう場所だけは慎重に選んで．．．あつ．．．いや、大丈夫。逆に考えるんだ。剥がさなきゃ良いさと。これは最初からここに貼つてあつ

たんだと。うん。マツタク、兄貴ツタラ、馬鹿ダナア。後デ教エテアゲナイト。

そうしてせっせかせっせかせか裝飾していき、結局部屋がお祝いの雰囲気満たされる頃にはすっかり6時を越えてしまっていた。

いつもなら高虎は7時前には帰って来てしまう。

なので急いでお風呂を用意し、料理もレンジの前に並べ温めたスタンバイ。準備出来る食器等はテーブルに持っていく。

「箸よしっ、取り皿よしっ、お米よしっ！．．．はっ！ケーキ切るヤツない！．．．あ、でも後で良いか」

ケーキナイフなんて出しておいたらバレちゃう。

やはりこういうのは驚かしてなんぼだろうし。

そうなるどプレゼントに買ったお茶葉もまだしまっておいた方が良いかも知れない。ふと時間を見た。

時刻は7時を越え、もうすぐ30分。

高虎にしては少し遅い。

「．．．テレビ見てよ」

ソファーに座ってテレビをつければ、季節的なあれなのか、いつも見てるバラエティー番組でホラー特集をしていた。ぼやーっと眺めているとスマホが鳴った。画面

を覗けば天音の名前が映ってる。電話かと思ったけど、どうやらメッセージが一つ入っただけみたいだ。

タッチして開くと『誕生日上手くいった(*・ω・*)?』という短い文が目に入った。最近絵文字使うようになったけど、要件だけビシッと伝えてくるあたり、やっぱり男っぽい。人の事言えないけども。

取り敢えず『準備バツチリ、高虎の帰宅まちー。マジ卍』と返しておく。すると直ぐに『後で結果教えてー(*・ω・*)』と返事が返ってきた。マジ卍は完全に無視されたようだ。悲しみ。

スマホが静かになって、またぼやーつとテレビを眺める。気づけばバラエティー番組は終わりニュースが始まっていた。途中から記憶がない。寝てしまったみたいだ。

時間を見ればもう8時も過ぎて9時になろうとしていた。あまりに遅いのでスマホを見れば、8時くらいに高虎からメッセージが入っていた。『遅くなる。先に寝てくれ』という一文が。

「……はあ。まあ、約束してなかったもんな」

でも朝何も言っただけじゃなかったし、あれだけアピールするくらいだから、てつきり帰ってくるもんだと思っただけ。

何をしてるんだか。高虎の事だから、変な事はしてないとは思うけど……。

「料理、どうしよう・・・」

ラップは掛けてあるけど、直ぐに食べないならやっぱり冷蔵庫に詰めておいた方が良
いだろう。クーラー効いてる部屋だとはいえ夏場だし。

悩んだ結果、高虎の夕飯分だけ取り分けて、後は冷蔵庫にしまつちやう事にした。
取り敢えずお風呂入ってからだけど。

高虎の為に用意した一番風呂に突撃。

遠慮なく温泉の素も投入し、お湯も温め直す。

さつさと体と髪を洗ってお湯に浸かれば、溜まっていた何かが一気に抜けていった。

「ああああああ、ええええゆじゃのお」

個人的に夏場こそ熱いお湯に限ると思ってる。

しっかり汗をかいて出た後、キンキンに冷えたジュースを喉を鳴らしながら飲む。サ
イコー。牛乳でも良いけど、自分的には炭酸ジュースだ。

「あー本当いい湯。いい湯だなあ・・・本当、いい湯。高虎、勿体ないなあ・・・」
濡れタオルを頭の上において、立ち上る湯気を眺めた。

浴場の照らす光が湯気に揺れてる。

ふと横を見るとアヒル隊長が寂しげにこつちを見ていた。

「おいでーアヒル隊長」

手にとって軽く押ししてみるとアヒル隊長はグエグエ声を鳴らした。アヒル隊長は昔パピーが海外で買ってきたお土産で、小学生の時からのお風呂場の相棒である。

前世の記憶を持ってしてもひかれてしまう独特の魅力がある、そういう可愛いやつなのだ。

「隊長ー今日なーオレ頑張ったんだぞー。ついに難敵だっただし巻き玉子も仕留めてなあー」

グエグエと返事するように音が鳴る。

「誕生日祝いの準備したんだー。料理以外はちゃんと準備したんだぞ？色々調べてさー……」

手を離せばアヒル隊長はお湯に浮かんだ。

いつもみたいにプカプカと。

「でも、失敗しちゃった。やつばなれないことはやるもんじやないなあー。出たら片付けしないと。まあ、誕生日プレゼントは明日渡せば良いし、ケーキもな、後で良いし……飾りは取つとかないとかなあ」

指で突けばアヒル隊長が揺れる。

間抜けた顔がこつちに向く。

思わず笑ってしまった。

「……アホみたいだもんな」
今の自分そっくりで。

「たっ、ただいま……」

お風呂から出ると、そんな声が聞こえた。

タオルを巻いて廊下を覗くと、汗だくになつて息を荒げた高虎が玄関の所にいた。乱れた服装から走つてきたのが分かる。

乱

「おかえり？遅くなるんじゃないかなかったのか？」

「あつ、いや、その・・・試験前だつて前に言つたろ。それで大学の友達と勉強してたんだが、そいつに急用が出来て、それで・・・」

「ふうん、そつか。でもだからつて走つて帰つてこなくても良かったろ？見たいテレビでもあつた？言えば録つといたのに」

「ま、まあ、そんな所だ。夕飯、まだ大丈夫か？」

夕飯？てつきり食べてきたと思つたのに、食べてきてないのだろうか？

「食べてないのか？」

「色々、あつてな・・・ないか？」

「あるけど・・・取り敢えずお風呂入っちゃえよ。出るまでに用意しておく」

そう伝えると高虎は笑顔を浮かべた。

いやに眩しいやつをだ。

そんな顔を見ればどうして走つて帰つてきたのか分かる。流石にオレもそこまで鈍くないのだ。

「・・・まったくもう、誰に聞いたんだか。仕方ないなあ」

高虎が何処かソワソワしながら風呂に入ったを見送つた後、スタンバイしていた料理を順番にチンしてテーブルに並べていった。間違つてキャベツもチンしたけど気にし

ない。だし巻き玉子はチンしてないから。

火に掛けておいたカレー鍋から良い匂いがしてきた。

だから火を止めて皿に盛ったご飯に掛ける。

今更だけど、福神漬け買うの忘れてた。

「ま、いつか。別にカレーが主役でもないし」

気にしない。

細かい事は、気にしな—い。

それよりケーキの準備せねば。

ローソク立てて—。

「ゆたか—。悪い、着替え持ってきてくれ—」

「はいはい、今持つてくから待つてろ—」

仕方がないのでローソクは一旦置いて、高虎の部屋にある着替えを持っていつてやる。さっぱりした高虎の顔が少し開いた脱衣場から覗いてた。

「なんかバタバタしてるが．．．大丈夫か？」

服を受け取った高虎が心配そうに聞いてきた。

「だいじょ—ぶ。だから、ゆっくり来て良いからな」

「分かった」

「来る時は言えよ？いいか、勝手に入ってくるな？」

「ああ・・・わ、分かった」

高虎を脱衣場において、オレはまた台所に戻った。

早くローソクとお名前プレートセットせねばだから。

「あ、どのタイミングでケーキ出せば良いんだ？ご飯食べる前？食べた後？いや、後だとケーキ食べられないか？うーん？」

ローソクをセットしながら悩んでると高虎の声が聞こえてきた。着替えが終わったらしい。

ゆっくりで良いといったのに、かなり早い。

「そのまま動くなよー」

残りのローソクをテキトーに刺して、お名前プレートも中央におく。流石にお店の人がやって貰っただけあってカッコいい文字だ。オレじゃこうはいかない。

「ゆたかー」

「ええい！うるさいやつだ！ちよつとは待て！ケーキはやつぱり最初に出そう。カレーおかわりされたら最悪食えなくなるもんな。うん」

ケーキを出すタイミングも決まったので高虎を迎えにいった。誕生日に歌うあの歌の歌詞を、頭の中で練習しながら。

「テトントトントンテーテントン、テントントントンテーテントン、どるるるっどるるるるるー、どるるるるっどるるるるるー」

「世にも奇妙な鼻歌鳴らしてケーキ持つてくるな。流石に食べづらい」

おもったより、夫がチャンレンジャーな友人関係築いてるんですけど

季節は巡り夏本番。

じりじり焼けつくような陽射しが降り注ぐその日。

オレと高虎は無謀にもクーラー無き野外を歩いていた。

「あづい、どげらう」

「・・・お前、まだ朝方で涼しい時間帯だぞ？少しは外に出るようにしろ。怠け過ぎだ」

「むりい、じぬう。どげでえじぬう」

自然と溢れる文句に高虎が溜息をつくが、そんな言われても嫌なものは嫌なんだから仕方ない。

そういう嫁を貰ったと、是非に諦めて欲しい。

そんなにキツイなら帰れば良いのに、そう思うだろう。オレだつて帰りたいたい。でもそういう訳にはいかない。帽子被つて、日焼け止め塗ったくつてるのはお散歩の為ではないのだ。ちゃんと用事があつて外にいるのである。

というか、行き先がないなら家に引き込もっているに決まつてる。当然だ。アイス食

べてる。キンキンに冷えた部屋の中でも毛布被る、本末転倒な暴挙すらしてるわ。太陽この野郎。

「バーベキューなんてえ、断ればよがっだあ……」

高虎夏休みに入る前。

いつものように夕飯を食べていると「バーベキューしたいか？」と高虎がいきなり聞いてきた。意味が分からず理由を聞けば、大学で出来た友人に誘われたらしい。それから大学勢で行けば？と言ったのだが、高虎の友人がオレに会ってみたいらしく、バーベキューはその口実なんだとか。

良い肉も用意するとの事も言われて、それならと顔を出す事に決め——そして今に至る訳だ。

水分補給をこまめにしつつ頑張つて歩き、漸く待ち合わせ場所となつている駅前に辿り着く。すると高虎から聞いていた迎えの車である、青のSUVがそこに止まつていた。

「子宝ー、こつちこつちー」

軽い声に視線を向ければ、SUVの開いた窓から茶髪のにいちゃんが手を振つていた。

「高虎、あれ？」

「ああ、行くぞ」

高虎に手を引かれて車の所に着くと、茶髪のにいちやんが驚愕の声をあげる。

「おおっ！嫁さんってその人か!? 聞いてた以上に可愛いんですけど。いるんだな、リアルにお人形さんみてえな人・・・つか、子宝が隣立つと犯罪臭すげえな」

「喧しい。・・・ゆたか紹介する。弦巻清正（このまきせいよ）だ」

紹介された茶髪は掌をヒラヒラさせて「よろしくー」と軽い挨拶をしてくる。オレは身嗜みを軽く整えてから高虎より一步前に出た。

「お早う御座います、子宝ゆたかです。いつも夫の高虎がお世話になってます。本日は夫婦共々よろしくお願いします」

軽く会釈してマザーから仕込まれた挨拶をきつちりすると、弦巻は口許に手を当て変な声をあげた。何なのかと様子を窺えば、頬を赤らめてプルプルしてる。

「かわゆい・・・子宝（大）よ、この子、うちにお持ち帰りして良い？」

「・・・命を懸ける」

「命懸けるとか、あはは——ひい!? ジョーダンだって！目がマジ過ぎるだろ！」

弦巻が酷く怯えてるので、高虎がどんな顔してるのか見ようとしたけど、後ろから抱き着かれて阻止された。頑張って顔をあげても顎しか見えない。

そして糞暑い。

そのまま後部座席に連行されて、高虎の膝の上に座らされた。逃げようにもがっちり掴まれて動けない。暑すぎる。

「高虎、あつい・・・」

「弦巻、クーラー全開にしろ」

「まあ、クーラーは全開してやるけど・・・離れないと意味ないと思うぞ。・・・あーはいはい、聞く耳なしね。お好きになさつてくれえい」

ガンガン吹き荒れる冷氣にオレの火照りが静まっていく。もうずっとここにいたい、そんな気すらしてきた。温度が低くなっていく車内。背中から伝わる高虎の体温がまた良いアクセントになって、心地良くて段々とウトウトしてくる。

「寝てて良いぞ」

「うーん、でも・・・なあ・・・」

「大丈夫だ。着いたら起こしてやる」

チラツと運転してる弦巻を見ると、同意するようにコクコク頷いていた。

それならばと、お言葉に甘えて瞼を閉じ高虎に体重を預ける。すると高虎の心臓の音が聞こえてきた。そのまま音をぼんやり聞いていると意識が少しずつ遠退いていった。

「キョーロー!! つそいのよお!!」

甲高い怒鳴り声に目を覚ますと、運転席に座る弦巻が開いた窓から伸びる腕に胸ぐら
を掴まれ、縦横上下に激しく揺らされている光景が視界に入ってきた。

何となしに腕の出所を追って窓の外を見ればライダースーツを着たポニーテールの
女の人と、鬱蒼とした森林が目につく。

「ごめつ、ごめんつてば! でも俺のせいじゃねえつて、だつて混んでたからあー!」

「っさいわ!! この糞暑い中、目の前でバカップルがいちゃつく中、一人寂しく待つてた私
の身になれつての!! 死ね!!」

「だからつ、俺が迎えにくくつていったのに!! ぐえ!? ごぶつ、お、お前が、バイクで行き
たいとか、言つたせいじゃねえかよお!! 免許取り立てで嬉しいのは分かるけど、ちよつ
とはしやぎすつぎぎぎぎぎ!? ギブ!! ギブ!! しぬうう!!」

争う二人をぼんやり見ると頬つぺたをつつかれた。

見上げると高虎の顔がある。

「起きたか?」

「まあ。あれは?」

「福島照海ふくしまてるみつていつてな．．．弦巻の友人だ．．．俺にとつては知り合いだ」

「そこは友人じゃないんだな」

「弦巻の友人だから会うこと自体は良くあるが、個人的には付き合ひもないしな。勘違いされても困る」

「勘違い？ん？」

何を勘違いするのか分からないが、こうして一緒に遊び行く予定を立てるくらいなら友人なのでは？と思っただけど．．．まあ、高虎がそういうなら態々何か言うのも違う気がしたので黙っておいた。

尚も争う二人に高虎が態とらしく咳き込む。

「清正、福島。楽しんでる所悪いんだが、もう良いか？」

「楽しんではない!!」

息ピツタリ。

なにあれ、凄く楽しそう。

鬼のような形相をしていた福島さんだったけど、高虎とオレを見るとその表情が変わった。怪訝そうな顔から驚きを浮かべた顔に。そして鬼の角の代わりに、犬の耳が生えた気がする。

「子宝くんっ、その抱えてるのつて、えっ、なにそれ、可愛いんだけど。妹さん——で

はないわね。似てないし。はっ!!まさか、その人が噂の子宝くんの妄想嫁!?

「妄想じゃないと言っただろ、いい加減——」

「犯罪じゃないのお!!」

そういうと福島さんはドアが開けてオレを高虎から拐っていった。外気に晒されたオレの体力は凄い勢いで減っていく。あと何秒かしたら死ぬ。

「見損なつたわ!キヨと付き合う割には、わりとまともそうだと思ったのに!!中学生に手を出すなんて!!」

「そいつ少し小さいけど、俺達と同一年だからな」

「うっそお!?!こんなに可愛いのに!?!」

「それは否定しないが、それとこれとは関係ないだろ」

福島島の疑うような目がオレを見下ろす。

「本当に?」

「一応は……」

そういうと福島さんの目がジロジロと体を見始めた。

そしておっぱいの所で視線が止まる。じーっと見てきて、自分の胸を触って、またじーっと見てくる。

「B?」

「ギリCはあるけど」

「ぐはっ、負けたっ!!」

福島さんはオレを離し、胸を押さえながら膝をついた。

よっぽどショックだったのか放心してる。なんか小さい声で「可愛い正義」とか呟いてる。最後のはなんか違う気がするけど、面倒臭いので放っておいた。なんか、弓子と同じ臭いがするから。

しかしなあ、オレとしては胸より身長が欲しかったから、福島さんの高めの背も、スレンダースタイルなんか羨ましい限りなんだが・・・まあ、人それぞれだからな。こればかりは。

暫くして元気を取り戻した福島さんと挨拶すまし、バーベキュー用の道具やら材料やらを皆で手分けて持って車を後にした。

福島さんに案内され森林に囲まれた道を歩いていくと、拓けた場所に辿り着いた。

森の中に拓かれた大きな空間の中には、その広さに見合った広々とした庭と二階建ての大きなログハウスが建っていた。庭の端には藍色の屋根の東屋も見える。

ちよつと目をこらして見れば、庭の向こうの雑木林の先に湖的な物も見えた。

「別荘的なっ?」

「らしいな。俺も詳しい事聞いてないんだが」

高虎に聞くと頷いた。

そうらしい。

「皆さーん、こちらです」

元気な声に視線を向ければパラソルの下でバーベキューの用意をしてる二人の男女の姿があつた。

一人は丸っこい眼鏡を掛けた文学系女子で、もう一人は淡い黄色のサングラスを掛けた金髪ヤクザ。

オレは静かに高虎のTシャツの裾を握つた。

文学系女子は兎も角、あれは駄目だ。

前世の時から、あの手の連中とは仲良くなれる気がしない。心底苦手だ。今世においても、それはミジンコ一匹分たりとも変わらない———というか今世の方が確実に悪化してると思う。

基本的に高虎がいたから大丈夫だったけど、あの手の人種はたまにやってくるのだ。ナンパとか断つてもしつこいし、直ぐ怒鳴つたりするからマジ無理。ヤンチャな人にひかれる奴の気持ちがいれん。こわくないか。普通に。あれか、DMなのか。

しかもよくよく見ると、目の上とかに刀傷みたいなのあるんですけど。・・・というかメチャクチャ睨んできてるんですけど。

ふいに、頭の上に大きな掌が乗った。

突然の事にびっくりしていると、そのままぐりぐり撫でられてしまう。抗議する為に見上げれば、優しい色をした瞳と目が合った。

「大丈夫だ、あいつはそんな悪いヤツじゃない。見掛けはあれだけだな。それに、もしそうでも、俺がいるだろ」

「……まあ、うん」

そこを疑ってる訳ではない。

それは信用してるし、頼りにしてる。

視線を高虎から文学系女子達に戻すと、不思議そうな顔をした文学系女子と目があつた。文学系女子はこちらを見て眉を潜めてる。

そして隣のヤクザを見て、オレを見て、またヤクザを見てから、その頭をペシンとひっぱたいた。

「何睨んでるの。ただでさえ怖い顔してるんだから駄目でしょう」

「てえつな……仕方ねえだろ。クセなんだよ」

ポカポカとヤクザを叩いた文学系女子はこちらに駆けてきた。

「こんにちわ、縁あつて子宝高虎さんと仲良くさせて頂いていきます。加藤あかりです。あつちの目付きの悪いのは二輪安治ふたわやすはるつて言います。目が悪いのと、顔が悪いのがちよつ

とあれだけど、嘸みついたりしないから安心して下さいね。今日は宜しくお願いしま
す」

「こちらこそ……初めまして、子宝ゆたかです。高虎が、えつと、夫がいつもお世話
になってます」

お互いペコリとお辞儀交わしていると、金髪ヤクザ二輪がこつちにきた。何故か傘を
手にしてる。あと、さつきより少しだけ眉間のしわが薄い気がする。

「……睨んで悪かった。いや、睨んでるつもりは無かったんだが……気になつて
な。それ」

二輪がサングラスを取ると、緑色の瞳が覗いた。

今になって気づいたが、二輪は全体的に色素が薄い気がする。肌も白っぽいし、髪
だつて染めた感じないし。何よりこのくそ暑い日に長袖長ズボンなのが気になる。

オレの視線に気づいたのか、二輪は傘を差し出してきた。

「体質でな。俺とは違うかもしれないが、あんたも日射しに強い訳じゃねえだろ。ここ
はよく光がさす。帽子だけだとキツイから使え」

ぶつきらばうな言い方だけど、心配してくれたのは分かった。どうやら本当に悪いや
つでは無さそう。

「えつと……ありがとう。でも折り畳みのやつ持つてるから大丈夫……です」

「そうか……なら良い」

外見はあれだけ、何処と無く同士の気配を感じて見つめあつてると高虎に後ろから抱き上げられた。

二輪の方もなんか加藤さんに耳を引つ張られてった。

「なんだ、今の妙な間は」

「?：なんだって言われても、別に?」

よく分からない高虎の相手をしてると、加藤さん達も似たような事してるみたいで剣呑な話声が聞こえてくる。なんの取り調べだろうか。変な雰囲気。

それから少しして、弦巻が妙な空気を完全無視して残りの準備を済ませた事により、お昼ちよつと過ぎにはバーベキューが始まった。

焼ける食材を眺めながら皆の話を聞いて分かったのだが、どうやら高虎の大学の友人はお金持ちが多いみたいだ。チャラ男弦巻はどこぞの会社の跡取り息子で、福島さんも良いところの御嬢様らしい。ヤクザ二輪もヤクザではないけど、大きい家の子だとか。加藤さんに至っては、今バーベキューしてる別荘と目の前にある湖を含めて大体所有地、という破壊力のある言葉で察した。

東屋のベンチに涼みながら食べる焼きたてのお肉はとても美味しかった。少し暑かったけど、高虎の友人の事をしれて良かったし来て良かったと思う。

ただ、まあ、今度何かに誘ってってくれる時があるなら、涼しい所を希望したい所だ。
暑いマジ無理。

「お前いじめられてない?」

「いじめられてはないな。．．．まあ、たまに果てしないズレを感じる時はあるが」

「それなら良いけど」

おもうてたより、大変そうなんですけど

結婚生活も早いもので5ヶ月目を迎えた今日この頃。

夏の暑さにあっさり完敗したオレと高虎は、夏特有のプールだの海だののイベントをあっさり放置して、今日も今日とてクーラーの効いた部屋で大人しく映画鑑賞に洒落混もうとしていたのだが――。

「たたたたたたつ、たたたた！たたたたあー！！うまつ、うまれるつ、うられるう！！」
――お隣さんがベランダで産氣付いてるを見つけてしまって、それどころではなくなっていた。

いつものように洗濯物を干そうとベランダに出ると、聞き慣れない音を聞いた。音は隣の部屋から聞こえていて、よく聞けばうめき声っぽい。

だから高虎にきて貰って一緒に声を掛けて覗けば、お隣の山瀬さんが布団の上で苦しそうに踞っていたのだ。

「お腹が、急に、痛くなって——」

絞り出された声を聞いて、高虎は直ぐスマホを手にした。電話先は勿論119。電話が繋がってからは電話相手の指示に従ってか、山瀬さんから話を聞いたり、様子について話したりと世話しなく色々やって、電話を切った後は一言断ってからベランダ伝いに隣へ乗り込んでいった。

オレも乗り込もうとしたけど玄関を開けるからそっちから入れと強く言われ、もどかしい気持ちで玄関からお隣にお邪魔する。

「よおおおしい!!で、お、おとおお、オレ、オレは!?何すればいい!?お湯か!?タオルか!?タライか!?ひっひっひっふーって言ってた方がいい!?!」

「産ませようとするな。兎に角、お前は山瀬さんについてろ。出来るだけ動かさないように。何か変化があったら電話してこい。——後は、そうだな。出来たらで良い、山瀬さんに聞いて必要な物を用意しろ。恐らくこのまま入院だからな。無理には聞くなよ、出来たらな?」

「わっ、分かったあ!!」

山瀬さんをオレに任せた高虎は救急の人を案内する為にマンションの入り口にダッシュしていく。

オレは言われた通り山瀬さんから何とか話を聞いて、保険証やら母子手帳やら診察券

やら財布やら入ったバッグとか、元々入院する為に用意していたお泊まりセットを引つ張りだしておいた。

「だだだだつ、だい、だいたじよーぶだからあ!!いま、たたたつ、たかたかがつ、きゅーきゅーしやああ呼んでるから!」

「つふ、ふふふ。ありがつ、とう、ゆたかちゃん」

山瀬さんの背中を擦りながら待つてると、玄関の方がドタドタしてきたなど思えば高虎が救急隊員を引き連れて戻ってきた。流石に救急の人。テキパキと色々なんかやつて、山瀬さんを担架に乗せる。

よく分かんないけど、すげえ。

「ご家族の方ですか?」

山瀬さんを見てたらいきなり緊急の人に声掛けられた。

勿論ご家族の方ではない。なので首を横に振ろうとしたけど、手がぎゅつと握られてオレは止まった。

見れば山瀬さんがオレの手を握ってる。

目を見ればいつもの優しい目が、不安そうに揺れていた。咄嗟に高虎へ視線を送れば頷いてくれる。

「——あの、家族ではないんですが、お隣同士で付き合ひがありました。同行させて貰

えませんか」

高虎の言葉に救急隊員の人は小さく頷く山瀬さんを見て「分かりました」と一言告げ、付いて来るように言った。

一緒に病院について行って二時間程。

高虎とオレは分娩室に入った山瀬さんを待っていた。

本当は中に突っ込むつもりだったのだが、流石に部外者なオレが入る訳にもいかず外待機。部屋から響く悲鳴を聞いているといてもたつてもいられず、ウロウロしてたら高虎に抱っこされてしまった。暑い。

「・・・お前が産むんじゃないんだから、少しは落ち着け。あと、腕のうぶ毛を抜くな。微妙に痛い」

「わ、悪い。そこらうぶ毛があつたから。つい」

「どんな理由だ、それは」

高虎と話してるとまた悲鳴が聞こえてきた。

しかも死んじやいそうなやつだ。

「高虎っ！死んじやつたりしてないか!?!いまの!?!」

「大丈夫だろ・・・山瀬さんも初めての出産だから、負担もあるんだろうが、まあ大丈夫だ。分娩室に入る前少し聞いたが、最悪な状況ではないらしいしな」

「そ、そうなのか?」

「ああ、だから落ち着け。ほら、深呼吸しろ」

言われた通り深呼吸してたら気分が楽になった。

少しだけだけ。

高虎の体温を感じてると山瀬さんの悲鳴が弱くなった。

さつきから何度もこういうのは聞いてきた。だから分かる。終わった訳ではない事を。

どうやら出産には痛みの波があるらしい。それに陣痛がきたからといっていきなりポーン！つと出るのではないらしい。

「旦那さん、こないのかな・・・」

「どうだろうな。まあ、忙しい人だから。一応連絡はしておいたが・・・返事がなかつ

たしな。メッセージ見てくれりや良いが」

「仕事は大事だもんなあ」

山瀬さんの旦那さんとは面識は少ない。

ゴミだしに行つた時とか何回か挨拶したただけだ。

地味な顔でぱつとしない人だったけど、優しそうなイイ人雰囲気の人だったのは覚えてる。山瀬さんからのろけられた旦那さんの人柄なら、きつと連絡内容見たらすつ飛んでくるのだから、まだメッセージを読んでないのかもしれない。

「……お腹切るのかなあ」

「可能性はあるらしいが、今の所大丈夫そうだ」

「そっかあ……」

ふと自分のお腹を擦ってみた。

山瀬さんの膨らんだお腹と同じ場所。

今はぺったんこだけど、高虎との関係を進めていったらもしかしたら膨らむ事になるかもしれない場所。

自分の中にもう一つの命って考えると、なんか不思議な気持ちになる。

気持ち悪いとかは感じない。

けどなんだか不思議だ。

「なあ、高虎」

そつと見上げると不思議そうな顔をした高虎の顔があつた。いつもみたいに「どうした?」と聞いてくる。

「高虎も、その、赤ちやんとか・・・欲しいか?」

「あつ?は、え、あ、う、お、おお、うん、まあ、いらなひとは言わなひ・・・けどな。それは、えつ、どういふあれだ?」

「いや、特に深い意味はないけど?ただ——」

なんと言つたら言いか。

オレはまだ高虎の気持ちに答えてやれる気はしない。

高虎の事は好きだけど、異性へのというよりは家族とか友人に向ける気持ちと似てる気がする。

だからまだ、高虎とそういう事したいとは思わなひし、赤ちやんが欲しいとかもない。けど、ちよつと考へてしまつた。

山瀬さんみたいに膨らんだお腹とか。

高虎がそこに耳を当ててる姿とか。

自分が踞る姿とか。

「——もし、もしさ、そういう時がきたらさ、オレは一人はやだなあつて思つて」

忙しいのは分かる。

仕事は大切だ。

でも、やっぱり一人は怖い。

「山瀬さんがさ、手を握ってきたんだ。凄く強かった。いつもの山瀬さんはポワポワしてるだろ？そういう風な人じゃないから・・・だから、やっぱり、怖いもんなんだろうなって思った」

山瀬さんが沢山準備してきたのは知ってる。

たまにお茶しにいくと部屋に育児の雑誌とか増えているのが目についたし、赤ちゃんが入る部屋とかに物が増えてくのを見る。きつと道具だけじゃなくて、目に見えない心構えとかしてたんだろうと思う。

それでも怖くなってしまう。

どうしようもなく不安になってしまった。

痛くて、苦しくて、動けなくなってしまう。

「なあ、あのさ、まだ、オレさ、高虎の気持ちに伝えられないんだけど・・・その、エツチとかは無理だけど、いや、ちゅーも無理だけど——もう一つ、約束してくれないか？」

オレは勝手に我が儘だと思う。

まだ高虎に何も返してあげてないのに。

約束ばかり押し付けてる。

「オレがもしそうだったら．．．側にいて欲しい。ずっとじゃなくて良い。そんなの無理だし。だから、出来るだけで良いんだ。側にいて、手を握って欲しい」

直ぐ返事は返って来なかった。

ただ遊ばせていた手が握られた。

ぎゅつと。

「——分かった、約束する」

握られた掌はゴツゴツしてた。

でも嫌じゃない。

温かくてほつとする。

「無事に産まれると良いなあ．．．」

「そうだな」

それから少しして、分娩室から大きな泣き声が響いてきた。産まれてきた事を皆に伝えるように。本当に大きな声で。

「おおー、しわしわ。お猿さんみたい」

看護士さんに呼ばれて病室に入ると、山瀬さんが赤ちゃんを抱えていた。山瀬さんに誘われ赤ちゃんの顔を覗くと、赤ちゃんの顔はしわしわ。おもうてたよりもお猿さんだった。眉間にしわを寄せたままスカーフと熟睡する姿は、やっぱりお猿さんをイメージさせる。

思わず溢れた言葉に高虎がジト目になったが、山瀬さんは「ねえーお猿さんみたいなのおー」と同意してくれる。だよねえー。

「山瀬さん、それで、この子はどっちなんですか？」

「ふふ、男の子ですって。ほら、ちっちゃいのがついてるでしょ？うちの人そっくりいー」

「・・・そ、そうなんですかあ」

見せられた赤ちゃんのそれを眺めながら、オレは複雑な気持ちになる。そつと隣をみ

れば、高虎も微妙な顔をしていた。そらそうよ。赤ちゃんのそれと比べて、そっくりとか。旦那泣いちやうよ。例え形的などが似てるとかの話でも……前世が男の者として、それはあまりに酷すぎると思うのですよ。うん。

「真由美しい!!ごめえええん!!大丈夫だったかあ!!」

病室に入ってから暫く。

赤ちゃんのほっぺをプニプニしていると、旦那さん大汗をかいて現れた。よっぽど急いで来たのか旦那さんのスーツはヨレヨレ。息も荒く、顔色も悪い。死にそうな顔して

る。
旦那さんはオレ達を見つけると感謝の言葉と共に頭を下げ、直ぐ山瀬さんの元に向かった。

「あなた?お仕事はどうしたの?」

「つ、まあ、そ、早退してきたつ、というか、それどころじゃないだろお。大丈夫なのか?体は?赤ちゃんは?」

「ふふふ、少し落ち着いて。私も赤ちゃんも大丈夫だから。ほらパパですよおー?」
旦那さんの視線は抱かれた赤ちゃんを見た。

あれだけ大騒ぎして旦那さんが入ってきたのにも関わらず、赤ちゃんは山瀬さんのおっぱいに体を預けたまま、まだ寝息を立ててる。なんて豪胆な子なのだろうか。大物になりそう。

旦那さんは赤ちゃんの姿を確認するとボロボロ泣き出した。言葉は出ないようで嗚咽してる。こういう人だったのか。

ぼけっつーと様子を見てると高虎に手を引っ張られた。

高虎は口元に人差し指を当てた後、そつと廊下を指差す。流石に空気は読めるので頷いてついていく。

部屋を出る時、山瀬さんと目が合った。

山瀬さんは笑って口をパクパクさせる。

オレには口の動きだけみて言葉が分かる特殊能力はない。だからちゃんとは分からなかったけど、何となく感謝されてる気がした。

なので、軽く手を振っておいた。

どういたしまして、と。

病室を出てスマホを見ると、もうすっかりおやつの時間になっていた。ふと振り返った先の山瀬さんの病室からは、旦那さんの声と赤ちゃんの泣き声が聞こえ始めて随分と賑やかになってる。

もうきつと、怖くも、寂しくはない。

「——高虎、帰ろっか」

高虎は病室を見た後「そうだな」と呟いて歩き出す。
オレの手を引いて。

「タクシーで帰ろうな」

「確かバスがあったから、それで我慢しろ」

「うええええええええええ」

おもうてたより、体がへツポコなんですけど

残暑残る八月某日。

うっかりお盆は映画見て過ごしちゃったし、もう夏も終わるし、そろそろ実家帰ってパピーとかお隣の高虎ん家へ顔見せに行こうかなあと思っていた矢先――。

「たかとらー、たかとらー、じゅーすー」

「はいはい、スポドリで良いか?」

「こーらー」

「スポドリにしとけ」

――夏風邪で倒れたオレは布団でぐだぐだしていた。

差し出されたストローを吸うと甘い味わいが口一杯に広がって、渴いていた喉が潤いに満ちていく。おいしい。風邪の時のスポドリ、マジうまい。

「なんか食べるか?凝った物は無理だが、簡単な物なら作れるぞ」

そう覗き込んでくる高虎の顔は凄く心配そう。

正直何も食べたくないけど、その顔を見てるといらぬとは言いつらい。今更だけど、こいつオレの事好きすぎるだろ。ただの風邪だよ?何その目?そんなに重病じゃな

いんだけど……えつ、重病なの？オレ死ぬの？

「たかたら、もしかして、オレしぬの？よめーは？」

「なんでそうなる。勘弁してくれ」

高虎はオデコに乗っていた濡れタオルをとると、新しい冷え冷えのタオルを乗せてくれた。

冷たくて気持ち良い。

「ちよつとよめーのびたきがする」

「多分長生きするよ、お前は……。さて、あんまり食べたくないのは分かるけどな、少しは食べてくれ。なんだったら買ってくるか？でも近くで売ってる物とかに——」

ぎゅつと愚か者な高虎の服の裾を引っ張れば、視線がこつちを向いた。

「きさま、オレがかけいぼを、かきはじめたことをしてのろうぜきか……。おまつ、オレがどれだけくろうして、せんげつよりおおくのくろじを、たたきだしたとおもつんだあ。ゆるさんん、むだづかいなど、ゆるさんん」

「最初は文句言つてた癖に、なんで節約にはまってるんだよ」

マザーに脅されて始めた事だけど、あれつてあれなんだよ。数字におこしてみると、結構楽しいの。やり過ぎは良くないのは分かっているから程々にしてるけど、一工夫で先

月より浮いてたりすると、めつき嬉しいの。何あれ。心がびよんびよんするんじゃあ。浮いたお金でゲーム買うんじゃあ。

「きのうかいだしにいったんだから、それでなんとかしろお。こんげつはくーらーだいがばかにならないしい」

「まあな。……じゃ、うどんとかどうだ？」

「うどん……おんたまもお」

「微妙に手間の掛かる事を……はあ、分かった。待つてろ」

高虎が台所へ行くと何だか少しだけ寂しい気がした。

普段なら何とも思わないんだけど……風邪は駄目だな。妙に弱くなる。うむむ。

スマホからアニソンを流しっぱなしにしつつ、天井をぼやーつと眺めて暫く。良い匂いと共に高虎が戻ってきた。見ればお盆にどんぶりが乗っかってる。

「おんたまは？」

「あー、許せ」

言葉の意味が分からず起き上がってどんぶりを覗くと、想像してたよりちゃんとしたうどんがあった。

白くて太い艶々の麺。ワカメとゴマが揺れる、鰹だしと醤油の香りがする鱈甲色のスープ。小口ネギがパラパラと添えられ——ど真ん中に真っ二つにされた茹で玉

子の姿があつた。茹で玉子の姿が。かつちり茹であげられた、茹で玉子の姿が。固茹で卵が。ハードボイルド卵おが。

「おんたま……」

「悪い、今度は上手くやる」

「べつにいいけどさ……ありがと。……おんたま」

「……作り直してくるか」

「いただきます」

あのプルプル感を期待していたからショックはショックだったけど態々作り直す程の事もないので、しょんぼりする高虎は放ってお盆に乗っていたレンジでスープを飲んだ。醤油と鰹だしのバランスのよいしょっぱさと甘さが口に広がる。ホツとする味だ。

胡麻の風味もあつて美味しい。

「しちみー」

「胃腸が弱つてる時は止めとけ。治ったら幾らでも使つて良いから」

「なんと」

七味禁止とは。

高虎食堂は厳しいな。

スープの味も堪能したので早速麺をと思ったんだけど、どうも上手く掴めない。箸か

らツルツル落ちていく。いかん。頭ぼーつとする。

四苦八苦しっていると箸を高虎に取られた。

高虎はそのまま空いた手で器を手にすると、オレから奪った箸で麵をつまみ上げ差し出してくる。

「おまえ、でんせつのあーんをするつもりか。オレはそんなに、しりがるじゃないぞお」
「伝説って……小さい頃も似たような事してやった覚えがあるんだが。何回お前の口にプリン入れたか分からんぞ」

「ん？そうだっけ？」

そう言われるとそんな気もする。

というか、高虎は大体側にいるから、ちやつかり看病とかしてても当たり前みたいな所があるんだよなあ。

差し出されたそれをふーふーしてから口に入れる。

うどんはシコシコのツルツルだった。残念ながら煮込みが足りないから味は染み込んでなかったけど。

「食えそうか？」

「んん、らいじょーぶ。あー」

「雛鳥か。さっきの抵抗はどうした」

介護されるままうどんをツルツル頂いていったが、どんぶりの半分も食べた所でギブアップした。ポンポン痛い。マジ無理。

ご飯も終え一眠りした後、目を覚ましたら夕方方の四時を回っていた。なので高虎にお願いして座敷に布団をしいて貰う。———というのもテレビ見たかったからだ。そろそろ再放送のドラマが始まる。

オレの部屋にはテレビがない。テレビがあると籠るからという理由で引越した時持参したテレビは座敷の部屋に持ってかれてしまった。マザーに。うちにあるテレビは座敷とリビングの二つだけなので、見ようとしたら移動せねばならない。スマホ？目が疲れるからやだ。

録画しとくとも言われたけど、断固として拒否した。オレが続き気になって仕方がないんだよ。

おトイレを済ませて居間に着くと、お客さん用に置いといた布団が敷いてあった。枕はオレの部屋から持ってきたのか、マイ枕だ。気が利く。

布団に潜り込んでテレビをつけると、何故かいつもドラマやってるチャンネルでニュースがやってた。意味も分からず眺めてると、火災とか爆発とか言ってる。画面の下の方にドラマは来週とかふざけた事も。

「ぐぬぬぬっ」

「何喰ってんだ」

ぐぬぬぬしてたら何冊かの小説を小脇にした高虎がやって来た。無言のままテレビを指差してやれば「ああ」と納得したように頷く。

「仕方ないだろ。部屋に戻るか？」

「いい、へやにいてもひまだかあ」

仕方ないので以前買ったアニメのDVDボックスを引つ張りだしてディスクからプレーヤーに突っ込む。再生ボタンを押せば、制作会社の名前とかが出て来てしんみりした音楽と共に始まった。何とはなしに二話めから流れるオープンニングソングを鼻歌で歌っていると、背後から押さえ気味の笑い声が聞こえてきた。

振り向けば高虎が微笑ましそうに眺めてる。

「なんだよお」

「いや、何でもない。風邪治ったら、今度カラオケでも行くか」

「たかともうたえよお」

「いつもの良いならな」

こいつ、また同じ歌を歌うつもりか。

別に良いけど・・・たまにはこう、レパートリーを増やしたりとか。いや、言つて

も仕方ないか。こいつはこういう奴だ。

そのまま寝っ転がりながらアニメを眺めていると、おでこに高虎の手が置かれた。少しヒンヤリ。

「少しは熱下がったか？一回測ってみろ」

「あいよー」

渡された体温計を脇に挟んで少し、ピピっという電子音が鳴った。取り出して見れば、37, 2℃と平熱よりちよつと高めの数字。高虎に見せれば「明日には大丈夫そうだな」と頭を撫でられた。

「これに懲りたらへそ出して寝るなよ」

「オレも、いとしてへそだしたわけじゃない」

「まあ、寝相の悪さは直しようがないか・・・」

呆れたような顔と溜息。

自然と沸き上がる、この野郎馬鹿にしゃがってという憎しみの気持ち。癩だったのを脛をパンチしてや——ったい!?!こいつの脛固いつ!手がああ!

悲しい相打ちから暫くして、また熱がぶり返してきたのかぼーっとしてきた。僕と私達の痛快娛樂復讐劇がぼやけて見える。やっときさの鉤爪さんとのファーストコンタクトがああ。

「今度は何唸ってるんだ」

「んー」

隣に腰かけていた高虎へ視線を向ければ、持っていた小説にしおりを挟みテーブルへ置いた。

そのまま空いた手でオレのおでこに触れた高虎は片眉をあげる。

「また熱がぶり返してきたのか。ならアニメは終わりにして軽く食べて、薬飲んで寝ろ。何が良い？」

「……. いらぬい」

「ヨーグルトあったか……それくらいなら大丈夫か？」

いらぬいっつったのに。

まあ、良いか。何も食べないのは良くないし。

渋々頷くとそう時間も掛からずヨーグルトがやってきた。器を覗けばみかんが混ぜ込まれてる。そんなの買ったつくとぼんやり考えてると、スプーンに掬われたヨーグルトが口元にやってきた。

「はむ」

思わず口にすると、高虎と目があつた。

生暖かい色に染まる、その目と。

まあ良いけど……んまい。甘ずっぱい。

「前に缶詰め買ったろ。翔大くんが遊びにきたとき」

「ほっとけーきまつりのときかあ」

「無駄に買ったからな。まあ、これで最後だけだな」

お弁当袋をあげて少しした頃。

一回翔大くんがマザーと遊びにきた事があった。叔母さんが用事で急にこれになつた時で、七夕の約束をした時だ。

その時、翔大くんを歓迎する為にホットプレート引つ張りだしてホットケーキ祭りをやつたのだが・・・果物の缶詰めとかクリームとかハチミツとか無駄に残つた記憶がある。

ヨーグルトを頬張りながらそんな事を思い出していると、高虎の最後という言葉に引つ掛かりを覚えた。何せ果物の缶詰め馬鹿みたいに残つてたのだ。それこそ山だった。

「これで、さいご？あんなに、あまつてたのに？」

「・・・まあ、たまに俺が食べてたからな」

「あんなにいっぱいあつたのに・・・おまえも、じみにあまいものすきだよなあ」

「お茶と合うんだ、これが」

「・・・くだものはあわないだろ」

この無頓着野郎は、まったく。

頓着しないときは、本当に全然そういう事気にしないな。お茶があれば良いのか。こつちは楽で良いけども。

「ご飯を食べ終わった後は薬を飲んで、頑張つて歯だけ磨いてまた座敷で横になった。残念ながら体を拭く気力も、着替える気力も、部屋に帰る気力など持ち合わせていない。もう寝る。戻つてくるついでにトイレもいったし。」

「そこまで頑張つたなら部屋に戻れ」

「もう、むりい」

「・・・はあ、まったく」

高虎はそういうとタオルケットを持ってオレの隣に寝転んだ。座布団を折り曲げて枕にしてる。

「どうやら一緒に寝る気らしい。」

「ねこみをおそうきだな」

「襲わん。そこまで理性が弱いつもりはない。約束したしな」

「すえせん、くわぬわおとこのはじ、とかいうだろ」

「お前は俺にどうして欲しいんだ」

「そう言つてしかめつ面になった高虎の顔。」

「それが妙に気になって手を伸ばした。」

予想通りオレの頬つぺたと違って、高虎の頬は手触りがそんなに良くない。なんかベタベタする気がする。

「どうした？」

「んーんー、なんでもない」

そんなに良くない手触り。

これならぬいぐるみでも撫でてた方がマシだけど、不思議と安心出来た。瞼が重くなつてく。

ふと、子供の頃もこんな風に昼寝したのを思い出した。

寝つけない時とか、隣にいる高虎のプニプニ頬つぺたを堪能してると不思議と眠くなったなあ。今でこそ触りがいいの頬つぺたになつてしまったけど、園児高虎は本当に良い頬つぺたをお持ちだったのだ。

でも、あの時感じた、どこかポカポカする気持ちは少しも変わらない。

「お前は昔から変わらないな」

優しくして柔らかい声が耳に響いてきた。

頬つぺた擦つてた手にゴツゴツした感触が触れる。

「それやられるとな、俺が眠れないんだよ」

「……うん」

「本当に分かつてんのか？」

「……………うん」

オレの手を触っていた固い感触が消えた。

ぼんやりとした頭で何処にいったのかと思えば、今度はオレの頬つべたに触れた。ゆっくり撫でるように。なんだかくすぐつたい。

「ちよつと熱いな。氷枕にするか？」

「……………うん、らいじよーぶ。なあ、たかたら」

「ん？どうした」

手招きすれば、高虎が顔を近づけてくる。

オレは頑張つて起き上がって、その頬にちゅーしてやった。高虎がこつちを見て目をぱちくりしてくる。めちやぱちくりしてくる。なんか、ちよつとだけ可愛く見える。

「えへへ、きようはありがとな。ごほうび」

「そ、そつか……………」

高虎の真つ赤になつた顔を少し眺めた後、オレはゆつくり目を閉じた。感謝の気持ちも少しでも返せたという自己満足と、胸の内にあるポカポカする安心感に浸りながら。

それと明日シラフになつたら死ぬほど後悔するんだらうなあと、いずれ自分を襲ってくるであろう羞恥心を他人事のように思いながら。

「くかあー．．．．．」
「今日、風呂入るの止めとこうかな．．．．．」

おもうてたより、残暑が厳しいんですけど

高虎の夏休みにも終わりが見えてきた今日この頃。

『——全国的に晴れ間が広がるでしょう。予想最高気温は33℃と高く、まだまだ残暑の残る1日となりそうです。日差しが強い事も予想されますので、日中お出かけの際には、熱中症対策も忘れずにお出かけ下さい。お昼から夜に掛けて、一部所により夕立の恐れも——』

暦の上では夏も終わると言うのに……オレと高虎は部屋でテレビの天気予報を眺めながら、エアコンからふく冷風を浴びつつゴロゴロとだれていた。

そう、俗にいう夏バテである。

もう秋そこまで来てるのにな。

やる気もどうにも起きなくて、洗濯物を干した後は朝ごはんも作らず、ただリビングの床の上でゴロゴロするだけ。マット無いところ、ごつつうちめたい。ソファーに腰掛けてる高虎も何も言わない。買い置きしてある菓子パン食べたなら朝からずっと一昨日買ってきた小説読んで。お互いがお互いほったらかし。

少しだけ、仮にも新婚夫婦なのにこれで良いのか？とも思ったけど、真剣に小説読んで

でるみたいなので放っておく事にした。

ぼんやりテレビを眺め続けていると、おデブな芸人が街中で食べ歩く番組が始まった。美味しそうにアイスやメンチを頬張り、お決まりの言葉で美味しさをアピールして。ちよつとアイス美味しそう。

高虎、駅前んとこのジェラート買ってきてくれないかなあと心の中で思っていると、おデブな芸人があるお店に入っていた。暖簾が掛けられた、ちよつとお高そうな和風のお店だ。

『まだまだ残暑が厳しいですからね！ここはね、うなぎ、食べて精をつけないと——まあきつと僕の場合はね、つくのは贅肉だけなんですけどね！』

小さな笑い声がある。

そんな中、おデブ元気は出てきた鰻重を美味しそうに頬張っていく。お決まりの言葉の後には、鰻重について色々な感想が語られる。なんか豆知識とかも。昔からうなぎは夏バテ防止に食べられてたらしい。

そんな姿をぼんやり眺めてるオレの頭の中には、黒光りするうなぎが誘うようにニョロニョロと踊っていた。

うなぎ。

うなぎ・・・。

うなぎかあ・・・。

そう言えば、今年はまだうなぎ食べてない。毎年お祖父ちゃんが持つてきてくれて、よく分らないまま食べてたけど・・・ないとないで寂しい気がする。別に好きでもないんだけど。：あれ、なんで今年ないんだろ。あれかな、結婚したから気を使つてこなかったのかな。そう言えばお祖父ちゃんと暫く話してないな。元気にしてるかな・・・最近ネットでもインしてこないんだよなあ。後でメッセしとこ。

暫くテレビを眺めながらぐったりした後。

暇過ぎたので高虎の方へと転がり込み、高虎の脛毛で新たな遊びを開拓する事にした。無造作に伸びるそれをクイクイと軽く引つ張る。サワリサワリと撫でたり、グルグルと団子にして——ザバツと引き抜く!!うわっ、結構抜けた。

「った、・・・何すんだ」

「違うんだ、暇だったんだ」

「驚く程、まったく意味のない返事だな」

呆れたようにそう言うと、高虎はオレの体を足で挟み固定してきた。その剛脚に身動きが取れない———というか力強過ぎて苦しい。じりじりきやがる、こいつ！内臓出ちやうう！やめろお、ドS野郎おお！！

「——ぐええつ、ちよつ、ぎふつ、ぎふつ！ギブアップう！！」

足を叩いて降参を示したけど、「誠意を感じない」と更に力を強めてきた。どうやら心の中でこのドS野郎と悪態をついていた事は見抜かれていたようだ。流石だ親友。褒めて使わす———とかふざけてる余裕もいよいよ無くなってきたので、心を込めてゴメンナサイすると解放してくれた。

力に屈した弱き民代表のオレは、床に転がったまま高虎へ憎しみの視線を向けながら頬を膨らました。嫁を苛めるとんでもねえ野郎に、全力で遺憾の意を示す為だ。怒っているぞ、と。

そんなオレを見て深い溜息をついた高虎は、手にしていた小説を閉じた。

「出掛けるか？」

「やだっ！！」

「じゃあ、ゲームでもするか？」

「やだあっ！！」

「流石にどうしたら良いかわからん」

別に理由なんてない。

敢えていうなら、そこにいたから絡んだだけだ。

どうかして欲しかったとか、何か欲しかったとか、そういうのは少しもない。ただただ暇で、でも何かする元気まではなくて、でも暇で・・だからテキストに近くにいた高虎へちよつかい掛けただけなのだから。敢えていうなら、構ってくれるならそれで良い。

そんな感じだ。

高虎の脛へ世界を獲れるジャブを打ち込めば、それに対抗するように足がオレを捕らえんと動く。

オレは身を翻しダンゴムシのように転がり、蜂が刺すようにジャブ!!手数ではオレの圧勝——ぐえっ!しまったあ!ふぐうわああ、や、止めてえ!

暫くじやれ合っていると、段々とお腹が減ってきた。

朝ごはん食べてないせいとか、その分余計に空腹感がある。一旦レジスタンス的活動を止めて、絶賛オレを捕獲中の高虎を見上げた。

「なあなあ、高虎」

「今度はなんだ」

「うなぎ食べよう」

「急にどうした」

ふと思いついた提案に高虎が首を傾げた。

「ほら、今年うなぎ食べてないから。それに今日土曜だし」

「確かに土曜ではあるが、丑の日ではないぞ？まあ、別に構わないが……というか、前ちゃんとう用の丑の日に聞いたろ。うなぎの事は。今年が良いのかって」

「うーん？そうだったけ？」

「ああ、聞いた」

そう言われるとそんなんあった気がする。七月の終わりに聞いたような気がする。

あつ、ちよつと思ひ出した。買い物にいった高虎がうなぎの話をしてた。確かあの時は……あーうん、断ったね。無駄遣いしないでカレーのルーだけ買ってこいつて言った気がするもん。あれかあ。

「納得したか？……でだ、今家にうなぎはないぞ。食べに行くか、買ってくるしかない。どうする？」

「食ベに行く？」

「行つてもいいが、高いぞ」

高いのか……。

なんやかんや自分で買った事ないからな。

「具体的には？」

「具体的にと言われてもな……うなぎ自体俺もあんまり食べないからな。二〜三千円ぐらいか？」

「二〜三千円……中古のゲーム買えちゃうじゃないか」

「ゲーム欲しいのか？」

「いや、今はやってるのあるからいらぬ。俺はクリアするまで積まない派なんだ」
「もう既にかなり積まれてる気がするが……そうか」

それにしても一食で二〜三千円は痛い。二人で四〜六千円と考えると尚痛い。あまりの痛さに泣いちゃう。涙がちよちよぎれる。コツコツ貯めていた黒字貯金か飛んで行くんですけど。

でもなあ……うん。

「……よし、食べに行くぞ！今日はオレの奢りだ!!」

「おお……大丈夫か？」

「大丈夫だあ!!」

覚悟を決めたオレは走った。

お年玉貯金をタンスから引つ張り出す為に。

「行くのは分かったから走るな。危な——」

「———つたあ!?ふにやあ!!あああああ!!小指があ!!足のお!!小指がああああ!!高虎あああ!!」

「———言わんこつちやない。はあ、まったく」

丈の長いワンピースに薄手のカーデイガンを合わせ、すっかりおしやんていーな女の子になつたオレは、麦わら帽子も忘れず被り高虎をお供に外へと飛び出した。

電車を乗り継いで二十分。高虎に扇子でパタパタされながら歩くこと十分と少し。ようやく目的のお店が見えてきた。如何にも和食屋といった店構えで、何処かお高そうな雰囲気か漂っている。美味しいお店感が凄い。

お祖父ちゃん前が前に教えてくれたオススメのお店で、本格派の江戸前なんちゃら何だとか?ぶつちやけうなぎの違いとか分からないけど、どうせなら美味しい所が良いからね。

「なあ、ゆたか。何も聞かずにいつてきた俺が言うのはなんだが・・・ここは止めよう」「なんだよ、(´▽｀)まできて」

暖簾を潜ろうとすると、高虎に肩を掴まれた。

何だろうかと振り返れば、店の入り口に掛けてあるお品書きを指差している。

気になって見れば鰻重のお値段が五千円から始まっていた。あれ、おかしいな。そう思つて目をクシクシしてから、また読んでみる。やっぱり五千円からスタートを切つている。最低価格が五千円なのだ。特上になると、なんか時価とか書かれてる。

「……ここはオレ達にはまだ早い。分かるな？」

「うっぐ、で、でもお……せっかく来たんだし……お、お金だつたらあるし」

お年玉貯金を舐めて貰つては困る。

毎回一杯貰つてたけど、全部は使わなかった。いつもその分ちやんと残していたのだ。これくらい余裕だ。

でもだ、一食で一万は、正直震える。

中古ゲームなら三本買える額だ。漫画なら新品一冊五百円だとして二十冊は買える額だ。丸坊主くんのソーダ味なら百五十本以上買える額だ。棒の旨いやつなら……千本買える額だ。

家計簿を付けるようになってから気づいたのだが、一万円つて思うてるより大きい。その証拠に戸口に掛けた手はピクリとも動かない。体は正直だね。うふふ。

そのまま動けないでいると、その手を高虎が上から握つてきた。

「……今日の所はスーパーにこんな」

「で、でもさあ……このまま帰るのは、なんか、モヤモヤするものがある」

「意地張ってまで食べるもんでもないと思うぞ。ほら、浮いたお金で何が出来るか考えような」

「浮いたお金で……何が……」

その言葉で予約していたアニメのDVDとそのアニメの主題歌が入った限定版のCDが脳裏を過っていく。全三巻の道のりは長い。お金一杯いる。——そしてもう一つ。そのアニメの初回生産限定版コミカライズの事もよぎった。買うか迷っていた、ねんどろいどがついてくる奴——定価3,250円（税抜き）の奴の事が。

「あるよ！欲しい物が、あるよお……！」

「思い止まったなら、そのまま手を離して、ぐるつとUターンしような」

戸口から手を離れたオレは高虎に引かれるままぐるつと回り、お店を背にして引かれるがまま来た道に戻った。

徒労感が激しいけど、一万円はやっぱり重い。

きつと止めて吉だろう。最近貧乏性になりつつあるオレの場合は。

それにしても、お祖父ちゃん毎回こんな所のようなぎ持ってきてたのか。本当金持ちだなあ……なんの仕事してんだろ。

そのまま高虎と帰りがてら、駅前のシヨツピングモール内にあるスーパーへと寄る。お目当てのうなぎはあったが——パックでも高かった。一尾二千五百円もする。中国産だと半値くらいだけど、中国産つて大丈夫なのだろうか。安全なら中国産が良い。だつて、安いし。

高虎に相談したら微妙な顔をした。

食べられないもの置くわけないと思つてはいるらしいが、中国産というワードだけでちよつとなあという感じらしい。だからと言つて二千五百円二つは辛い。一つ買つて半分こ？いやいや、流石にそれはなあ……だつて元々一人前分だから量そんなにないし。分けたら絶対シヨボク感じる。——くつ、最初は覚悟してたけど、ここまで来ると辛い。安い物が近くにあるせいで余計に辛い。これで何が買えるか考えると辛い。

そうして散々二人で相談した結果——サンマの蒲焼きを買いました。

え？うなぎは？だから言つてるだろ。

サンマの蒲焼きを買いました。

うん……ね。

「ありがとうございました、またお越しくださいますせ」

丁寧な挨拶と共に渡された買い物袋。

中を覗くまでもなくサンマの蒲焼き。

なんだか心の何処かがシユンとする。

「・・・そんなにシヨボくれるなよ。サンマ好きだぞ、俺は」

「オレもサンマは嫌いじゃない・・・冷蔵庫に入ってるくらいな。悪くなっちゃうから、明日もサンマだからな。塩焼き」

「・・・おう、分かった」

どうにも浮かない気持ちと共に出口に向かっていると、高虎に頬つぺたを掴まれムニムニされた。無視すると尚もしつこくムニムニしてきたので手を叩き落としてやる。この野郎つがあつ！

「なんだよ！この妖怪でかぼちち!!祓うぞ!!」

「翔大くんより過激だな。・・・いやな、うちの可愛い嫁が珍しく不細工な顔してるから、ちよつとほぐしてみただけだ」

「ああん?ほぐれましたですか?」

「くくつ、まあな」

自分でもちよつと頬つぺたを触ってみただけと分からない。高虎の言葉が本当なら、ほぐれた後だから分からないのも仕方ないけど。具体的にはどこら辺が不細工だったのか。気になる。———というか、我ながらではあるけど頬つぺた手触り良いな。

「なあ、ゆたか」

自分のもち肌を堪能していると高虎に呼ばれた。

見上げれば優しい顔がこつちを見てた。

「夕飯にリクエストが一つあるんだが、しても良いか？」

「なんだよ・・・」

「おかずにだし巻き玉子追加してくれ」

サンマの蒲焼きはレンチンすれば直ぐ出来ちゃうし、時間的な余裕はある。それに、奢るっていつてたうなぎないしなあ。

それくらいならと頷けば高虎が嬉しそうに笑った。

奢るって言った時より、ずっと嬉しそうに。

「・・・ふふ、安いやつめ」

「何か言ったか？」

「なんでもなーい」

買い物袋を揺らしながらショッピングモールを出ると、午前中の晴れ晴れとした天気
が嘘のようにどんよりしてる。重々しい灰色の雲。何処か雨の臭いまでする。

「一雨くるかもな」

高虎のその言葉を聞いて、ふと天気予報を思い出した。

夕立がどうたらと言っていた事を。そして洗濯物を干しっぱなしで出掛けた事も。

「高虎!!洗濯物!!」

「ああー、そう言えば干したまんまだったか・・・」

「何呑気な事いってんだ!ほら、急ぐぞ!!」

それから慌てて帰った。

雨の雰囲気を感じながら。

二人で、手を繋いで。

おもうてたより、自分の気持ちが分からないんですけど 『前編』

9月も半ばを過ぎた今日この頃。

じきに再開する大学に備え、冬眠明けの熊みたいのにのんびり用意を始めた高虎の後ろ姿横目に、いつもの如く洗濯物を干しているとインターホンが鳴り響いた。

基本的に家に尋ねてくる人はいない。来るとしたらマザーか兄貴ぐらいなもので、今日はそういう連絡も来てない。稀にジヨディーさんも遊びに来るけど、それだつて家に着く前に連絡をくれる。

不思議に思つて首を捻っていると、またインターホンが鳴った。

「高虎——」

「あ——」

変な人だつたら嫌なので高虎を呼べば、これまた熊みたいにのそのそやってきてドアホンを覗いた。

ドアホンの向こうから響く声と少し話した後、高虎は一度変な声をあげる。それから画面の向こうに映る物をマジマジと見て——唸り声をあげながら頷いた。

「……ちよつと行つてくる」

「ん?いつてらく。お昼はどうする?いる?」

「いや、そんなに遅くならない。直ぐ戻つてくる……というか、俺よりお前がいった方が良いんだが」

「んん?オレ?」

一旦洗濯物を置いてマンションの入り口へ向かうと、そこにはお祖父ちゃん家のお手伝いさんの一人である、主にドライバーな矢並さんがいた。

基本的に矢並さんはお祖父ちゃんとの近くでせかせか働いてる人で、一人で何処をブラブラしてるのを見たことない。そう、一人の矢並さんはかなり珍しい。『レアやなみん』だ。

なので物珍しさから見てたんだけど——矢並さんの隣にあつた大きな影に気づいて、そんな考えは吹き飛んだ。

「——たろちゃん!!」

そこにいたのは格好良さと可愛さを奇跡のバランスで両立させた、グレーの毛並みをフワモサさせる大型ワンコ。お祖父ちゃん家の飼い犬である、アラスカン・マラミュート（血統書付き）。たろちゃんこと太郎太刀であつた。

「パウツ!!」

オレの声にたろちゃんは矢並さんを振り切り、自動ドアを駆け抜け、高虎を押し退け、飛び掛かって——はこなかった。ぶつかると手前で急ブレーキをかけて止まり、勢いを殺してからのっそりと立ち上がり寄り掛かってくる。めっちゃ尻尾フリフリしてる。めっちゃ顔をスリスリしてくる。んで、めっちゃ顔ペロペロしてくる。

「クウウウウン！」

「ああもう、たろちゃん！ よーしよし！ 可愛いねえー！ 相変わらずモサモサだねえー！ よしよしよし——つうえつぶ！ たろちゃんストップ！ ストオオオプ！！ 分かったからっ、わつぶ!? ちよっ、やめへっ！ 重い重い!! ぐああああ!! 高虎ああああ!!」

「はっはっはっ、ゆたか様は相変わらず太郎太刀と仲良しですねえ」

「……いや、まあ、太郎太刀来るといつもあんな感じですけど、矢並さんは立場的に止めにいった方が良くないですか？」

「そこはゆたか様の旦那様にお任せします。カツコいい所見せつけちゃって下さい。頑張れ、高虎くん」

「矢並さんも相変わらずみたいです」

たろちゃんが落ち着いた所で改めて話を聞くと、どうやらお祖父ちゃんが一週間程仕事で家をあけるらしく、その間だけたろちゃんを預かって欲しいんだとか。

預かってあげたいのは山々なんだけど、今住んでるのはマンション。直ぐには領けない。ペット自体はOKなマンションだけど、一時的にとはいえ飼うには管理人さんの所へ色々書類出さなきゃならないし、たろちゃん用の餌とか道具とか飼える環境が揃ってない。

高虎に視線を送ってみると、案の定首を横に振られてしまう。なのでそこら辺の事情を話したんだけど、矢並さんは何故だか良い顔で笑った。

「——ああ、でしたら問題ありませんよ。こちらで対処済みです。餌などの消耗品は勿論、その他飼育に必要な道具は車に詰めてきてますので持ち込むだけ。ペットに関する規約についても、元康様がちゃんとマンションの責任者へ話をつけていらっしやるので大丈夫です」

「そうなの?」

「はい」

それならと思ったけど、高虎はやっぱり良い顔はしてない。微妙な顔してる。

迂闊に領けない。

でも足元を見れば、目をキラキラさせたたろちゃんが見ていた。めっちゃ尻尾フリフリしてる。めっちゃハアハアいつてる。この目を裏切りたくない。

くのう。

「くらくらー!」

「ゆたか様、どうか元康様のお願いを聞いては頂けませんか?このままだと太郎太刀はたつた一匹で、あの広いお屋敷にお留守番ということになってしまいます」

「お留守番つ、それは、ちよつと可哀想だけど、でもなあ……あ、別に、ほら、お屋敷にはさ、他のお手伝いさんだっているでしょ?だから寂しくは——」

ずいっと、矢並さんが笑顔を近づけてきた。

「ええ、普段ならそうなのです。ですがタイミングの悪い事にその日から社員旅行で、使用人全員出払う予定でして」

「えええええ……じゃあ、ペットホテルとかは——」

ずいっと、矢並さんが笑顔をもつと近づけてきた。

「行きつけのペットホテルがあつたのですが、諸事情で利用出来ないのです。太郎太刀は人見知りする子なので初めての場所に七日預けるのは元康様が良しとせず。それならばと、太郎太刀も良くなつているゆたか様に預けてはどうかと」

「ええええ……お祖父ちゃんが連れてくとかは?ほら、うちに来る時とかしてたし——」

「そうしたいのは山々なのですが、かなり厳しいスケジュールで動きますので、太郎太刀を連れて歩く余裕がないのですよ」

矢鱈と近い笑顔にどうやって断ろうかと考えていると、手がペロペロされ始めた。視線を落とすとたろちゃんの顔が遊んで欲しそうに首を傾げてる。

可愛い過ぎる。わんだこりやあ。

「た、高虎あー」

チラつと高虎を見上げると、重い溜息が吐かれた。

「・・・はあ、分かった。一週間だけだからな」

「高虎ああ！やったな、たろちゃん！一週間うちにお泊まりだぞー！うりりりー！」

たろちゃんのモサモサ顔をワシヤワシヤしてやると、たろちゃんは嬉しそうに尻尾を振り回しながらその場をクルクルと回りまくる。

可愛いかったので捕まえて首回りワシヤワシヤしてやれば「ワッフウー!!」と楽しげな声を漏らした。

ういうい、ういやつじやあー。

それから矢並さんに協力して貰い、高虎と矢並さんの二人で荷物の搬入開始。オレは洗濯物とたろちゃんの相手をするという仕事があるので二人にお任せ。男手二人。その時間も掛からぬ内、たろちゃん飼育セットを部屋に設置完了した。

因みにたろちゃんの仮住まいスペースはリビングの端っこへと決まった。最初はオレの部屋にしようとしたけど・・・借り置きしたら思ったより狭苦しかったので止めた。

ゲーム機とかもあるしね、危ないしね。うん。後で掃除がなあ……とかも思つてない。全然思つてない。

たろちゃんのお引越しが終わる頃、時刻はお腹も鳴り出すお昼タイム。ツナマヨ丼でテキトーに済ませようとしていたのだが、矢並さんが全員分のお弁当を買つてきてくれてみたいなのでそれを頂く事に。

「おう、うなぎだ！」

「あー……うなぎだな」

お弁当の蓋を開けるとこの間食べられなかつたうなぎの蒲焼きがそこにあつた。ご飯の上に重ねられた鱈甲色に艶めくそれから甘くて芳ばしい香りが漂う。

美味しそうだなあ、とは思ふ。でも、この間のうなぎ事件を思い出すと手が進まない。

「……ゆたか様、安心して下さい。こちらそう高い物でもありませんので」

「ひよっ!?!そ、そうなの? 五千円しないの?」

「五千円がどのと言いますか……実はこれ、元康様が趣味で作つた物です。材料も余り物を使用してるらしく、実質タダといつても良い代物ですよ」

「お祖父ちゃんが?」

お祖父ちゃんが……へええ。

改めて見てみたけど、前にお祖父ちゃんが買つてきてくれた奴と何が違うのか分から

ない。普通に美味しそう。

というか、これ、オレより料理上手なんじゃないだろうか・・・へこむ。

「あの人が作ったなら変な付加価値ついて、余計に高くなる気がするんだが・・・」

「——ん？高くなる？高虎？」

「・・・いや、何でもない。忘れてくれ。それより食べるか」

「？おう、いただきまーす」

お昼ご飯を食べ終わると、矢並さんは高虎にシッター代として封筒を渡しさつさと帰ってしまった。これから仕事があるらしい。一緒にゲームして貰ったり、色々お祖父ちゃんの様子とか聞きたかったので少し残念。

矢並さん格ゲーとFPS系のゲーム超強いんだ。神業見せて欲しかった。

矢並さんが帰って暫く。

再会の感動がすっかり薄れたオレとたろちゃんは、何をやるでもなしにリビングでゴロゴロしていた。グデーっと絨毯みたいに床に転がるたろちゃんの上へ、同じようにグデーっと折り重なっていると、大学の用意を済ませたつばい小説装備の高虎に呆れた顔をされた。

「・・・なんだよお」

「・・・ワフツ」

「なんだその一体感は。本当に半年ぶりか、お前ら」

そう言われて考えて見れば、前にあったのはお正月の時——いや。結婚した後、このマンションに入る前、高虎と一緒に挨拶しにいったっけか。確か三月の終わり頃で……となるとやっぱり大体半年ぶりか。

たろちゃんとの日々を思い返してる内、高虎が側にあるソファアールへと腰を降ろした。目の前に現れた足にたろちゃんの前足が伸びる。なんかポフポフしてる。ポフポフしてる。可愛い。

「ちよつかいの掛け方まで一緒か……」

「……一緒？」

「自覚ないのか、お前。……まあ、別に良いけどな」

たろちゃんの足をワシつと掴まえた高虎は小説をテーブルに置いて、徐に肉球を触り出す。たろちゃんされるがまま。抵抗する気力なし。尻尾振ってるから楽しんではいらんだらうけども。

なんか見るとオレも触りたくなつたので、余ってる前足の肉球を触らせて貰う。やわい。

「……散歩とか、行かなくて良いのか？」

「……たろちゃんインドア派だからな」

「……まさか、あのルームランナー」

「……たろちゃんのだぞ」

そうルームランナーがデカかった。

それと加えてたろちゃんの寝床のゲージまでいれると、部屋のスペースがちびつとしか残らないのだ。

まあ、積んでるゲームとか漫画をきちんと整理したら、全然余裕そうではあるんだけども。

「……犬なのにルームランナー使うのか」

「……犬だってルームランナー使う時代なんだよ。きつと」

「……そうなのか……深いな」

「……なあー深いなあー」

ぼやーつと肉球揉み揉みしていると、流星に揉み過ぎたのかクワつと睨まれた。おこだった。黙れ小僧つて顔だった。

たろちゃんがルームランナーを始めた所で夕飯作り開始。高虎が物珍しそうにルームランナー犬を眺めてるのを横目に冷蔵庫をチェック。パツと目についたのはマザーから匂物だからと譲り受けた大量のピーマン達。それと期限ギリギリのなめこ。ふむふむ。

「高虎くん！君には二つの選択肢があります!!」

「ん？ああ、なんだ」

「一つはピーマンの肉詰めとなめこのお味噌汁、それとサラダという献立!」

高虎は献立の姿を考えてるのか天井を少し眺めた後、「もう一つは？」と聞いてくる。

「もう一つは、チンジャオオロスとなめこの中華スープ、それとサラダという献立です!!」

「さあ、どっち!!」

高虎はまたさつきと同じように考えてから・・・ぼーつとした眼差しをこっちに向けてきた。

「・・・どっちも大差ない気がするんだが」

「うるせえー知つてらあい！決めろこの野郎おー!」

「ワオオオオー!」

「だから、なんだその一体感」

結局、簡単だからという理由でチンジャオオロスにした。肉詰めは肉捏ねないといかないからメンドイ。しかーし、チンジャオオロスは簡単も簡単。楽チン●んなのだ。――

――何せこっちにはチンジャオオロスの素という物がある。切って炒めて混ぜるだけ、それだけで本場も顔負けな中華料理が作れるという凄い代物なのだ。

まさに最強の調味料、ゴツデス・ティアドロップ!!

ありがとう、クック●ウ!!

そろそろ様になったネコの手でちやつちやと野菜を処理し——ぬ、ぬう……ぬうう?

「高虎——!」

「おう、なんだ」

「ピーマンってどうやって切り始めるんだっけ?」

「待ってろ。ちよつと待ってろ。まだやるな。手伝う」

高虎の介入を受けつつ料理する事一時間程。

何とか初めての中華料理を作り終えた。

やり始めはどうなる事かと思つてたけど、やつぱり人間やれば出来るもんだ。調味料があつたお陰とはいえ、これは……ふむ。オレは天才かも知れないな。

どやつ、と高虎を見てやれば頭を撫でられた。

ええい、止めるが良い!なんだその、可愛い物を見る目は!もつとこう、崇める方向でこい!この野郎う!

料理をテーブルへ運ぶとたるちゃんがトコトコやつてきた。お腹が減つたのかテーブルに向けて鼻をヒクヒクさせると、こちらの足へ体を擦り寄せくくん鳴き始める。

たるちゃんの餌もちやつと準備し、初めての二人と一匹でのお夕飯。チンジャオ

ロースを食べながら自分の料理の腕に惚れ惚れしていると、ふとそれが目についた。ガツガツご飯を掻き込む高虎と、それと同じようにガツガツお皿の餌に食い付くたちやんの姿だ。ご飯に夢中の一人と一匹の姿はいやにかぶって見える。やっぱり似てる。

いつ頃からだったのかは分からないけど、気がつけばたろちゃんを見る度ずつと思つてた。高虎はやっぱりたるちゃんに似てる。最初小さくて急に大きくなった所とか。オレに妙になつてて着いて回る所とか。ご飯にがつつく姿とか。

こうして見ると可愛い——ん？

高虎可愛いか？いやあ？可愛いくはないなあ……。

デカイし、なんかゴツいし、むさいし。

でも嫌いではない……な。寧ろ好きではあるというか……んん？好き？好きではあるか？あるな。こういうと照れ臭いけど、親友だと思つてるし……んん？んんんん？

「んんんん——？」

「？どうした、唸り声あげて」

「いやあ？……んんん？」

何処かモヤモヤする物を感じながら、取り敢えずご飯を食べ進めた。ぼけつとしてる

と、高虎におかず食べられてしまうから・・・ええい、このお肉はオレのお肉だ!! 掴むなあ!! なんの為に一つだけデカイの入れたと思ってるんだ! キシヤアアア!!

「・・・クウーン、クウーン」

「お皿カリカリしても、可愛い顔しても駄目っ! もう今夜はおしまい、おかわりはないからな。たろちゃん、ハウス!・・・高虎、今なんか隠さなかつたか?」

「き、気のせいだろ」

おもうてたより、自分の気持ちが分からないんですけど

『後編』

「……うえ」

べちゃあつと、生温かい何か顔が撫でていった。

気持ちいいとは言えない感触に重い瞼を開ければ、こちらを見つめる大きな影が目の前に見える。

その影はハアハアと荒い息遣いをあげながら上下に小さく揺れ、ベッドはそれに応えるよう軋む。

オレは目の前のそれをぼんやりと眺めた後、布団から手を引つ張り出してモツサモサなその顔を撫で回してやった。

「……たろちゃん、おはよ」
「はっ」

れるおつ、とまた顔が撫でられた。

たろちゃんと一緒な生活。

今日はその六日目の朝である。

たろちゃんとはベッドの上で少しイチャイチャした後、モハモハな体を押し退けて起き上がると、寝る前に閉じた筈のドアが開いているのが視界に入った。

もう今更ではあるけど、たろちゃんの顔をむぎゆうつとしながら目を合わせる。

「たろちゃん、部屋入ってきたら駄目だぞ。危ない物一杯なんだからな？」

そう言うのと怒られてるのが分かったのか見るからにしょぼんとした顔になり、それまでふりつふりだつた尻尾もシユンと項垂れさせる。

そのシヨボくれた顔に思わずよしよししたくなつたけど、そこはぐつと堪える。ここでよしよししたら意味がない。心を鬼にするのだ。

事ここに至つては、たろ毛が部屋に散らかるのはもう仕方ないと思つている。二日目に侵入を許した時点で後の祭り。

しかし、しかしだ、たろちゃんの安全の為には、やはりこの部屋はちよつとなあ……なのである。

多少は片付けたとはいえ、依然としてたろちゃんが口にしたら危なそうな小物が一杯なのだから。主に高校生になるまでに作つたり集めたりしたファイギアとか、プラモとか、ねんどろいどとか、ガレキとか。

「くうん」

集めたグッズ達に思いを馳せていると、不意に泣きそう声が聞こえてきた。はっとしてたろちゃんを見れば、それが目に入った。うるりとした、たろちゃんのぱっちりおめめが。

「——よっ……よしよしよしよし！リビングで一人は寂しかったったんだねえ！仕方ないねえ！おーしおしおし！」

「わふううー」

「その茶番、明日もやる気か？」

その声に顔をあげると、ドアの所で高虎が呆れた顔してる。まあ、かれこれ四回もやってる訳で、その表情も分からなくはないけど。

「明日は……大丈夫！たろちゃんは賢い子だから！きつと我慢出来る！な、たろちゃん！」

「……わふう」

「太郎太刀が賢いのは認めるが……絶対に出来ないぞ、その反応は。———というかわかつた上で、そいつはやらないぞ」

失礼なっ！たろちゃんはそんなに馬鹿じゃない！

なっ、たろちゃん！出来るよな？よし、出来るってさ！！謝れえ！たろちゃんに謝れえええ！！

疑いの眼差しを向ける高虎からたろちゃんを守りつつ、オレは夏休み前と同じようにお弁当と朝御飯の支度を始める。冷蔵庫の中から昨日冷凍食品を詰めておいたお弁当箱と、朝御飯用の卵とベーコンを取り出す。

昨日の残りのお味噌汁とフライパンを温めてる間、お弁当箱に炊いたご飯とマザーから貰った煮物も詰めて、ご飯の真ん中に梅干し置いてさっさとお弁当を完成させる。そうしたら箸と一緒に巾着袋にしまつて——はい、終わりー。

「ゆたか、手伝うか？」

たろちゃんに餌あげが終わったのか、高虎が餌の箱片手にやつてきた。餌あげが終わったなら大人しく待つてれば良いのに……とも思ったけど、手伝ってくれる気があるなら拒否する理由もないのでお椀を二つ渡した。

「もう温まったみたいだから、お味噌汁よそつといて。あとは……コップとか持つてくれると助かるかな？」

「ああ、分かった」

高虎がお味噌汁をよそう姿を横目に、温まってきたフライパンに油をひく。入れすぎるとあつつい事になるので程々に。全体にまんべんなく引いたらベーコンを投入。焦げ目がつくくらいじっくり焼いてく。

ベーコンが焼けた頃を見計らつて卵を片手に持つ——。

「高虎ー、きてきてー」

「ん？なんだ」

——呼べば、さっさとお味噌汁をテーブルに持っていった高虎がコップを手に戻ってきた。

オレは高虎が見てるのを確認してから、片手に持った卵をそのままキッチンテーブルの軽く叩きつける。

「見よっ！秘技、片手割りっ!!」

ヒビの場所を意識しつつ殻を開くイメージで卵を挿んだ指を引けば、綺麗に割れたそこから艶々ツルツルの黄身がフライパンへと落ちた。

ドヤアつと高虎を見てやれば、「ほう」と関心したような表情を浮かんだ。

「感慨深い物があるな。最初は卵の殻が当たり前のように入ってたのに……そもそもスクランブルエッグしか出てこなかったのに……」

「しゃあらつぶ!!この野郎!!過去の事をネチネチとお！そこはオレの研鑽と努力を称えろお！さあ、ほーめろ！ほーめろ！ほーめろ！ほーめろ！ほーめろ！ほーめろ!!」

「そこまでいくと、いつそ清々しいな」

そういうと高虎は頭を撫でてきた。

わっしわっしと、まるで子供や犬でも褒めるように。

睨んでやったが笑顔が返ってきた。

この野郎う。

「お前の目玉焼きは、半熟にしてやらない・・・!」

「・・・ちよつと抱き締めても良いか?」

「何で!?!」

抱擁の提案を却下しつつ調理を続ける事少し、無事ベーコンエッグは完成した。結局、黄身は半熟にした。別に優しさからではない。一人分だけ違うのにするの面倒臭かったからだ。

時間に余裕もないので簡単に盛り付け、さつさとテーブルに運んだら直ぐに頂きます。高虎が電源を入れてくれたテレビを眺めつつ、ご飯とおかずを口に運ぶ作業に徹する。ふと違和感を感じ視線を落とすと、たろちゃんが高虎の足元で物欲しそうに見上げていた。

「・・・」

何となしに様子を見てると、高虎が足元のたろちゃんに気づく。暫く目を合わせた後、高虎はご飯とたろちゃんを交互に見て、そしてベーコンを箸で裂き――。

「高虎、あげるなよ」

「つ!?!お、おう・・・」

可愛いのは分かる。あげたくなる気持ちも分かるけど。でもベークンは駄目だ。塩分が高いから駄目だ。

高虎が箸で掴んだベークンをそのまま自分の口の中へと運ぶと、たろちゃんは尻尾をしょんぼりさせ床にふて寝する。悲しげな一人と一匹の視線が刺さってくるけど、これは譲るつもりはない。

「お前の厳しさの基準が分からん」

「駄目な物は、駄目だ」

「・・・分かった。太郎太刀の世話に関してはお前の方がよく知ってるだろうしな。悪かった」

納得した様子の高虎を眺めながら、オレは以前たろちゃんにタマネギ入りのハンバーグあげて大変な目にあわせてしまった事を思い出し・・・その事は墓場まで持つていくことを改めて固く決意した。

いつものように大学へ行く高虎を見送って暫く。

家事を済ませてリビングへ行くと、たろちゃんが日向で絨毯みたいになってた。相変わらずのグータラ犬具合に苦笑いが溢れてしまう。

「たろちゃん、ルームランナーするか？」

そう聞いて見たけど、たろちゃんも尻尾を一振りするだけでピクリともしない。周りの話を聞くとワンコは散歩に行きたがったりする方が多いらしいのに……たろちゃんも本当に運動嫌いだなあ。誰に似たのやら。

まあ、一緒に住んでるお祖父ちゃん意外考えられないけど。

無理にやらせても可哀想なので放っておく。お祖父ちゃんから頼まれた運動ノルマはあるけど、どうせ高虎が帰ってきたらやらせるだろうし。

特にやることも無かったオレは、たろちゃんに便乗して日向に寝転んでみた。残暑も抜けた今日の日差しは随分と心地良い。

この調子なら冷房なしでも……と思っただけど、モサモサのたろちゃんにはまだまだ暑いかも知れないので、冷房も消さないでおく。

ポカポカの日差しにウトウトする事少し。

顔の所にファサーっとたるちゃんの尻尾が乗っかってきた。尻尾が顔の所でフリフリされてくすぐつたい。

尻尾をどかして視界を確保すれば、視界一杯にたろちゃんボディが見えた。横を向けば眠たそうな目をした犬フェイス。どうやらオレの頭を囲むように丸まってるらしい。

なんか暑苦しいと思えば……。

寝っ転がったままズリズリ移動して、たろちゃんの横腹に頭を乗っけてみた。たろ

ちゃんは少しだけ瞼を開けてこちらを見るが、特に思う事も無かったのか尻尾を軽く振って目を閉じた。そのまま天井を眺めながらぼんやりしていると、穏やかな寝息が聞こえてきた。

なので呼吸と共に上下する横腹の上で、聞こえる寝息に、伝わってくる温もりに、鼻腔を擽る犬らしからぬシャンプーの匂いに、オレも目を閉じた。

うつらうつらする意識の中、頭に浮かんだのはやっぱり違うなあという気持ち。

たろちゃんは高虎と似てた。

ちっちゃい頃の高虎と。

本当によく。

尻尾を振り回してついてくるたろちゃんの姿が、チヨコチヨコついてくる高虎と被って見えた。

オヤツを前に目が輝かせるたろちゃんの姿が、オレの話を聞いて目キラキラさせる高虎と被って見えた。

オレの姿を見て元気に吠えてくれるたろちゃんの姿が、「ゆーちゃん」と笑顔を浮かべ呼んでくる高虎と被って見えた。

他にも数えきれないくらい沢山似ていた。

だから、たろちゃんの事は直ぐ好きになれた。

高虎と同じなら大丈夫だと思えたから。

でも、違うみたいなのだ。

似ていたのに、もう違うみたいなのだ。

どっちも好きなのは変わらないのに。

「……たろちゃん、何が違うんだろーねえ」

たろちゃんから返事は無かった。

聞こえるのは静かな寝息だけ。

オレは考える事を止めて意識を手放した。

「ワフツ」

「つと、そんな怖い顔するな。何もしない」

聞き慣れた声と揺れる感覚に瞼を開けると、高虎の顔がそこにあつた。ぼんやりした頭で少し考え……今日は早めに帰れる日だという事を思い出し納得する。

声を掛けようとした時、不意に体が浮遊感に包まれた。

突然の事に吐き出しかけた声が喉の奥へと戻ってく。

腕や背中の感触と高虎の顔の位置、揺れる感覚に直ぐ抱っこされてる事に気づいて――

――何故だか顔が熱くなった。

ぼんやり顔を見上げていたけど、その顔がこちらに向く気がしてオレは咄嗟に目を瞑った。

視線を感じながら運ばれて少し、軋むような音と共に体が柔らかい感触に沈んだ。薄く瞼を開けると、自分の部屋のベッドである事が分かった。

「変わらないな、お前は……」

そんな言葉と共に高虎は苦笑いを浮かべ、その手を伸ばしてきた。高虎の指が前髪に触れ、撫でるように優しくサイドへと流していく。指はそのまま頬を撫でるように伝い

――そつと唇に触れた。

「……ゆたか」

顔が近づいてくる。

静かに、ゆつくりと。

息が掛かる直ぐ側まで。

キスまで許した覚えはない。約束と違う。勝手にするとは何事か。この野郎う。変

態が——そんな風に色んな文句が頭を過っていく。

けれど、何一つ声にならなかつた。

ちゅつ、と。

おでこにいつもの感触が走つた。

うつすらと開けた瞼の先には、顔を赤くした高虎の顔が見える。高虎は赤らめた顔に何処かぼつの悪そうな表情を浮かべると、オレにタオルケットを掛けてから頭をガシガシかきつつ部屋を出ていった。

高虎が部屋からいなくなつて暫く。

ようやく気持ちが落ち着くと、何ともいえない物が胸の奥からやってきて思わず身悶えた。寝付きの悪い子供みたいにベッドをゴロゴロしてしまう。

「————ぬううう」

やっぱり違う。

全然違う。

触れた場所が凄く熱い。

胸の所がきゆうとして苦しい。

気持ち言葉にならない。

オレはその気持ちの名前が分からなくて、モヤモヤする気持ちを残したままベッドの上でゴロゴロした。

胸の奥からやつてくるそれが落ち着くまで。

おもうてたより、複雑みたいなんですけど

頃。
たろちゃんお泊まり計画も終わりを迎え早一週間、何処か寂しさを感じる今日この

すつかり暦通りの澄んだ秋空を眺めながら、オレは口から溢れるそれを押さえきれずにいた。

「はぁ—————」

オレの口から溢れた溜息は、乾いた風に乗って空に消えていく。たろちゃんロス。そう思ったかったけど、それとは違う事をオレは自覚している。

朝の高虎とのやり取りを思い出せば、それは誤魔化しようもない。原因は別にある。

「はぁ—————」

それは再び溢れていく。

風に吹かれて洗濯物が揺れ、声がまた誰にも聞かれず、ただ空に溶けて――。

「……ゆたかちゃん、どうしたの溜息なんてついて？」

「――ひょう!?!」

急に掛かった声に視線を向ければ、ペランダの仕切りからちよこつとお隣の山瀬さんが覗いていた。その眼差しは何処か心配そうに見える。

「あつ、あのつ、そのつ、えつと、いつから……」

「10分前くらいかなあ？うちの子が寝たから洗濯物干そうと思つて……そしたら隣から……ね？何かあったの？嫌じゃなかったら話してみない？」

「……い、いやあ、でも、その、色々難しい事情があると言いますか……なんか、その、オレは、あの……うう」

ちよつと事情が立て込んで説明が難しい。

自分でいうのはなんだけど、説明するには知力が足りないのだ。きつと某ゲームの知恵の泉レベルはないと。

「話してみると楽になるつて言うじやない？一人で悩むのを悪いとは言わないけれど、煮詰まると良い考えは浮かばないと思うの。大丈夫、誰にもゆたかちゃんから聞いた事は言わないから。ね？」

ニツコリと微笑む山瀬さんにオレはそれ以上断る為の言葉が出てこなくて、どうしよ

うかと思つてると赤ちやんの鳴き声が響いてきた。

「あらあら、ごめんなきいね。ゆたかちゃん。私ちよつと……」

「いえいえ！お気に為さらず!!」

山瀬さんは一言オレに断りを入れると、そのまま部屋の中へ戻っていった。危うく頷いちやう所だつたんだぜえ……。

早々に洗濯物を済ませ部屋に帰る。いつもならここからお昼頃までゴロゴロタイムなのだが……どうにもそんな気にならず掃除を始めた。

そしてそんな作業の中、頭に浮かぶのは今朝の事だ。

オレはいつものように起きて、お弁当作つて、朝御飯作つて、高虎と今日の運勢占い見ながらご飯食べて……それで、これまたいつもの様にお見送りした訳なんだけど。

『……？ゆ、ゆたか？』

ちゅーしやうと迫つてきた高虎をかわしてしまったのだ。

もうすっかり慣れてきていたし、今では拭いたりする程でもなかったレベルの行為。少なくともかわした事は今までなかったのだ。——だと言うのにここ一週間、オレは高虎からのそれを全力でかわしてしまっていた。

『……やっぱり、何かしたか。俺』

シユンとする高虎の姿が目には焼き付いて仕方ない。

何処からか沸き上がる羞恥心で胸がバクバクしたが、それ以上に罪悪感で胸が締め付けられるみたいに痛かった。

結局フォローも出来ずに追い出すように見送ってしまったのだ。それも昨日に引き続いてだ。

このまま放っておく事も考えた。

時間が経てば、勝手に前みたいに戻るんじゃないかと思つてた。——けれど、とぼとぼ大学に向かつていく後ろ姿を思うと、出来るだけ早くになんとかしてやりたいのも本当で……それで、色々考えて、あれこれ考えて……どうにもならなくて、さつき溜息をついていたのだ。

ズルズルズルと、まさか今日まで何も進展しないと。

もう明日は母校の文化祭なのに……久しぶりに弓子達とペアつと楽しくやろうと思つてたのに……ううん。

「……はぁー……」

知らず知らずの内にまた溜息が溢れていった。

マザー曰く溜息には幸せが詰まつてて、吐く度に幸せが逃げていくんだと教えられたが……この調子だとオレの幸せはもう最低値なのではないだろうか。いや、逆に考え

るんだ。吐き散らした幸せが部屋に満載なら、それはそれで幸せになれるのではないか・・・なれないな。うん。

ふと、シユゴーっつと音を立てる掃除機に目がいった。

家の掃除機はさいくろーんな奴で、ゴミが外から見える式のだが、なんかグルグルさ
れるてるゴミにオレの幸せが混じってるような気がしてきた。

いや、気のせいだろうけど。

「.....」

ちよつと掃除機を止めて中身を見てみた。

案の定オレの落とし物はなかった。

ですよね。

そんな事をやりながら家事をこなして暫く。

充電しっぱなしだったスマホが元気よくアニソンを流し始めた。着信音から弓子なのは分かったんだけど・・・今はまだお昼。文化祭前とはいえ、学校から掛けてくるのは疑問が浮かぶ。それに弓子は基本的にメール派だし。

不思議に思いながらコールボタンを押すと元気な声が響いてきた。

『あつ、もしもし！先輩っ！良かった！出てくれて！』

弓子の近くに誰がいるのか、なんかガヤガヤしてる。

聞き取れない程ではないけれど。

「どした？明日の文化祭の話？」

『はい！楽しみにしてます！自由時間はこの間連絡した通りなので、それまではうちの喫茶で——じゃなくて！！あのつ、先輩にお願いしたい事があるんですけど・・・』

弓子からお願い事なんて珍しい。

「なんやかんやしつかりした子で、学生時代も頼まれ事なんて数える程もなかった。お弁当とか食べてると「あーんして下さい！」とか分けわからないお願いは良くされたけど。」

「んー？どした？あーんはしないぞ」

『あーんしてくれないんですか!? ええええええ!! せっかくの、高校最後の文化祭なのがいい!! そんなあああ! せえんばああいー! 殺生ですよお——じゃなくて!! はいはい、分かったから! 分かったかつ、ちよっ!! こ、こらっ、ぬはっ——
——スママセン!! 子宝先輩ですか!? もしもし!?』

いつものアホな弓子の声が途切れ、聞き慣れない何処か切羽詰まった声が響いてきた。

「も、もしもし? 子宝ゆたかです・・・けど」

『急にお電話して申し訳ありません!! 3年A組、出席番号11番!! バレー部所属!! 文化

祭実行委員会、委員長!!好きな物は三十代の三船敏●と辛い物全般!!嫌いな物はチャラチャラした顔だけ軟派野郎とトマト!!服部弓子のクラスメイトで友人のつ、日下部七海です!!初めましてえ!!』

「お、おお、初めまして・・・」

『無礼と無理を承知でっ!!子宝先輩に、お願いしたい事がござりまして候う!!』

候うう?!えっ、武士なの!?

『お願いします!!子宝先輩!!ディフェンディングチャンピオンとして、特別枠でコンテストに参加して下さい』

「普通に嫌なんですけど」

『そこを何とかああああ!!』

「——という訳で、オレまた文化祭のあれに出る事になった・・・」

「・・・そうか。何を餌にされたか知らんが、よく出る気になったな」

夕飯を食べながら昼間の話をする、高虎が分かりやすく呆れた顔をした。完全にアホを見る目だ。むきやつく。

「仕方ないだろ……この間応募したやつあったろ？」

「応募……ああ、ハガキ書くの手伝ったやつか。アニメのやつだったか？ 当たらなかった」

「そのキャラエンブレム入った、限定パーカーくれるって言うからさ……これはやるしかねえって」

「そうか……しかし、またあれに出るのか」

うちの母校の文化祭には毎年行われる変わったコンテストがあった。ミスコンと対の人気を誇る”ミニコン”である。簡単に説明すると、アンダー16を対象としたお客様参加型のミスコンだ。元々翌年の新入生へ向けた宣伝を兼ねたイベントで、基本的には在校生は参加しないし、仮に参加したとしても入賞なんてのはなかったりする接待イベントなのだが……オレは何故か四年連続で参加させられた上、四年連続で優勝してしまった忌々しい過去があったりする。解せぬ。

一番最初はオレたちがまだ中三の頃。

その高校の在校生だった高虎のお姉さんに誘われ文化祭に顔を出した時で、気がついてたら舞台にあげられて、気がついてたら『あんたが一番』という謎のタスキを掛けられ、気

がついたら手芸部製作のディスプレイアをトロフィー代わりにして渡されていた。

来年は人気者ね！と親指をたてた高虎の姉をビンタした事は、今でも間違つてないと思う。

翌年、その高校に入学しイベントの内容を把握したオレは『主旨と違うし、今年は参加させられまい』とたかを括っていたのだが・・・去年のオレの勇姿を知らない文化祭実行委員会の奴に捕まり、不本意ながら二度目の参加を果たしてしまった。案の定審査員の何人かは気づいていたが、もう主旨とか関係なしで面白半分に点を入れてきて——二度目の優勝を果たす事になった。

因みに、その時惜しくも準優勝となったのが弓子だったりする。

ん？他の年は惰性で参加させられた。

でも思えば、あれが無かったら弓子とは知り合つてなかったのかあ。あの時はめちゃ見られて怖かったけど、今では親友ついても良いくらいの友達だもんなあ。

世の中つて不思議だ。

「・・・ゆたか、大丈夫か？」

昔の事を思い出していたら、高虎に声を掛けられた。

なんか心配そうな顔してる。

「無理そうなら、俺から断っておくぞ」

「大丈夫だって、いつても去年も出てるんだぞ？」

「三年も出ておいて、去年のあの様だから言ってるんだけどな……はあ、無理はするなよ」

そう言う和高虎はお味噌汁を啜った。

何とはなしにその姿を見てると、高虎と目が合う。

その視線がむず痒くて目を逸らすと、カタツと何かが落ちる音が聞こえてきた。気になったのでチラ見すれば、高虎が箸を落として固まっていた。

「……どした？」

「何でも、ない。大丈夫だ」

「そ、それなら良いけど……」

どう見ても大丈夫じゃない。今のは露骨過ぎたとは思うけど……ごめん。でもさ、うん、ごめん。やっぱ無理。

取り敢えず落ちた箸を拾って、ティッシュで軽く拭いてから返してお——く、う？

箸を返そうとした伸ばした手。

それがぎゅつと握られた。

高虎の温かさと鼓動が伝わってきて、それで、頭が理解した瞬間、体と顔が馬鹿みた

いに熱くなった。自分でいうのもなんだけど、火に掛けられたヤカンの変な音出そう。

「つ、あつ——ふおつ!？」

咄嗟に手を引こうとしたけど、高虎の無駄に強い握力からは逃げられなかった。がちりと手は握られたまま。思いつきり力を入れてもびくりともしない。

「ゆたか」

「ひょう!?! なつ、なんだ!?!」

じつと見てくる高虎の目は何処か不安そうで、それでいて寂しそうに見えた。

相変わらず表情があんまり変わらないけど。

「………あのな、お前が——いや、何でもない。箸ありがとうな」

そう言うとき高虎はオレの手から箸を取って、ご飯の残りを一気にかきこんだ。あつという間に空になった食器を手に台所へと向かっていく。声を掛けたかったけど、何も言えなかった。なんて言えば良いか分からなかった。謝ったところで、つて気もするし。

ちよびちよび夕飯を食べ進めていると、食器を片付けた高虎が戻ってきた。いつもならリビングのソファに座ってテレビみたり、読書始めたりするんだけど……今日の高虎はリビングに置きっぱなしだったカバンを手にすると、直ぐに寝室へと向かってしま

う。

「明日、やっぱり俺も行く」

そしてそれだけ告げると、部屋の中へ入ってしまった。

いつもならおやすみくらい言ってくれるのに。

何だか部屋がいつもより広く感じる。

それが、何だか凄く嫌だった。

「……おやすみい」

ご飯を食べ終わった後、閉じられた部屋に向かって、それだけ言っておいた。何も言わないで眠るのが、何だか落ち着かなかったから。

「おやすみ、高虎」

もう寝てしまったのか返事は返ってこなかったけど、オレはもう一回だけその言葉を続けた。

どんな形でも良いから、その声が高虎に聞こえれば良いなと思って。

おもうてたより、ときめきが止まらないんですけど

雲一つないとまではいなくても、気持ち良く晴れたその日。いつものように洗濯したり朝ごはん作ったりして慌ただしい朝過ごしたオレは、高虎と一緒に文化祭で賑わいでる母校へとやってきた。

本当は天音と待ち合わせしてくる事になってたんだけど、高虎と行く旨を伝えたら現地集合となったので今は二人きり。昨日の事もあつて少し心配だったけど、案外なんとかなるもんだ。普通にこれだ。良かった。

「・・・どうした？」

「何でもない、いっつ」

校門に設置された妙にコジャレた西洋風のアーチを潜ると、懐かしい校舎が見えてくる。文化祭という事もあつてか、何やらごてごてと飾り付けられてはいるけど。

中に入って直ぐ、案内に従つて受付で名簿に名前を記入。その後は文化祭のパンフを貰つて、弓子の所に行こうとしたんだけど・・・ある人と目があつた。

警戒巡回中と書いたタスキをしてる、見回りをしてるっぽい元担任と。

「——あら、子宝さんじゃない。元気そうで」

元担任の林ちゃんは笑顔でこっちにやってきた。

一見すると人畜無害そうに見えるけど、不思議とオレには修羅を背負ってるようにしか見えない。あれれえー。なんだろう、この寒気はあ。

「え、どうしたの？ 今日は何？ 遊びにきたの？ だったら一言くらい教えてくれてもいいのにー」

そんな事を言いながら林ちゃんは笑顔のままオレの肩に手を回して、卒業式の時に見せてきた暗黒の瞳で顔を覗いてきた。やっぱり林ちゃんは林ちゃんだった。

「そうしたら、子宝さんを埋める穴ぐらい掘っておいたのに。どの桜の下にするう？」

「高虎タスケエエエ!!」

「助けてを呼んでじゃないわよ！ 羨ましいいい!! ねえ自慢!? 自慢なの!? 私には白馬の王子様がいるって見せびらかしてきたの!? 良いわね!! 結婚して幸せそうで!! 分けてくれない!? 幸せ!! ねえ!! こちとら十年以上フリーじゃボケえええ!! いやあああ!! このまま歳とるのは嫌あ!! 枯れたくない! 同期の独身連中みたいに負け惜しみにしか聞こえない台詞言いたくない!! もう同級生の結婚式に一人で行きたくない!!」

「……あー、悪化してるな」

それから少し林ちゃんに絡まれたけど、高虎が何とか宥めてくれてその場は収まった。ありがたい、高虎。危うく埋められる所だった。

林ちゃんもうすぐ三十路で、独身のままそれを越える事を凄く気にしているのは知ってるけどさ、だからつてオレに当たらないで欲しい。・・・高虎に「藤崎。大学に良い人いない？合コン呼んでも良いのよ？」とか詰め寄るのも止めて欲しい。歳考えろよ、林ちゃん。てか、手を握るな。手をつ。あと、高虎はもう藤崎じゃないから。

ジト目で見てると林ちゃんが怪訝そうな顔でオレを見てきた。そして高虎から手を離すと、何を思ったのか頭を撫でてくる。何故に。

「相変わらずちっちゃいねえ、子宝は。それで主婦は上手くやってんの？あんたそこら辺絶望的だったでしょ」

「ちっちゃいは余計です。林ちゃんだって言うほど変わらないくせして・・まあ、家事は大丈夫ですよ。私はやれば出来る子なんで。もう一月くらいでペキカンでした。林ちゃんじゃあるまいし」

林ちゃんも家事は絶望的だったからな。

お昼のお弁当はコンビニ弁当オンリーだし、洗濯物とかクリーニングに殆ど出すし、一回だけ林ちゃん家に行ったことあるから知ってるんだけど部屋とか散らかりまくってるしね。そりゃ、モテんわ。

「はははっ、そうか。それは良かった。——子宝、中庭の桜とかはどうだ？眺めは良いぞ」

「なんの眺めっ!?埋める気!」

「ゆたか。やられる理由が自分にもある事、そろそろ自覚しろ」

林ちゃんも少しワチャワチャした後、生徒に呼ばれた憎しみの使徒な林ちゃんと別れ、オレたちは弓子のクラスを目指して校内を進んだ。

途中に並ぶ売店とかで買い食いしたり、出し物を見て回ったりしながらのんびりと。道中意外とオレの事を覚えてる生徒が多くて、写メを求められたり握手した。大体女の子から。別に男にモテたい訳ではないけど、何故なのか。高虎にそこんとこ聞いたなら「さあな」と顔を逸らされた。まあ、高虎に聞いても分からないよなあ。

校舎に入ってから暫く。

弓子のいるクラスの教室が見えてきた。

廊下でそこそこの人が列が並んで、繁盛してるのが見てとれる。列の最後尾に並んでいると、列の案内をしていた生徒がオレを見つけて肩を跳ねさせた。どうしたのかと見ると急いで教室に戻り——見慣れたツインテールを伴って戻ってきた。何故か学ランを着こんだ弓子だ。

「先つつつつ輩っ!!待ってましたああ!!天音先輩は少し前に——藤崎先輩っ!?!
な、何故、先輩まで!?!さては邪魔しにきましたね!?!成敗!!」

シユワツツで感じて構えた弓子に高虎は、たろちゃんを見るような視線を向けた。

「この間ぶりだな、服部。勉強大丈夫か？」

「藤崎っ！先輩に！心配される筋合いはありませんけどおおお！余裕ぶつていられるのも今の内ですよ！直ぐに法の名のもとに、先輩を自由に見せますからね！」

ビシツと指を突きつける弓子に、高虎は何とも言えない顔をした。いつもなら軽く流したりするのだが、今日は何も言い返したりしない。そんな高虎の反応に弓子も微妙な顔をする。

「……まあ、まああ……立ち話もなんですから、どうぞ中へ。奥の席で天音先輩が待ってますから」

「良いのか？皆並んでるのに」

「良いんですよ。ほら、ここに書いてあるじゃないですか」

弓子が指差した先にはメイド服を着たムキムキの男と共に『鼯鼠上等☆世紀末怒鬼怒鬼冥土喫茶』と描かれたポスターが張られていた。弓子のクラス、センスがイカれてやがる。

「ねっ！大丈夫でしょ！店員の裁量で鼯鼠していい店なんです。ここは」

「うん、そうか。でもそれ、大丈夫ではないな」

「良いんですつてば、そういう客しか来てませんし」

「駄目な要素が増えた」

案内されて中に入ると、更にイカれた光景が広がっていた。ブカブカの学ランを着ながら給仕してる女子は可愛いのだが……メイドさんの服を着て、生足を晒して歩いている男子連中が異様だった。世紀末だった。というか、需要が行方不明なだけだ。

「これは酷いな……」

高虎の小さな呟きにオレも頷く。

激しくわかりみ。

「おーい、ゆたか！こっちこっち！」

声に視線を向ければ、天音が一人テーブルでカップ片手に掌をヒラヒラさせてる。取り敢えず弓子にオススメのコーヒーを二つお願いして、オレたちは天音の所へ行った。

「少しは伸びたか？うりうり」

「ええいつ！林ちゃんといい天音といい！何で頭をつ、やめいい！押すな、縮んだらどうする！やるなら高虎をやれ！」

「隙あらば、俺を売るな。ゆたか」

天音の大学の話しを聞きながら少し、弓子がコーヒー持つてやってきた。コーヒーと一緒にシユガスティック二本とミルクが二つ置かれる。高虎の前にはコーヒーのみ。うんうん、オレたちの事よく分かってるなあ。

弓子は高虎と仲悪いけど、こういうのを見ると本気でそうじゃないんだらうなと安心

だ。

砂糖をいれようとする弓子が代わりに入れてくれた。ついでにミルクも入れてかき回してくれる。サービスなんだとか。他のテーブルで同じような事してる奴がいなけれど、サービスなんだとか。

「どうぞ、先輩。私の胸の中でこんこんと泉のように沸き上がる、溢れんばかりの愛も混ぜておきました」

なにその胃もたれしそうなコーヒー。

弓子の言い方は兎も角、飲んでみたらコーヒーは普通に美味しかった。気分的にはやっぱり胃もたれしそうだけど。

「——で、藤崎先輩はちよつと良いですか？無駄に大きい体してる藤崎先輩に、是非是非手伝って欲しい事があるんですけどお」

「……当然のように客を使おうとするな……で、どうした？」

「藤崎先輩のそういう所」だけ」は好きですよ。私は。あ、それですね、ちよつと荷物を——」

弓子に連行されてった高虎を見送って直ぐ、天音が手招きしてきた。不思議に思つて顔を寄せると「藤崎となんかあった？」と聞かれる。まさかバレると思つてなくて動揺していると、天音思いつき苦笑いされた。

「あれでよくバレないと思ったわね、あんた。バレバレよ、バレバレ。気づいてないかも知れないけど、いつもよりギクシヤクしてる」

「うっ、嘘だあ……そんなに？」

「そんなに。でっ、どしたの。話してみ」

天音に迫られたオレは結局誤魔化し切れず、ここ最近の事について恥ずかしさを堪えて話す事になった。一通り聞いた天音はクネクネモジモジしながら「私の方が恥ずかしいわ!」と怒ってきた。なんでえ。

「あーもう、あーもう。心配した私が馬鹿だったわ。お熱いお話ごちそうさま。上手くやってるみたいで何よりねえー」

「ええ……その、上手くやれてないから、ギクシヤクしてるんだけど……天音はどうしたら良いと思う?」

「どうもしなくて良いんじゃない? 藤崎……高虎の奴の事で、そうやって真剣に考えるようになっただけ進歩したわよ。頑張ってるよ。ゆたかはさ。前のおんたなら平気でスルーしてるでしょ」

「そんな事……ないと……思うけど」

そう言われると前はどうかだったか、少し自信はない。

一緒に暮らすようになって高虎の気持ち聞いて、オレは初めて高虎のオレへの気持ち

ちを知ったくらいなのだ。あの時教えて貰わなかったら、それまでの高虎の優しさとか
気遣いの理由とか・・・もしかしたらずっと気づかなかったかも知れない。高虎は言わ
ないでくれる時がある。それはきつとオレを思ってた。オレの事を誰よりも知ってい
るから、そうしてくれる。

それなのにオレときたら・・・うう。

オレは鈍いと思う。

人よりずっと。

ちよつと自分の鈍さに凹んだと頭を撫でられた。

「よしよし、そんなにクヨクヨすんな。心配しなくても大丈夫。上手いく、上手いく
く」

「くくくつ、事あるごとに頭を撫でるな！このお！子供じゃないんだからな!!天音の頭
も撫でてやろうか!?!どれだけプライドが傷つくか身を持って知るがいいわ!!」

「あははっ、やれるもんならやってみると良い！届けばだけどねくく!」

天音との攻防を暫く続けていると高虎が帰ってきた。

隣には学ランを脱いだクラスTシャツの弓子もいる。

どうやら自由時間になったみたいだ。

それからは四人であちこち回った。

買い食いしたり、出し物のゲームで遊んだり、文化部の展示物を見て回ったり、体育館でやつてるバンドとか見に行ったり色々。

お昼も過ぎた頃、ミニコン出場者に集合を掛けるアナウンスが流れた。少しだけ聞かなかった事にしようかと思っただけ、弓子の元にも連絡が来て連れてくるようにと念押しされてる姿を見るとそうもいかず、結局皆で向かう事に。

集合場所に着くと電話越しでしか面識のなかった日下部さんがいた。日下部さんは電話のイメージそのままの女の子で、ショートヘアが良く似合うちよつと大きい子だった。

「子宝先輩！子宝先輩ですね！子宝先輩ですよね!?今日は本当にありがとうございます！無理いつてすみませんでした!!ですが、本当に助かります!!ありがとうございます!!例の物はイベントが終わった後に進呈させて頂きますので!!本当につ、本当にありがとうございます!!」

「うお、熱いい」

日下部さんからめちやめちや感謝された後、高虎達と一旦別れて更衣室へ。そのまま出るつもりだったんだけど衣装を用意してくれたらしい。ありがた迷惑でしかなかったけど、キラッキラした日下部さんの目を思い出すと今更断れなかったので衣装を――

袋からそれを取り出した時。

オレの時は止まった。

そつと袋へ戻して・・・また取り出して見る。

幻かも知れないし、幻影を見るかも知れないし。

だが、改めて中身を見ても現実には変わらなかった。

オレ、これ、知ってる。

忘れもしない、あの高虎姉の邪悪な顔を。

ゴスロリじゃねえか、こらあ。

もう一度取り出してみると、それはどこをどうみてもゴスロリ衣装だった。黒を基調としたワンピース型のドレス。所々にレースやらフリルなんが付いちちゃってて、同じように用意された厚底の黒のブーツにもリボンやら飾りがすごい事になってる。誰が着るの、こんなの？ああ、オレか・・・オレか!?

着るかどうか悩んでいると、アナウンスが流れてきた。

どうやらミニコン始まったみたいだ。

オレの出番はラストなのでまだ大丈夫だけど・・・こ、これは着たくない。普通に着たくない。

去年は中学の制服で良いとか言われて、まあそれならと思ったけど、これはキツイ。

これはキツイよ。いや、中学の制服もキツイことはキツかったけども。

「……………」

でも、少なくとも日下部さんとかは、オレにこれが似合うと思つて渡してるんだよな。日下部さん的には文化祭を盛り上げたい訳で……だから、そこは信用して良い筈。似合うのか、オレ。ちよつとあれな気分だけど、でもな——。

「よしっ」

「た、高虎っ……!」

更衣室の外へ出ると、やっぱり高虎がいた。

声を掛けるといつものぼやーっとした顔がこつちを向いて————珍しく驚いた顔になった。ポカン顔だ。

自分の格好を見直して見る。

ちゃんと着れてる筈だけど、何かおかしいのだろうか。この手の服は着なれてないから、おかしくても変ではないんだけど。ゴスロリ系は中学の時、高虎姉に着させられた時以来だから自信はない。

「どこか、その、変かな？」

教えて欲しくて聞いたら首が横に振られた。

「いや、あつ、かわ、だ、大丈夫だ」

「大丈夫か、そつか。良かった」

「あ、ああ、大丈夫だ」

そういうと高虎はこつちを見たまま黙ってしまった。

いつもなら何て事ないんだけど、今の高虎の目は妙に熱っぽくてむず痒い物がある。胸の所がぼくぼく煩くて仕方ない。

「ああ、いた！子宝先輩!!あと二人終わったら出番です！準備お願いします!!」

お互い何も言えずにいると、日下部さんが迎えにきた。

遅れる訳にも行かないので会場に向けて足を踏み出して

——「ゆたか」と声が掛かった。

足を止めて振り返ってみると、いつになく落ち着きのない高虎がいる。けれど目は真つ直ぐオレを見てて、何か言いたい事があるだけは分かった。

言葉を待っていると、少しだけ恥ずかしげに口を開いた。

「大丈夫じゃなくてな．．．その、よく、似合ってると思う．．．．可愛いと．．．
思う」

多分だけど、きつとそれは高虎が今まで、言わないでいてくれた事なんだと思った。
だってそれは、オレがあんまり好きじゃなかった言葉だから。ずっと好きになれな
かった言葉だから。

「ありがと．．．頑張ってくるー」

ガッツポーズを見せれば、高虎もガッツポーズを返してくれた。

オレは胸の中で沸き上がる気持ちに背中を押され、迎えにきてくれた日下部さんの後
を追った。

そうして何でも頑張れる気がして舞台にあがったものの、結果は自己紹介すら舌を噛
みまкруるといいう大実態であった。一言話す度に舌を噛んでいくという、自分でもどうし
てこんなに器用に噛めるのかと、驚きの噛み具合だった。もうあれだ、穴があつたら入

りたい。

けれど、会場は馬鹿みたいに盛り上がって、それでやっぱり優勝してしまった。審査員共に言いたい。趣旨に反してまで、何が、お前らに、そうさせるのか。

「来年も参加してくれるかなあ」と、どこぞのサングラスおじさんみたいな事言われたけど、それだけは全力で拒否っておいた。来年はきてやらないからな！この野郎共お！

色々と楽しんだ帰り道。

勇気を出して高虎の手を握ってみた。

結果は相変わらず胸がバクバクして、火が出そうなほど頬が熱くて、落ち着かなくて、物凄く大変だった。

でもその手の温かさは嫌じゃなくて、しっかりと掴んでくれる力強さは嫌いじゃなくて、オレは家に着くまで頑張って繋ぎ続けた。

少しだけ、それが当たり前前になれば良いとか、そんなことを思いながら。

おもうてたより、冬の訪れが早いんですけど

肌寒さを覚え始める11月のとある日曜日。

いつもならまったりのんびりと過ごしてる所なのだが、今日というその日は本格的な冬支度をしていた。朝から洗濯したり掃除したり布団干したりと大忙しだ。一通りそれらが終わった今は俺が衣服の衣替えして、高虎はコタツとかストーブとか用意してる所だ。

「高虎ー、これまだ着るー?」

最近よく着てる半袖のシャツを持って畳部屋に行くと、高虎が電気マットを敷いていた。電気マットはいつも高虎の部屋で見てたやつで、何だかいつもの畳部屋が高虎に占領された気分になる。

「……どうした?」

じつとその光景を見ると、いつの間にか高虎が怪訝そうにこつちを見ていた。

「俺の陣地は何処だ。まさか貴様つ、コタツからオレを追い出すつもりではなかるうな!!」

「いや、なんでそうなる。好きな所に居れば良いだろ」

「じゃあ、オレ窓側が指定位置な!!」

とうつ、と陣地を制圧。

高虎に見せつけてやれば呆れたな顔をした。

なんだよお。

「まだ用意してる途中なんだが・・・」

「見てれば分かる」

「というか、俺のTシャツ持って転がるな。それしまうやつだろ。折角洗濯したのに、お前」

敷立てのそのの上でコロコロすると、敷かれた電気マットの微妙な臭いが鼻についた。スンスンと嗅いでみる。ふむふむ。これは押し入れに押し込まれてた物の臭いだ。間違いない。小さい頃、高虎の家で隠れんぼとかして押し入れに入ると、いつもこんな臭いがしたものだ。というか、高虎の家の臭いがする。

「高虎ん家の臭いがする・・・やはり占領する気か。古来より生き物は臭いで縄張りのアピールをするというし・・・やらせはせん!やらせはせんぞ!」

「何かの物真似か? 悪いんだが、アニメだと俺は分からないぞ。そんなに嫌なら新しいのでも買ってくるか?」

軽々しい提案に俺のオツムはぶつつんきた。

日頃から節制を心掛け、小まめに電気消したり、シャワー出しっぱなしにしないようにしたり、出来る限り特売とかセールに買い物行ってるのをなんだと思ってるんだ！隣にいて見てるだろうに、こいつう！何も気にしないやつか！いや、そりゃ、節約の為とはいつても基本近所のスーパーしか行かないけども！でもだ！でも！ちゃんとチラシとかネットとかで調べて、安い日狙って買い物行ってるのにい！！ポイントだつて貯めてるのにい！！この野郎う！！

「なに言ってるんだ！勿体ない！使える内は電線が見えたつて使うんだよ！お金は生えてこないんだからな！」

「お、おう。そうだな、思いつきで言つて悪かった。でも電線見えるまでは止めような。感電する。適当なタイミングで買い直そうな？」

「それなら良いけど・・・ふう、まったく。高虎は俺がいないと駄目だな。いつまでも学生気分だ」

「・・・すまん。——いや、待て、俺はまだ学生なんだが」

なんかブツブツ言ってくる高虎は無視して、俺は取り敢えずその懐かしい臭いを嗅ぎ直す事にする。やつぱり高虎ん家の臭いがする。となると、高虎臭というより藤崎臭といた方が良いのか？臭いを嗅いでるとふと、手元のTシャツが目についた。顔に近づけて臭いを嗅いでみれば、心地よい石鹸のいい香りがする。元々俺の実家でよく使つて

た洗剤と同じやつを使ってるから嗅ぎ慣れたやつなんだけど・・・よくよく嗅いでると実家とは違う臭いが混ざってる事に気づいた。

「？」

いやな訳ではないけど、なんだろうか？

何となしに今着てるパーカーの袖の臭いを嗅いでみれば、Ｔシャツと似たような臭いがする。む？俺の臭い？でも高虎っぽい気がする？かな？む？洗濯物一緒にしてるせいか？

「・・・ゆたか、勘弁してくれ」

声に顔をあげると顔を掌で覆う高虎がいた。

指の隙間から見える顔は真っ赤で、最初は不思議に思っただが手元のＴシャツを見てハツとした。こいつの目の前で臭い嗅いでたっ！と。

「これはっ、違うからな！あれだ、確認してただけだ！変な臭いがしたから！」

「へ、変な臭いっ・・・!!?わ、悪い。今度から気をつける」

「はっ!!いや、違うっ、変な臭いというか、そうじゃなくてな!!?あれだ、マットは高虎のだから!?だから、同じ臭いかと思っただけで、なんか違うから、その確認というか——
——大丈夫！俺のパーカーも似たような臭いだったから！」

そう教えると高虎が背中を向けた。

なんかプルプルしてる。

オコカ?! オコなの!? 震える程にオコなの!?

高虎が怒るなんて早々ない。そして早々ないそれは、とてつもなく恐いものだ。前に俺がぼーっとしてて車に轢かれかけた時とか、鬼のように怒られた覚えがある。あの時はマジで恐かった。金玉ないけど、金玉が縮みあがる思いだったもの。

「ごっつ、ごめんつてば。変な臭いじゃないから・・・」

「・・・いや、分かった。それは。怒つてはないから気にするな、大丈夫だ」

「そうなのか? 本当に?」

「本当だ」

そう聞くと高虎は何度か深呼吸してからこつちを向いた。顔の赤みは少し残ってたけど、危惧していた眉はつり上がってない。本当にオコではないみたいだ。

「——はあ。ほら、そろそろそこをどいてくれ。コタツ組み立てるから。コタツでミカンやるんだろ?」

「うん、まあ。でもミカンは12月入ってから良いかなあ。今はおコタ入ってゲームしたい気分」

「なんの拘りだ」

苦笑する高虎を見ながら、邪魔にならないようにマットから出た。高虎はマットの上

に端に寄せておいたテーブルを置いた。それからテーブルについた電気コードをコンセントに指して、試しで何度か電源をオンオフする。壊れていなかったみたいでコタツは電源を入れる度にブオンブオンと音を立てながらオレンジ色に光った。

そこに干しておいた毛布と掛け布団を掛けて、テーブルの板を上に乗せて完成だ。

早速入つてみたくて高虎に視線を送ると、「良いぞ」と微笑を浮かべながら頷いてくれる。お言葉に甘えて定位置に足を滑らせれば、さつきまでの俺の体温が残つたのか又クツとしている。スイッチを入れればブオンという音がなつて、じんわりと足が温まる感覚がやつてきた。

これこれ、これだよな。

冷たいテーブルに顔を預け目を閉じる。

まだぬるいけど、これだけでも寝れちやいそうなくらい心地良い。ちよつとテーブルが固かつたので、側においてあったいつも使つてるクッションを挟む。これで良し。

ぼやーつしているとコタツにひんやりとした風が入り込んできた。視線を前にむけると、高虎が同じようにコタツに入つてきてるのが見えた。

「この所急に寒くなつてきたからな・・・」

「だよなあー。ちよつと前まで暑かつたくらいなのに・・・あつ、そうだ。今夜はお鍋にするか。お肉鍋。白菜と豚肉が一杯入ったやつ。ほら、ギユウギユウに詰まったやつだ

よ。テレビでやってたろ」

「ああ、そんなCMあったな。じゃ白菜買ってこないとな……豚肉もそんなに無かったろ」

それから少し二人でのんびりしてから、改めて残ってる衣替えを開始。買い物にもいかなないといけないので、隠し燃料に火をつけて超特急で片付ける。わたたたた！わたあ！的。まあ結局、途中からストープの用意を済ませた高虎に手伝って貰ったけど。

それくらいはね、うん。

本格的な衣替えも終わり、俺達は駅前の大きい方のスーパーに出掛けた。チラシを調べた結果、特別セールとかはやってないけれど、まあこの出費は仕方ないので気にしない。家計簿にはしっかりと書くけど……それだけの事だ。大切なのは無駄遣いしない事で、こういうのは無駄遣いとは言わないからな。

いつものようにカートを押しながら野菜エリアから見に行くと、お目当ての白菜を見つけた。ちよっとお値段は高いけど、キャベツとかレタスで代用なんでもつての他なので買うことに変更はなし。出来るだけ大きな物を選んで、それを手に取って見てみる。

ふむ、いい白菜ですね。

「こつちのが大きいぞ?」

「なぬ! そんな馬鹿な、俺の目に狂いがあるとでも言うのか!」

「いや、別に狂つてるとは思わないが・・・ほら、試しに持つてみる」

手渡されたそれをしつかり比べてみれば、微妙に高虎が選んだやつの方が重い気がする。でも微妙にだ。そんな持つて比べないと分からないレベル。いや、持つてても気づくか気づかないかレベル。よつて悔しくはない。誤差だ、こんなのは。

「俺の方を買いま・・・高虎のつ、方を、買いま、す・・・くつ!」

「どれだけ悔しいんだ」

「お前には分かるまいよ! この気持ちはい!」

「まあ、分からないが・・・」

白菜を買い物袋カゴに入れたら、他の野菜も見て回る。それでシイタケとかネギとかニンジンとかも選んでカゴの中へ。ショウガは家にあるから買わない。そんなカゴに詰まった野菜を見た高虎は首を傾げながら「白菜と豚肉だけじゃないのか?」と呟いてくる。そういう鍋もあるけど、今回は他の野菜も入れる鍋なので問題ない事を伝えれば「そうなのか」と納得してくれた。というか、白菜と豚肉だけとか飽きるだろ。ん? それとも飽きないのか? いや、俺が飽きるしな。じゃ、やつぱり駄目だ。

お野菜の次は豚肉。

いつもはパックで並んでる外国産ものだけど、今日は態々スーパーの中にある切り売りしてくれるお肉屋さんで買うことにする。グラム数を言ってみよう、ちよつと贅沢なあれだ。

買う物を選んできるとお店のおじさんが話掛けてきた。少し緊張したものの鍋の話ですれば、おじさんがオススメの豚肉を教えてください。300グラムで二千円近いお値段だったのでちよつと腰が引けたけど、ちよつとおまけもしてくれると言うのでそれを購入する事にした。

お肉屋さんを離れて少し、高虎が肩をちよんちよんとつついてきた。どうしたのかと思つて振り返れば、カゴの中をじつと見つめてる。

「……良いのか？節約は」

「良いんだよ。こういう時の為に頑張つて節約してるんだから。貯金分はちゃんと分けてるし。今日の高虎は沢山力仕事したからな、一杯食べて良いからな？」

「……ゆたか、帰ったら抱き締めても良いか？」

「おふっ!?なんでいきなり!?いや、まあ、最近はしてないし……べ、別に、い、良いけど……」

そう口にする和高虎が目を丸くした。

普段どちらかと言えば細くて鋭い目付きが、随分と見開いて間の抜けた顔になってる。思わず笑ってしまうと、高虎が少し困ったように笑う。

「・・・ありがとうな、でも無理はしなくて良い」

それだけ言うと高虎は俺の手からカートを奪って前を歩き始めた。別に無理してる訳じゃないんだけどな・・・いや、心臓がバクバクしてるけどさ。

相変わらず大きい背中を追って歩くこと少し、人で賑わうレジについた。時間帯的に混むのは分かっていたけど思ったより並んでない様子。列に並んで高虎と鍋の話をしなから待ってればあつという間に順番がきた。

レジの店員さんはベテランの人だったみたいで、商品が電子音と共にどんどんレジを通っていく。お会計の値段が出た所で、高虎に商品が入ったカゴとエコバッグを渡し俺は財布を開いた。・・・いつもより金額が大きくて、ちよつと泣きそうになったのは秘密にしようと思う。あつ、すいません。十円あります。

買い物から帰って直ぐ、高虎と鍋の準備を始める。

コンロとかの用意は高虎に任せ、俺は野菜を洗ってさっさと切り分けてく。白菜はまだ切らない。白菜は一枚ずつ葉っぱを剥がして使うからだ。洗った葉っぱとお肉は交

互に挟んでいってミルフィーユ的にする。お肉からはみ出た部分の白菜は切り落とし、綺麗になったそれを鍋のフチにそって敷き詰めてく。うん、いいね。

切り落とした白菜は他の野菜と一緒にど真ん中に設置。見栄え的に他にないしね。個人的には白滝とかマロ●ーちゃん入れたいけど、この鍋だと違う気がするので止めたい。

水と醤油、鰹だしを混ぜた物を適量入れて火を掛ける。グツグツいい始めたら蓋をして少し待つ。豚肉はしつかり火を通さないと危ないからな。

鍋の様子を見ながら待つと、高虎が台所に顔を出した。

「カセットコンロな、一応使えるがあんまりガスが残ってないみたいだ。買ってくるか？」

「んー？良いだろ、余ってるだけで。そんなに頻繁に使わないし、冷めたの温めるくらいだし、足りる足りる」

「そうか」

そう言うのと高虎は俺の隣に立った。

いつもみたいに大人しくリビングで待つてれば良いのに、なんか隣でじつと鍋を見つめてる。たまにこつちを見てくるけど、何も言わない。

「どうした？」

「……後、どれぐらいだ？」

「もう出来るから待つてろよ。なんだよ、もう腹減ったのか？」

「いや、それも、あるんだけどな……」

高虎は何処かソワソワしながらそつぽを向く。

最初は不思議に思ってたけど、思えば帰り道もこんなだった。やたらとこつちを見てきて、視線を向けると『何でもない』って態々言ってくるのだ。気になって仕方なかった。どうしたのかと本格的に考えると、もしかしたらとそれが思いついた。ぽそつと高虎が言った事が。

「高虎。さつきもいったけど、別に良いぞ」

「あつ、すまない。聞いてなかった。なんの話——」

じつと隣にいる高虎を見上げれば、俺が何を言ってるのか分かったみたいで高虎の喉が唾を飲み込むみたいに動く。目が獣みたいになってるのが少し怖いけど、高虎なら俺の嫌な事しないって信じてるし。それに——。

「あんまり、強いのはやだからな？」

——それに、俺も高虎にぎゅつとされるのは好きだから。

俺の言葉を聞いて高虎が後ろから腕を回してきて、そのままぎゅつと抱き締めてくる。心臓はバクバクとうるさくて、手汗とかも凄い事になって、顔も熱くて仕方ない。

だけど、その温もりは全然嫌じゃなくて、何処か安心出来た。

「・・・もう少し、強くても良いぞ」

「そ、そうなのか？いつも、こんなもんだったと思うんだが・・・」

「良いの、今日はな」

「そう、そうか・・・分かった」

ぎゅうつと、抱き締める力が強くなった。

それでも壊れ物を扱うみたいに優しい力加減だけど。

それは何だか余計に恥ずかしくて、でも何故か嬉しくて頬が緩んでしまう。

それから鍋がちゃんと煮えるまで、高虎と一緒に鍋の様子を見た。ぎゅうつとされながら。

「高虎ー」

「・・・なんだ」

「呼んだだけーへへへ」
「・・・本当に勘弁してくれ」

おもうてたより、特別だったらしいんですけど

こたつとストーブが手離せなくなってきた十一月後半。

いつものように早起きしてお弁当と朝御飯を作ってたんだけど・・・台所から首を出した先に見える、その見慣れない光景に思わず首を捻った。

「まだ、寝てんのか？」

廊下の先にはリビングがある。いつもなら必要もないのに早起きした高虎がテレビの電源入れて、朝のニュースとか流しながら小難しい新聞読み始める時間だ。のんびり朝御飯まで寝てれば良いのに、と思わなくもないけど・・・まあ、一人で早起きしてるのも癪だから別にそれは良いけどな。好きにすれば良いんだ。うん。

そんな高虎が起きてこない。

少し気になったけど、たまにはそういう日もあっても良いだろうと放っておく事にした。ギリギリまで惰眠を食うが良い、高虎よ。オレもお前が出掛けたあと、洗濯物して掃除したら寝る。お昼まで寝る。

朝御飯とお弁当を作り終え、出来立てホヤホヤのそれらをリビングに並べて待つこと少し。いつもなら朝御飯を食べながら占い見てる時間なのに、高虎の部屋から何も物音

一つしない事が気になった。慌てて着替えてる音とか、起こさなかったことに文句言う声だとか、なんかそういうのを期待してたのに、そういうのが全然ないのだ。早く「起きなかつたお前が悪いっ！ふははは！お寝坊さんめえ！」って上から目線で言いたいの……。

「……なにしてんだ？」

ソワソワしながら待つてても、全然起きてくる気配がない。ふと時間を見れば、そろそろ高虎が発発しないとイケない時間が目の前まできてる。仕方ないので高虎の部屋にいつてノックしてやった。

「高虎ー、おーい。朝御飯食べないのかー。ていうか、遅刻するぞー」

ドアの向こうから聞こえる音はない。

オレの声が廊下を反響するだけ。いよいよおかしいと思ったオレはドアノブを回した。

中を覗くと相変わらずの面白みのない部屋が目映る。本が沢山積まれた勉強机、ずらつと並ぶ本棚、壁に掛かった時計、昔から高虎の部屋にあつたダンス——それとベッドとその上で布団を膨らませる高虎の姿が。

「なんだよいるじゃん。返事くらいしろよな？遅刻するぞ、朝御飯食べてる時間もう、ないから……な……？」

肩を揺らそうと近づいて気づいた。

小さな咳き込み、辛そうな荒い呼吸、赤くなった横顔。

そしてその顔を見てるとオレは思い出した。高虎が一年に一回くらい、季節の変わり目辺りでアホみたいに熱出して寝込む事を。

慌てて手を伸ばして高虎のおでこに触れれば酷く熱い。火傷しそうとまではいなくても、結構な熱が出ているのは計らなくても分かる。オレが触った事で高虎が瞑つていた目を薄く開け、ゆつくりとした動作でこつちを見てきた。見るからに辛そうに見える。

「だつ、大丈夫か!? オレはここにいるぞ! こつちを見ろ、目を瞑るな! 目を瞑ったら死ぬぞ! 良いか! 落ち着いて素数を数えろ! 寝るな! 死ぬからな!」

「雪山……かつ……大丈夫だ。ゴホッ、そこ、までじゃない。ただの風邪だ……素数は、お前こそ数えろ」

なん、だど……! 素数はオレが数えた方が良かったのか! そうか知らなかった! 「分かった! 素数を数えれば良いんだな! いっぱい数えてやるからな! 待つてろ……いや、待て! 素数を数える前に氷とか持つてくるか!? おでこ熱いもんな! 濡れタオルとか、あつ、おかゆ! そうだ、おかゆ!! おかゆ作らなきゃ!! あつ、でも、素数も数えないと——はっ!!! 素数を数えながら氷でおかゆ作つて濡れタオルにすれば良いのか!」

「……落ち着け。ゴホッ、物理学者が腰抜かす、とんでも錬金術する事になるぞ。ま
ずはっ、深呼吸して、くれ」

「ひーひーふー！ひーひーふー！」

「何を、産む気だ」

少し深呼吸したら落ち着いた。

あいむ、ベリークーる。

ひーひーふーは違うって分かった。

取り敢えず高虎の言う通り洗面器に水とタオルを入れて持っていく。足りなくなる
とあれだから水もタオルをありったけ詰めといた。高虎はオレが抱えてきたそれを見
て軽く溜息を吐くと、自分のおでこをトントンと叩く。

なのでおでこを撫でてやった。

スリスリと撫でたそこはやっぱり熱い。

あと汗でベタベタしてる。

「……なんで、撫でた」

「ん、違うのか？撫でて欲しそうだったから……嫌なら止めるけど」

「いや、ではないんだが……あのな、そうじゃなくてタオルの量の話だ。オレのデコ
は、そんなにタオル必要なほど広いか？」

言われて高虎のおでこをマジマジと見てみれば、確かにこんなに要らない気がする。そもそも交換して使えば言い訳で、予備も合わせて3つもあれば十分だ。足りなくなるって考えたのは何だったのか・・・ふう、少し落ち着く必要があるな。

「ひーひーふー、ひー」

「あー、分かった。頼むから、絞ったタオル、額に乗せてくれ」

「よし！オレにいい、任せておけえ！」

濡れたタオルを鬼神がごとき力で絞つてから高虎の額にペタツとおいてやる。なんか思つたよりベチャツとしたが、高虎は「ありがとな」と感謝してきたので、それはそれで絶妙な濡れ加減だったのだろう。さすおれ。

「・・・もう、ゴホツ、部屋出てくれて、良いぞ。うつすとなんだからな」

「なに言つてんだ。病人一人で置いとけるか。他に欲しいものなんかないか？布団増やすか？テレビいるか？おかゆか？やっぱりおかゆか？おかゆだな」

「ああ・・・そうだな、おかゆ頼む。あと風邪薬と飲み物、持ってきてくれるか？」

「分かった！」

「お、おい、走るな。危ないぞ」

速きこと風の如く部屋を飛び出し———ドアの所に小指を持つてかれた。飛び上がる程の激痛に涙が零れる。アホみたいに痛い。

「凄い音したけど、大丈夫か？骨折ったりしてないか？」

そんな心配そうな声が聞こえてきて、オレは氣力を振り絞って親指を立てておいた。のーぷろぐれむだあ、折れてない！と思う！痛いけども！

負傷した足を引きずりながらリビング、それから台所へ。必要な材料と道具を引つ張り出したら、用意した土鍋の中に回収してきた朝食の余りのご飯、それと水と白だしと生姜を入れて火に掛ける。強火だと焦がしてしまうので中火ゆつくりだ。沸騰するのを待つてる間、梅干しの種を抜いて、卵を溶いて、海苔を小さめに刻んでおく。時折、鍋を掻き回すのも忘れない。焦げ付くからな。

暫く煮込んでるとご飯がふやけてきた。味見してみれば煮込んだお米は良い感じに柔らかい。塩味も丁度良い。んまい。火を少し弱めてから溶き卵を投入し、卵に火が通るまで軽く煮込む。

出来上がったそれに梅干しを乗せてゴマと刻み海苔を振り掛けたら出来上がりだ。本当はネギも入れたかったけど仕方ない。ネギ買ってない。

良い匂いが漂う出来立てのおかゆと、頼まれてた飲み物と風邪薬をおぼんに乗せて高虎の部屋に帰る。高虎はぼーっとした目で天井を眺めていたけど、オレが帰ってきた事に気づくとゆつくり体を起こしてきた。おでこに乗せてたタオルが布団に落ちる。

「おい、寝てる」

「・・・いや、寝たままだと食べないだろ」

「良いから寝てろ」

おぼんを机の上に乗せてから「ていつ」と無駄にデカイ図体を押せば、大した抵抗もなく高虎はベッドに沈む。こんなにフラフラしてて何が大丈夫なのか。アホめが。

布団を掛け直して、濡れタオルを新しいのに変えてやる。ベシヤツと額にタオルが乗ると小さいうめき声をあげながら、高虎は何か物言いたげにこつちを見てきた。

「タオル、もう少し絞ってくれないか」

「わりい、高虎あ。それだけはあ、できねえ。おらあよ、もう指一本分も力込められねえからあよお」

「ああ、これが限界か・・・そうか」

何処か遠い目でそう呟く高虎を横目に、部屋のクローゼットを開くと予備布団を見つけた。綺麗に折り畳んであるそれを引っ張り出す。不思議そうな顔した高虎に体を浮かせて貰って、上半身が少し起き上がるよう布団を挟んでやる。これでよし。

「じゃ、先に飲み物飲むか？」

「お、おう」

ベッドの隣に用意した椅子に座り、コップにストローを指して差し出してやる。すると熱で顔を赤くした高虎は少し視線をさ迷わせた後、おずおずといった様子でストロー

を啜えた。ズズズと麦茶がストローを通ってく。

飲み終わって頃合いを見計らってコップは机へ。

今度は土鍋からお粥をおわんによそう。

高虎がおわんを受け取ろうと手を伸ばしてきたけど、そうする為に体を起こした訳でもないので無視してやる。大人しく寝てろというに、まったく。

「……お前が、食べるのか？」

「何でだよ。ほら、アホなこと言っていないで口開け。あーん」

「!？」

レンゲにおかゆを乗せて差し出したけど、何故か高虎が固まったまま口を開かない。湯気の立ち具合からまだ熱かったか?と思つてふうふうしてから「あーん」ともう一回言えば、高虎が顔を真っ赤にしながらくっくり口を開いた。すかさずレンゲを口に突っ込んでやる。

「どうだ、んまいか?んまいだろ。マザーから教わったやつだからな」

「ああ……旨い」

「そうだろ!まああ、オレの日進月歩な料理スキルあつてのことでもあるけどな!最早オレに作れない物などない!レシピ見たら!」

称賛の言葉を待ったけど……思つた言葉は掛からなかった。あいての係りの高虎は

といえ、口をモゴモゴさせたままぼーっと前を眺めてる。よくよく見れば耳まで赤くなつて、熱のせいで聞いて無かったのかも知れない。

温度が気になったのでおでこに触ってみると、高虎が肩をびくつかせて体を仰け反らせた。まるでオレから逃げるようにだ。何かすると思つてるのか？失礼なやつだ。

「なんだよ、病人相手にイタズラなんかしないぞ。流石に」

「い、いや、そうじゃ、なくてな……なんか、な、今日は随分と、その……色々してくれるな、と」

「ん？そうか？そんな事ないと思うけどな？」

掬ったおかゆをふうふうしてから「あーん」とまた差し出してやれば、さつきと違いすぐにばくついてくる。相変わらず顔は赤いけど食欲はあるようで安心した。鯉の餌あげ気分でどんどん食べさせていくと、土鍋の半分を少し過ぎたくらいでギブアップ宣言がきた。申し訳なさそうにしてるけど、オレの予想だと四分の一もいかないと思つてたから十分大健闘だ。寧ろよくここまで食べたな。こいつ。

薬と飲み物を飲ませてから体を起こす為に挟んでいた布団を回収し、濡れたタオルを新しいのに変えると高虎が眉を下げてこつちを見た。

「……本当に、悪い。体調が、戻ったら、食べるから……とつて置いてくれ」

「はいはい、取つとく取つとく。謝らんでいいから、はよ寝ろ。大学の方は先生とかに連

絡とかした方が良いのか？」

「それは、別に、大丈夫だ。一応、弦巻の、やつにも、連絡してある」

「そっか。じゃあ、もう寝とけ。何かあつたら呼べよ？」

使ったタオルを片付けるついで、高虎の顔の汗を軽く拭いたオレは洗面器を手に一旦部屋を出た。使わないタオルは洗濯籠にぶちこみ、洗面器もお風呂場に置いとく。高虎の部屋に起きっぱなしでも良かったんだけど、寝床に置いておいたら高虎が勝手にやりそうだからな。細かい事は気にしないで寝てれば良いんだ。風邪っぴきは。

それから土鍋を片付け、オレは少し遅い朝御飯を食べた。すっかり冷えてしまった味噌汁はイマイチ。おかずに焼いたベーコンエッグも油が固まっていたり、少し乾いててうーんだった。勿体ない、半熟は成功したのにい。

ご飯を食べ終われば食器の後片付け。それが終わったらゴミ出して洗濯物を干して、高虎の様子を見に行って、それで掃除して回る。毎日やってるお陰でそこまで汚れてないが油断は出来ないので窓枠の縁まできっちりやる。最近はあまりこないけど、抜き打ちでマザーがくるからだ。埃溜まつてる所を指でツーツツてされて「こんなに汚れてるわよ」って言われるのは怖いのでやだ。それにゲームも没収されかねないし。

やることを全部終えてから、氷水ぶちこんだ洗面器と乾いたタオルとか諸々を手を高虎の部屋に戻った。一度様子を见に行った時はまだ起きてて微妙な顔でこつちを見て

きたけど、今度は力尽きて小さな寝息を立ててる。

一起こさないよう慎重にタオルをとって洗面器に浸す。置き直す前におでこを触って熱を確認すれば、朝触れた時よりは熱くない気がする。薬が効いてきたのかも。

乾いたタオルで顔とか首とかの汗を拭くと、高虎は少しくすぐったそうにする。イタズラ心に火がつきかけたけど、病人なのでぐっと堪えておく。イタズラは元気になつてからだ。

しつかりマスクを装備してイヤホンを付けた携帯ゲームしながら高虎の様子を見ると、何となく子供の頃を思い出した。——とはいっても、オレが看病されてる側の記憶だけ。

高虎は一年に一回くらい寝込むけど、会うのは放課後から夕飯までのちよつとした時間だし、何よりこいつは一晩寝たら大体復活するから看病なんてしたことない。逆にオレはよく体調崩してたから、割り和高虎が様子を見にきてくれたんだよな。マザーが忙しい時は休みの日とか看病もしてくれた。

思えば高虎は寝込んでる時よくこうして隣にいた。特別何をするでもなく大人しく読書とかしてて、でも話掛ければ話し相手になつてくれるし、頼めば飲み物持つてきてくれて高虎がいる間は暇しなかった。マザーは我が子を谷底に蹴落とす系のライオン女子だから、本当に必要でなければ構つてくれなかったし。

だから平日とかに寝込んだ時は、学校が終わる時間が待ち遠しくて……待ち遠しくて……そうか。待ち遠しかったな。あの頃から。ずっと。今と同じように。

目の前にある幸せそうな寝顔。ゲームを止めてイヤホンを外すと穏やかな寝息が聞こえてきて、何とはなしにそいつの頬を指でそっと触れてみる。汗でベタつとしてるし、そんなに柔らかくないから手触りは良くないけど、そうして触つてると何故か頬が緩んだ。

友達だと思つてたけれどオレが気づいてないだけで、もうずっと前からただの友達だと思つてなかつたのかも知れない。だって天音達と待ち合わせしても、こんな気持ち抱かないから。指を触れさせただけで、こんなに嬉しい気持ちは抱かないから。

あの日から、オレは色んな気持ちに気づいてばかりだ。

高虎があの時助けてくれなかつたら、高虎が好きだつて教えてくれなかつたら、高虎と一緒に暮らしてなかつたら分からないままだったかも知れない事。

それが良かったことなのか最初は分からなかつたけど、今なら気づけて良かったつて思う。

「おやすみ、高虎。ゆっくり、いっぱい眠れ。熱がひいて元気になったらカレー山盛り食べさせてやるからなあ」

マスクを外して頬に少し唇を触れさせた。

高虎は僅かに身を振るけど、起きる気配はない。呑気にお昼寝続行だ。オレとしてはその方が良いけど。

何せ顔も体も風邪を引いたみたいに酷く熱い。下手したら高虎より熱い気がする。きつとアホみたいになつて赤になつてるんだらう。自分からしといてなんだけど、流石にこの顔は見られたくない。じゃあしなきや良いのにも思うけど、どうしてもやりたかつたのだから仕方ない。寝てる顔が可愛かつたんだもん・・・もんはないな。もんはなし。もんはありません。もんはなかつた！

それから暫く高虎の横顔を眺め、寢息に耳を澄ませながらぼんやり過ごした。そうしてると次第に瞼が重くなつていつて——三時くらいに高虎の上に突つ伏して寝てる所を高虎本人に起こされた。「頼むからトイレいかせてくれ」と切実に起こされた。正直、すまんかつた。

おもうてたより、クリスマスが待ち遠しかったりするんですけど。

近所のスーパーに流れる曲がクリスマスソングに変わり、街の至る所で色とりどりの飾りやイルミネーションが輝きをみせ始めた12月のある日。

「クリスマスは用事があるから駄目」

オレはお祖父ちゃんの代理でクリスマスパーティーのお誘いをしてきた矢並さんにNOを突きつけていた。電話越しの矢並さんは少し驚いた様子だったが、直ぐにいつも通りの落ち着いた声で話を続けてきた。

『————そうですか。それは残念です。ゆたか様のプレゼントも用意して、随分と楽しみにしていたのですが……仕方ありませんね。元康様には私の方からそう伝えておきます』

「うん。矢並さんお願い」

『しかし、クリスマススの用事ですか……高虎くんと何処かにお出かけですか？』
鋭い矢並さんの言葉に胸がドキリとした。

矢並さんは時々エスパーだ。

コタツの中にある足を無意味にもじもじさせた後、オレは矢並さんに教える事にす
る。

「・・・うん。あのね、ちよつとね・・・高虎がどうしてもって言うからさ」

『ふふふ、そうですか。高虎くんが』

風邪が治つて少しした頃。

高虎が夕飯の時にクリスマスの予定について聞いてきた。今年もお爺ちゃん所の
パーティーに顔を出そうと思つてる事を伝えたら、クリスマスにデートしないかと誘わ
れた。随分とかしこまって聞いてくるから何事かと緊張していたので、聞いた直後はす
ごい脱力感に襲われた。漫画みたいに、ふにやあつてなつた。ああいう時、本当に体か
ら力が抜けるんだつて、初めて知つたよ。

でも仕方ないと思うのだ。

だつてあまり鬼気迫る様子で、てつてきり三行半でも突き付けられるのかと思つてた
から。

なにせオレと違つて大学に行つてる高虎は出会いも多い。ゼミとかサークルとかつ
てのがあるらしく、大学は出会いに事かかない場所だ。仏頂面さえ慣れてしまえば高虎
はそこそこイケメンで、頭も良いし性格も良いやつだからモテるに違いない——そ
れに、最近はある限り高虎が・・・なんていうか、その、求めてこないというか・・・

抱き締めたりとか、そういう事あんまりしようとしなから、飽きたちやつたのかと……くうは！何考えてるのか、オレはっ！くつ、高虎の癖にい！モヤモヤさせおつてからに！あの仏頂面野郎、分かりづらいんじやあ！不安になるだろ！デートくらい普通に誘え！くう！

はっ、思い出したら憎しみが湧いてしまった。

これが可愛さ余って憎しみ天元突破か。

わかりみ。

そんな訳でオレは生まれて初めて、家族以外とクリスマスに用事が出来てしまった。前世も含めて、マジでこれが初めて。そう考えると少し寂しい気がしないでもないけど……今は寂しい気持ちより嬉しさのがずっと大きくて、その事を考えるだけで顔もどうしようもなく揺るんでしまうのだから、オレは中々どうして単純な頭をしてる。「えへへ、だからね、クリスマスは駄目なんだあ。本当にごめん。代わりって訳じゃないけど、お正月には顔見せに行くから、お祖父ちゃんにはそう言っておいて」

『はい、そのようにお伝えしておきます。では要件も済みましたし、私はこの辺りで』
「あつ、ごめん。矢並さん仕事申だよね。じゃあ、また。ばいはい」

『はい、お正月楽しみにしています。それでは』

通話が切れる音が鳴り、スマホから音が消えると部屋はまた静かになってしまった。

テレビも消しているから本当に静かで、壁に掛けてある時計の針がカチカチとなる音がやけに大きく聞こえてくる。

「……高虎、今日は何時に帰ってくるんだろ」

予定通りなら七時くらいには家につく。

でもまあ、これから冬休みがくるわけで、その為に大学で色々やることもあるだろうから遅くなる可能性もなくはないかな。そこから辺よく分からないけど。

少し時計を見てぼーっとした後、オレは手元にある毛糸のマフラーの増設を再開した。マザーに教わりながら始めたこれも大分長くなってきた。今なら首に一巻きくらい出来そうだ。

「喜ぶかな……」

アミアミしながら、ふとそんな事を思った。

オレが男だった頃はこういう物を女の子に貰えるのは夢だったけれど、こういう手作りの物が重たいという奴もいるらしい。オレとしては信じられないけど、いるらしいのだ。天音に聞いた事があるのだが、友人が彼氏にそんな事言われているのを聞いたことあるとか何とか。高虎は大丈夫じゃないかって言ってたけど……それも天音のイメー
ジだもんなあ。

「兄貴だったら、何あげても喜びそうなんだけど」

そこら辺、兄貴への信頼は厚い。

あの変態シスコン兄貴ならマフラーじゃなくても、なんなら毛糸玉巻き直したのをそのままあげても、キラッキラの笑顔を浮かべながらオレを子供みたいに抱えて大喜びしそう。くるくる回される己の姿が瞼の裏に浮かぶようだ・・・されるな、確実に。うん。兄貴にはあげないでおこう。

暫くアミアミしているとインターホンが鳴った。

オレは名残惜し気持ちを抑えつつおこたを抜け出し、網掛けのマフラーを道具と一緒にいつもの棚にしまう。時間はお昼ちよつと過ぎで高虎の可能性はないと思うけど、一応念の為にだ。クリスマスまでは内緒なのだ。

再び音を響かせるドアホンのスイッチを入れると、ふんわりした栗色の髪と大きなお胸を揺らす、お隣の癒し系奥さんの山瀬さんが画面に映り込んだ。背中には寝息を立ててる赤ちゃんも見える。

「あつ、こんにちはー」

『はい、こんにちはー。ごめんなさいね、急に』

「いいえ、あつ、ちよつと待ってて下さい。今開けますから」

『ごめんなさいねー、いきなり』

何か用事かと玄関を開けると、発泡スチロールの箱2つを重ねて持つ山瀬さんがい

た。

「ん？えーと、取り敢えず中入ってください。寒いですし」

「いいの、いいの。これから面白い物行く所だから。それより、ほらこれお裾分けー」

そう言つて手渡された発泡スチロールは思つてたより重くて思わずふらついてしまふ。そんなオレの姿に山瀬さんも見るからに慌てた。

「あつ、ごつ、ごめんなさいね。大丈夫かしら？」

「大丈夫つ、です！それよりこれつて？」

「今朝がた実家から届いたんだけれどね・・・」

言葉を途切れさせた山瀬さんは重々しい空気と共に、静かに顔の横でダブルピースした。そしてゆっくりそのピースをチヨキチヨキさせる。あざと可愛い。

「カニよ・・・！」

一応真面目な顔をしてるのに可愛い山瀬さん。

何となく乗せられてオレもダブルピースしておいた。

チヨキチヨキも忘れない。

「カニ・・・！」

「毛ガニよ・・・！」

「毛ガニ・・・！！毛ガニ！」

「カニ好き？」

「カニ好き！」

その言葉にオレは握手を求めて手を伸ばす。

流れから同志だと思つたからだ。

けれど握手はされなかつた。

「私は苦手……！」

「そっかぁー」

悲報。山瀬さん、カニ苦手だった。

理由はクモに見えるからだそうだ。

そうか、分かるような分からないような……うん。

詳しく話を聞いてみるとこのカニ様、山瀬さんの親戚かららしい。山瀬さんの家族はカニが好きなのを知っていて、この季節になると漁港関連で仕事をしてる親戚さんが気を利かせて送ってくれるのだそうだ。実家にいた頃は親御さんや妹さんが山瀬さんの分も処理くれてたそうだが、大学に通う為に独り暮らしするようになるると直接箱一杯のカニが送られてくるようになって、毎年苦勞して消費するそうだ。旦那さんが。

今年も旦那さんが処理する筈だったのだけれど『忘年会で死ぬほどカニを食わされる予定が入ったから全部は無理』——との事でお裾分けがきたらしい。

「うちは、高虎も私もカニ食べますし、ありがたいですけど……」

「そう！良かったあ！今年はいつもより多く送られてきてて、本当にもうどうしようかと思つてたの！折角の貰いもの駄目にしちゃうのもあれだし。子供が生まれたお祝いにつて……その気持ちは嬉しかったんだけど……はあ、これも前にちゃんと断らなかつた私が悪いんだけどねえ」

いやまあ、断りづらい時つてあるよね。分かる。

オレもお祖父ちゃんからの誕生日プレゼントで黄金の彫刻貰つた時どうしようかと思つたもん。幼稚園児の時だったから本当に困つた。登り竜はかつこ良かったけどね？うん。使わないし、邪魔だし、重いし、漂う高級感に気が休まらないし。

ブチキレたマザーが突き返して、翌年からのプレゼントはゲームとかぬいぐるみとか普通になつたけど、あれ断らなかつたら今頃どうなつてた事か。

それから出掛ける山瀬さん達を見送り、重たい発泡スチロールと共に台所へ。封を切つて開けると、オガクズに埋もれる二杯のカニ様がいた。続いてもう一つの箱もあけると、毛ガニじゃなくてタラバの足がぎつしり入つてる。何も知らなかつた頃は呑気に喜べたのに……これ買つたら幾らするんだろうか。怖い。ていうか、山瀬さんつて実はお金持ち？あーよくよく考えたら、こんなマンションに普通に暮らしてるんだからお金持ちか。

「・・・取り敢えず仕舞える分は冷蔵庫に入れちゃうかあ」

タラバの足を冷凍室に振り込み、どうしても入らない分は冷蔵室へ入れておく。毛ガニは今夜には食べちゃうつもりなので、引き続き発泡スチロールの中にしまっちゃうおじさんしとく。しまっちゃうよおー、しまっちゃうよおー・・・言つといてなんだけど、しまっちゃうおじさんって何だろ。たまにネットで見るけど。誘拐犯？

それから発泡スチロールを封し直し、オレは夕飯のメニューを考えながらまた編み物に戻った。

「いあああああああ!!」

時刻6時30分、部屋の中にオレの怒号が響いた。

相対するはハサミを持ち上げ威嚇してくる赤き勇士、二杯の毛ガニ様。オレは負傷した指を口に加えながら、カニ切りハサミを向ける。ジリジリと近寄ればクワツと両手をあげてくる。

こやつ、殺意の波動に目覚めている！

カニ様はオガクズの中で普通に生きていた。

しかも体を締め付けていたゴムを切り裂き、オレが呑気に指を入れるのを虎視眈々と待ち構えているレベルで元気だった。お陰で人差し指は負傷。血は出てないけど地味に痛い感じ。

掴まえようと手を伸ばすと、カニ様はすかさず体をこつちに向けてくる。計画では背後から忍びよってお腹をぐおって持ち上げるつもりだったのだが、どうにもこのカニ様隙がない。オレが動くと必ず背後を庇うように動いてくる。悔しい事に、かれこれ数十分はこれで時間を稼がれてしまった。

「くつ、舐めるなよ！カニごときが！」

フェイクを入れて手を伸ばす。

素早くコンパクトに。

「つたあ!？」

掴んだと思った瞬間、指に痛みが走った。

手を引き戻し、赤くなつた指を口に含んでそこへ視線を向ければ二杯目のカニ様がハサミをチヨキチヨキさせていた。まさかの二段構えである。この孔明の目を持つてしても気づかなかつた。やりおるわ。

しかし、実に卑怯な戦法である。

全くもつて許せん。

二対一とは。

「ふっ、いい気になるなよ。人間には貴様らカニとは違い大いなる叡知が存在するのだ!! G o o ● l e 先生に相談すれば、直ぐに貴様らの弱点が白日の元に曝されるのだ!! ははは! 怯えろ! 震えろ! この検索が貴様らの運命を決めるの——っつは!」

ご機嫌でポーズを取ろうとしたら膝が柵にぶつかつた。

あまりの痛みでスマホを落とすと、カニ様がそれに群がる。おニューでもないけどそこそこ気に入っていたスマホが、カニ様のハサミでカチカチされる。

「止めろお! その子をカチカチするんじゃない! やるなら、オレをやれえええ! あつ、本当に止めて! 画面傷つくからつ、あつ、返して! ついた! 本当に返して! たんまだつて、やだああああ!」

「何やってんだ. . . . お前は」

聞き慣れた声に振り向くと、額に汗を滲ませ少し息を切らした高虎がそこにいた。慌

てて部屋にきたのかジャンパーも脱いでない。けど、何がともあれ助かった。

「高虎あああ！助けてえ！オレのスマホが！爪で！おかえりいいいい！」

「おう、ただいま。で、なんでカニに虐められてんだ。どれだけ器用なんだよ、お前は：はあ、泣くな泣くな」

溜息をついた高虎はオレの頭をワシワシ撫で、そのままカニ様に近づくと難なく二杯に蹂躪されていたスマホを救出してくれた。軽く拭いてから渡されたスマホは、保護カバーを付けてた事もあつて大きな傷はなかった。ちよつと生臭いけど。

スマホの安否を確認してる間、毛ガニ様達を捕らえた高虎は少し怒り顔でこれをどうしたのか聞いてきた。高い買い物を咎められてるのかと思つて、慌てて山瀬さんの事を話すと見るからに安心した様子で「そうか」とだけ言つた。よく分からないけど、納得してくれたなら良かった。

でも、なんだろこの感じ・・・？

前にもあつた気がする。ん？

「・・・高虎、カニ嫌いだっけ？」

「いや、好きか嫌いかと聞かれれば好きな方だ。いきなりどうした？」

「なんか、怒つてたから・・・」

「あー・・・いや、少しな」

それだけ言うと高虎はカニ様を洗い始めた。

「どうやら手伝ってくれるらしい。」

隣に立って夕飯の用意をし始めると、不意に肩が触れた。視線を少しあげて隣をみれば高虎と目が合う。その目は少し不安げで、見ると胸の所がきゅってしてしまう。

「な、なんだよお」

「何でもない……ただ来年も、こうしてられたらなって思ってたな」

???

何言ってるんだ、こいつ？

ん? ……はっ、もしや!

「貴様つ、来年はもう家事手伝わないつもりか!? 許さん! 許さんぞ、オレは! 幾らオレが家事に慣れようと、どんなに忙しくなろうと、お風呂洗うくらいやって貰うからな!! 交代だからな!」

「そういう話じゃないんだが……くっ、くく。そうくるか。くくく」

「何笑ってるんだ、この野郎う! 本気だぞ! 洗濯物も急に雨降ったりしたら取り込むんだからな! やらないと怒るからな! お前!」

「……ああ、任せておけ。約束だ」

そういつて笑う顔に、また胸がきゅつとした。

顔が熱くなる感じがして咄嗟に顔を伏せたら、どうした？何て呑気に聞かれる。こっちの気も知らないで、いい気なもんだ。まったく。

腹立つから足を踏み踏みしてやったが、逆に踏み返された。・・・くう、腹立つう！暫く足元で喧嘩した後、茹で上がったカニ様で豪勢なお夕飯を食べた。カニ奉行高虎に剥いて貰ったカニの身はうましの一言。新鮮だったのが良いのか分からないけど、甘味と旨みが凝縮されていた感じだった。カニ味噌はそんなに好きじゃないけど、食べさせて貰ったら甘くてトロってしてて美味しかった。でも高虎曰く、他のカニ味噌はこう甘くはないというので、基本高虎にあげようと思う。

食器を片付けながら夕飯の余韻に浸っていると、高虎が見てるテレビの音が聞こえた。バラエティー番組なんだけど、時期が時期だからかクリスマス話をしてる。

ふとカレンダーを見れば、クリスマスまで後二週間を切ってる。

マフラーが出来上がるのか少し不安を覚えたけれど、それより何より自然と頬が緩んで胸が高鳴った。

とつても楽しげに。

「
.
.
.
.
.
.
え
へ
へ
へ
」

おもうてたんと違うんだけど【前編】

12月25日、俗にいうクリスマス。

その日は宗教的にいえばキリストさんの誕生日を祝うお祭り、宗教に寛容過ぎる日本人にとって恋人達がデートしたり家族でケーキとかフライドチキンとか食べたりする日である。

これまでのオレにとっても、やはりその日は家族とケーキ食べたりプレゼントを貰う日だった。お祖父ちゃんズに誘われてホームパーティーに出る事もあったけど、あつちは忙しい時は全然やらないので、やはり基本は家でやるのがメイン。ついでに欧米人なパピーはサンタしない派で直接プレゼントを送ってくるから今世はサンタの文化も無かった。だからオレにとってその日はご馳走食べて、貰ったプレゼントで遊ぶ・・・そんな日だった。

そしてそれは、段々と思ひ出せなくなってる前世を含めての事で・・・。

「来てしまったか、この日が・・・」

オレはテレビのニュースで流れるクリスマスマス特集を見ながら、不転の想いと共に完成したマフラーを絶賛ラッピングしていた。

……駄目だ。なんか、リボンの形が気にいらぬ。

本日何回めになるか分からないリボンの閉め直しをしていると、テーブルに置いたスマホからアニソンが鳴り出した。親友の顔を思い浮かべて覗いてみれば、思った通り天音から電話が掛かってきてる。コールボタンをタッチしてハンズフリーにすれば元気な声が響いてきた。

『——あつ、出た。よつ、ゆたか。メリクリ』

「メリクリー。急にどつたの？」

『どつたのつてあんた……可愛い友人が愛しの旦那様と初クリスマスデートだつていうから、どうしてるかなあーつて電話してやったのよ』

「いつ、愛しのつて訳じやないし……」

『ふうん？へえ〜』

からかうような口ぶりで話す天音の後ろからはガヤガヤと人で賑わう音が聞こえる。勘で大学にいるのかと聞けば『さつき今年最後の講義終わった所』と返事が返ってきた。

「クリスマスにも勉強か・・・オレなら発狂しちゃうぜ」

『あはは、赤点とつたらひやくばー留年なのに、それでもゲーセン行こうとした勇者様の台詞は違うねえ』

「えっ、う、嘘だあー。ないない、そんな事。いくらオレだつてそれくらい分別——」
 『覚えてないわけ？ クレーンゲームの景品と人生どっちが大切なんだつていった時、あんたなんて言ったと思う？ 迷いもなく景品の名前口にしたのよ。呆れたわ、本当。今ほどあんたと大学来なくて良かったと思う事ないわよ。絶対レポートとかやらされてたもん』

「そ、んな、こと・・・ちなみに、その景品の名前は・・・？」

何となく部屋の本棚に飾つてあるぬいぐるみを見ながら聞いてみると、天音はあーだうーだ言いながら『なんかアニメのぬいぐるみだと思うけど？ なーなー言いながら説明してきた、ウサギみたいなやつ』と目の前にある物の特徴を告げてきた。

・・・思い出した。あれつてあの時のか。

高二の期末テスト前だったかの時・・・天音から勉強会と称したスパルタ教育を受けてたら、後から合流してきた高虎がお土産に持ってきたんだつたよな。しかも天音に取り上げられて、赤点取つたら燃やす！ つて脅されたんだっけか。なつい。あの時は人生で一二を争うレベルで勉強したっけ。

「……それで、天音はクリスマスの予定とかあんの？」

『露骨に話逸らしたわね……まあ、良いけど。私はこの時期なのに、無様に男にフラれたやつに付き合つて、バイキングでヤケ飯よ。ヤケ飯』

ヤケ飯……なんて豪快な響き。

フードファイターかな？

天音の話を聞いたフラれたご本人なのか、電話越しから『フラれてないし!!フってやったんだし!!』と怒号が聞こえる。他の友人達の宥める声も交じつて本当に賑やか。寂しいクリスマスを送るのかと少し憐れんでたけど、この調子だとそれもないみたいだ。

『まっ、こつちの事は良いのよ。それでプレゼントは間に合ったの?』

「一応……まあ、流石に売り物レベル要求されるとあれだけだな。形にはなつたぞ。今ラッピング中ー。リボンが上手く巻けん。天音ねえーさん、アドバイスプリーズ」

『それは私に相談すんな。私も巻けん』

巻けんか、そうか。

まあ知つてたけども。

それから少し近況報告したんだけど、何故か電話の切り際に『大丈夫だとは思うけど、何かあつたら電話しな』と言われた。ただデートして、それでプレゼントを渡すだけ。

何かなんて起きる訳ない。おかしな事言うなと思いながらも、それでも心配してくれたのが嬉しかったので「そうする」とだけ返しておいた。

電話を切ってから改めてラツピングを再開。

十回目にしてようやく納得のいく渾身のラツピングが完成し、オレは夜のデートの為に準備を始めた。やることは幾らでもある。急がねば。

時計の針が6時を過ぎた頃、高虎が帰ってきた。

いつものように出迎えたただけど、何故か玄関で出迎えたオレを見て固まってしまった。何かおかしいのかと思つて服装を見下ろしてみたが、特別おかしな所はない気がする。それでもマザーに鍛えられてきたからセンスは悪くない方だと思いたいけど……髪型か？ やっぱ軽くハーフアップした所で止めておけば良かったかな。何となく三つ編みにしたけど。それともタイツか？ 素足の方が……いや、寒いから無理。でもせめ

てベージュにするべきだったか？いや、あの見本だと黒のほうが可愛かったと思うし……うーん。

「お、おかしいか、な……？」

何とかそう伝えれば、高虎はハツとして首を横に振る。

「いや、良いと……か、可愛いと、思う。そんな、服持ってたのか？」

「ま、まあな。着たのは初めてだけど……」

そう言われた今着てる白のニットワンピースは、実はちよつと前にマザーと買ってきただつたりする。張り切つてると思われるのは癩だから、その事を教えるつもりはないが……まあ実際？別にこれはこの日の為に買ったとかではないから、知られても全然良いんだけな。何となく、何となく冬用のスカートとか持つてないなあとか思つて、ネットで探したら偶然見つけて、男ウケがどうかデートがどうかなんかごちやごちや書いてあつたけど、そんなのは少しも関係なくて、気に入ったから買いにいったのだ。それだけ。

けど、褒めて貰えるのは素直に嬉しい。

「……お前、けしよ……いや、何でもない。取り敢えず着替えてくる。少し待つてくれ」

「う、うん。そんなに急がなくて良いぞ。どこ行くか知らないけど、時間は大丈夫なんだ

ろ？」

「まあ、余裕は見てるが……いや、直ぐ戻ってくる」

そう言つて慌ただしく自分の部屋に駆けていった高虎だったけど、部屋に入りかけた所で何かを思い出したように早歩きで戻つてきた。デカイ図体でズカズカ戻ってくる姿は迫力があつて、何事!?!と思つて身構えたらオレの直ぐ側まできて口を開いた。

「可愛いからな」

「お、おう。さつき聞いた」

「違う、そうじゃない。さつきのは服だけだった。服だけじゃなくて……なんだ、色々だ。似合つてる、可愛い」

頬を真剣な顔で耳を真つ赤にしながら言われた言葉に、自分の顔がどうしようもなく熱くなつてくのを感じる。なんか、恥ずかしくて吐きそう。軽口を叩こうとしたのに上手い返し所か何も出ていなくて、首を頷かせるので精一杯だった。

高虎も恥ずかつたみたいで、言つたら直ぐに目を逸らした。基本表情の変化が乏しいやつだけど、今目の前にある横顔は面白いくらいコロコロ変わつてる。きりつとしたり、ふにやつとしたり、おろおろしたり、うぬぬつてしたり……どんな気持ちなのかはよく分からないけど、それを見ると何だか自然と顔が綻んだ。まったく仕方ないやつだ。こいつは。

「高虎、早く着替えてこい。時間幾らあっても足りないぞ」

「あ、そ、そうだな。行つてくる」

そうして今度こそ部屋に戻つた高虎は、結局その宣言通りそう時間も掛からず帰つてきた。白いシャツの上には黒のニットと灰色のダツフルコートを着込んで、その下から紺色のパンツをはいた足がスラツと伸びている。

どれも見慣れないやつなので、こいつも買つてきたのかも知れない。

「……良いんじゃない？分かんけど」

「そうか、合格点が貰えて何よりだ」

ほつとしたように笑つた高虎は手を差し出してきた。

目を合わせれば繋いで欲しそうにしてる。

仕方ないので手を繋いでやれば、ぎゅつと握り返された。伝わってくる温もりと男らしい手の感触に、胸がアホみたいにドキドキして煩い。この前握つた時は何でもなかつたのに。あまりに煩いから聞こえてやしないかと視線をあげて高虎の表情を確認したら、妙に男前な顔してる高虎と目があつた。

お互い何も言わず見つめあうこと少し。

高虎が意を決した様子で口を開いた。

「行くか」

「おう」

そして、オレたちの初めてのクリスマスデートが始まった——はっ！

「————まで！バッグ忘れた！」

「っ、お前な、あーいい。走るな。ゆっくりいけ。時間は大丈夫だから」

慌ただしく出発してから暫く。

高虎に手を引かれるまま辿り着いたのは、家から三十分程の所にあつた雰囲気のあるレストランだった。ドレスコードとか心配して聞いたら、外装はあれだけど若者向けのカジュアルフレンチのレストランらしくて、余程な格好でなければ大丈夫なんだとか。オレの知ってるフレンチレストランとは違うらしい。

因みに、ここは大学の友人である弦巻に教えて貰つて予約したそうだ。マンションの駐車場に用意されたレンタカーを見た時は『こいつ、何処までいくつもりなのか!?!』と、正直不安になつたけどそこまで遠くじゃなくて良かった。割りとロマンチストな高虎は、なんか、あれだ、色々やりそうだな。めんどいこと。ナイス弦巻。

「・・・美味しいか？」

「ん？うむ、よく分からないけどドンマイ。なんだろうな、このソース。醤油？」

「醤油ではないだろ・・・いやあ、でも醤油と言われると・・・いやないな。ない」

レストランに入ってから暫く。

なんちやらかんちやらな真鯛のポアレと呼ばれたそれを食べながら、オレは思った事をそのまま答えていた。いつもの感覚からいうと少し高い金額が刻まれたメニュー表とにらめっこして決めたコース料理の一皿。フレンチとかよく分からないけど、美味しいことに違いはなかった。ウェイターさんのサービスは良いし、あとはフレンチレストランにしては堅すぎない雰囲気というか・・・なんかこう、柔らかい感じの雰囲気も良いと思う。前にお祖父ちゃんが行った所は兎に角皆かつちりしてて、空気が死んでたかな。あれは美味しくなかった。

それらを色々考えるとリーズナブルなお値段というのも納得である。

ただ・・・まあ、それでも一回の外食のお値段としてみると安いとは言えず、気軽にまた来ようぜとは口が避けても言えないが。やはり、うち飯さいこー。経済的に。

「この、なんだろう焼き魚——」

「ポアレだ、ポアレ。焼き魚いうな。お前の醤油発言でただでさえ日本食感を感じて仕方ないんだ。止める。フレンチさせてくれ」

「——じゃあ、このポアレ、皮美味しい。オレの焼き方じゃこうはいかないな。なんだろ、良い塩でも使ってるのか——」はっ、オリーブオイルか？オリーブオイルだな。帰りに買っていくか。毎日フレンチしてやるぞ？」

「オリーブオイルにどれだけの可能性を感じてるんだ。お前は。後な、毎日フレンチはキツイ。これまで通りにしてくれ」

話しながら焼き魚を食べ終わると、ウェイターがささつとお皿を下げていく。見事な手際にイイねしたら、ウェイターさんからにこやかな笑みと共に「先ほどのソース、醤油も入ってますよ」と一言を残し颯爽と行ってしまった。オレならーニヨニヨくらいするだろうに……はっ、てか、醤油入ってんじゃん！

「ほら見ろ！醤油入ってる！いえーい！へいへい、味音痴！どうした、何とか言ってみろお！」

「なん、だと……フレンチなのにか？」

「フレンチもグローバル化してるという事だ。ふふふ、固定概念に囚われおつて……ブアカめ。因みにっ、昨日食べたオムライスには隠し味としてカレーパウダーが入ってたりするのだ。気づかなかつただろう？そうだろう、そうだろう——」なんで気づかなかつた！オレの努力を返せえ！」

「なっ、そ、それは、本当に気づかなかつた……いや、美味しかったぞ？いつもより、

多分」

「多分んんん？」

「美味しかった、間違いなく」

なら良かろう。

まったく。

「ふうーでもあれだな、クリスマス感ないな。なんか」

「・・・まあ、普通にメシ食ってるだけだしな。まだ」

「まだ・・・？」

「あ、いや、何でもない。気にするな。あーそれより、な、あれだ、メインの肉料理はどんなやつだろうな？名前見たただけだと分からなかったからな」

それは分かる。

一瞬脳が見るのを止めたもん。

拒絶したよ。

「なんだろ、羊？」

「牛って書いてあつたらろ」

「そうだっけ？」

「あれだけ真剣に見てて何を見てたんだ・・・値段か」

「よく分かったな」

高虎がガツクリ肩を落としたタイミングでお肉がやってきた。赤ワインがなんちゃらで、ソースがほにやららで、お肉は香草と一緒にオーブンでじっくりローストした牛肉らしい。ナイフで切ってみれば、ほんのりとした赤みが顔を出す。一度口に含めば凝縮された旨味が舌の上に広がっていった。

「パツクに詰めて持って帰りたい……」

「それは止める。本当に」

「じゃあ高虎、オレフレンチ料理人になるよ」

「それは……多分無理だから止めとけ」

そうして肉料理を堪能した後。

高虎と話しながら待っているとデザートが運ばれてきた。随分と飾りのついたケーキである。フォンダンシヨコラとかっていうらしい。甘党な高虎がソワソワしながらそれをフォークで割ると、割れたケーキの隙間からチョコソースがドロツと溢れる。高虎が凄いきらきらした笑顔を見せたのは言うまでもない。普段のクールさは何処に投げ捨てたのか。そうか、チョコソースにか。

「デカイ凶体してデザートを少しずつ食べ進めてく高虎を眺めながら、オレはもうすぐ渡す筈のそれをテーブルの下で触れた。」

ラッピングに以上なし、中身だって確認した。
大丈夫。きつと。

何も問題ない。

可愛いと言つて貰えた。

楽しそうにご飯も食べれてる。

だから大丈夫。

きつと、大丈夫。

おもうてたんと違うんだけど【後編】

「人混みが凄いなあー」

「すまん」

ご飯食べ終わった後、ロマンチストマン高虎に連れられてイルミネーションが凄いらしい公園にきた。実際イルミネーションは凄かった。ライトがメチャクチャついてて、目がふぁー！ってなる程。でもイルミネーションより人の数が凄くて、感動よりは息苦しさを感じて仕方ない。あと寒い。高虎がコートとか帽子とか用意してくれてたけど、それを装着しても寒い。足元寒い。くそ寒い。スカートはこれだから。

車止める場所が無くて公園よりずっと遠くに止めるはめになった時点で……いや、公園に行くまでの道のりで渋滞してる時点で……いやいや、寧ろ朝のニュースで今晩のイルミネーションとかの混み具合予想を聞いた時点で嫌な予感はしてたけどな。

隣にいる高虎も人混みは苦手なので、マフラーの上から覗く目が何とも言えない感じになってる。死にかけの魚みたいな目だ。スマートにレストラン予約出来た男はもういないらしい。まあ、ある意味らしいけどな。

昔から出不精の高虎が何か行動する時は大体こうなる。ゴールデンウィークの時と

か良い例だ。準備不足というか、タイミングが悪いというか……だから、もうあれだ、安心感すらある。それでこそだ、高虎だよ。うん。今、手袋ないのも含めてな。

慰めようかと思ってるが高虎にマフラーを巻かれた。高虎のやつだ。温もりが残っててぬくぬくする。マフラーの倍プツシユに体温が少しあがった気がする。ぬくい。

「……取り敢えず、メインだけは見てくるか」

「諦めないのか。まあ、良いけどさ。今から帰ろうとしたって、この渋滞じゃどうせ直ぐに帰れないと思うし」

「……すまん」

「いちいちしよげないでよベイバー。ほら、行くぞ」

この人混みだと直ぐはぐれてしまいそうだったので、ポケットに入れてた手を出して、隣にいる高虎の手を握った。骨ばった手は少しビクリとして、またぎゅつと握り返してくる。また心臓が煩くなってしまうが、仕方ない。はぐれるよりマシというもの。

「——せつ、せつかく来たんだから、全部見ていくぞ!! ついて来い、進撃の高虎ア!!」
「誰が巨人だ。誰が」

「見渡してみろ。どうだ、同じ目線の奴が何人いる? それが証拠だ。人食べるなよ、セコイヤ」

「セコイヤ……いや、あのな、そこまでじゃない。それに見渡すと割り目線の合う

奴らはいるぞ。単にお前が見えてないだけ……あつ、悪い。お前には縁のない世界だったな」

「なにつ、貴様っ……良いだろう、今だけは勝利の美酒に酔いしれるが良い。その内、俺が天をつくほど伸びた暁には、頭の上でポテチ食べてくれるわ！フリかかる食べかすの幻影に怯えて眠れ！」

「今夜も安眠出来そうだ」

イルミネーションを眺めながら人混みの流れにそつて進むこと少し。幾つか光のアーチを抜けた所で、一際人が一杯いる場所についた。人混みの奥には沢山の飾りで彩られた大きな光のツリーがドカッと立ってる。

見上げると木の天辺に星の飾りもあつて、如何にもクリスマスツリーって感じだった。

「クリスマスツリーだなあ」

「ああ、クリスマスツリーだ」

「オレ、わざわざクリスマスツリー見に来たの初めてかも。パピーは兎も角、マザーが人混み嫌いだったからなあー」

「俺もちゃんとしたのは初めてだな。姉貴とか親父達は見に行つてたけど、人混みがめんどくくて断つてたからな」

お互い基本的にインドア派だったからなあ。

灰色の青春ってこんなのを言うのだろうか・・・まあ、後悔はないんだけど。おこたでゲームするのも、特番見てゴロゴロするのも好きだし。何より寒いのがやだし。

しかし、眩しいなあ。クリスマスツリー。電気代とかどうなんだろ。これ。

「・・・というか、これもみの木?」

「どうだろうな。もみの木ではないんじゃないか」

「じゃ、なんの木? 気になる木?」

「気になる木はこんなものではないだろ。実際に見てみないと分からんが、相当デカイだろ。あれは」

「がじゅまる?」

「断言してやる。がじゅまるではない」

がじゅまるではなかったか。

成る程。

「セコイヤ」

「セコイヤでもない」

「じゃあ、さるすべり」

「知ってる奴をテキトーにいつてるだけだな。お前。ヒノキとかじゃないか? 多分」

「ヒノキかあ……」

人の喧騒を聞きながらぼーっとツリーを眺めていると、ツリーの反対側にカップルの姿を見つけた。何を話しているのか分からないけど、どちらも凄く楽しそうで幸せそう。何となしに見渡してみると、そういう人達がチラホラ視界に入る。分かっていた事ではあるけど、考えることは一緒みたいだ。ちゅーしてたり、抱き合ったり、プレゼント渡している人とかもいたりする。何を言ったのか、おもつきしピンタされてるやつもいるが……まあ、概ねそういう雰囲気。

バッグの中にそつと手を入れると、ラッピングされたそれが指に触れた。リボンが崩れてる様子はない。雰囲気もあるし、渡すならきつと今が良い……多分。さつき木の話しちやつたけど。い、いけるよな。いけないのか。いや、いける。というか、いきたい。持ってるのそろそろ辛い。精神的に。

ちよつと様子を見る為に隣に視線を向ければ、ツリーをぼんやり見上げる高虎の横顔があった。木の話をしたせいかわからないが、いつも見ている抜けた横顔だ。出掛ける前の気負った感じとかなない。そう、それは見慣れたもの。——なのに、見ていると心臓がまた煩くなくなってくる。痛いくらいドキドキして、体が熱くなつてく。やつと繋ぐのに慣れて静かになってきたのに。

正直、帰りたい。直接とか無理。まちむり。

心臓が持たない気がするし、胃とか飛び出そうだし、ありえんくらい汗が止まらない。手汗とかヤバイ気がする。てか、あれだ。もう、なんか、寝てる間に枕元とかに置いて、サンタさんのせいにしたい。したい、けど——。

「たつ、たきやとりや！」

「……舌、大丈夫か」

はあああああああ!!

あああああああああ!!

ぬうえええあああああああ!!

ふあああああああああ!!

一頻り心の中で絶叫した後、舌の痛みに耐えながらバッグからプレゼントを取り出した。高虎はプレゼントよりオレの顔を心配そうに見てきて腹立つたけど、それにツッコむと痛ましい過去と向き合わなければならぬのでスルーしておく。何もなかった。そういう事だ。やめろ、優しい言葉をかけるな。

「……こりえ、くりゆしゆましゆ、ぶりえじえんと」

「くりゆ……? ……もしかしてクリスマスプレゼントか? はっ、クリスマスプレゼント?! いい、良いのか? というか、俺にか?」

「おみやえいきやい、だりえにあげりゆんら」

「そ、それもそうだな」

ラッピングしたそれを渡すと高虎は手にしたそれをじつと見つめる。そしてオレの方をソワソワしながらチラっチラっ見てきた。何が言いたいかわかったので、そのまま開けて良いと伝えれば物凄く丁寧にプレゼントを開封していく。ラッピングを大切にされるの、地味に嬉しい。

「これ、マフラーか……長いな」

「おみや……んっ。おまえ、体大きいからな。普通のよりちよつと長くしといた。本当

は一色じゃなくて別の色で柄とか入れたり、編みかた変えてそれっぽくしたかったんだけど……技術的にも時間的にもそれが限界だったんだ。雑な所もあるし、嫌なら別に

「嫌な訳あるか。ありがたいな、大切にに使わせて貰う」

「そつ、そつか。まあ、そうだよな。何せオレが作つてやったんだからな……ふへへっ」

「今、使つてみても良いか？」

「す、すきに、すれば？」

早速手にしたマフラーを首に巻いた高虎は嬉しそうに笑つてくれる。少しでも心配したのがアホらしく思える程に。本当に嬉しそうに。

「そうだ、始めから喜ぶのは知つてた。」

「だつてこいつ、オレの事が好きなんだから。」

「結婚しても良いって思えるくらい。」

「オレの事が。」

「だから、大丈夫。」

「心配なんていらぬ。」

少しも――。

「高虎、あのな――」

オレの声に高虎の瞳がこちらを覗く。

「お、れ、あの――」

心臓が煩いくらい高鳴って、高虎しか見えなくて。他の何も意識の外へ消えていく。

「あ――た、たか――」

頬が、耳が、頭が、身体中が熱くて仕方ない。
指先が、肩が、足が震える。

「あ、あ」

オレは高虎の事が好きだ。

誤魔化しようもないくらい。

好きなのだ。

だって、こんなにも――

「なん、でも、ない」

——
怖いの中から。

「……ゆたか……？」

高虎がこつちを覗いてる。

見たことないくらいな不安げな表情をその顔に浮かべながら。頼りない声をあげながら。

オレは今どんな顔をしてるのだろうか。どんな顔をしてしまっているのだろうか。分からない。でもきつと、笑えてないのは間違いないだろうと思う。

高虎の気持ちに応えたかった。

オレの正直な気持ちを一言でいいから伝えたかった。高虎のこと、ちゃんと異性として好きだったこと。

ずっと待っていてくれた高虎に教えたかった。

だけど、どうしても言葉が出てこない。

高虎のことはよく知ってるのに。

高虎がなんて言ってくれるか、分かっているのに。

声が出てこない。

胸が張り裂けそうに痛い。

苦しい。苦しい。苦しい。

さっきまで楽しかった筈なのに。

頭の中はそんな物で一杯で。

何も考えられない。

「おい、ゆたか、大丈夫か？寒いのか・・・？」

今だって優しい言葉をかけてくれる。

だから大丈夫なのだ。

きつと・・・なのに。

オレは——気がついたら走り出していた。

「待てつ、ま、待てつ！ゆたか！いや、待て、本当に待て！何処にいくつもりだ！危ないから、本当に待て！！あつ、すみません。少し、通して下さい」

「うゝわゝあゝあゝあゝんゝ！！つゝいゝでえゝぐんゝなゝよゝおゝおゝ！！やゝたゝあ

「あゝ!!はかあゝあゝあゝ!!」

全力で人混みの中を逃げたけど、直ぐ追い付かれた。五秒も掛からず追い付かれた。しかも微妙に気を使われて高虎が捕まえないで、ちよつと後ろを走つてくる。それがまた周りの視線を妙に集めることになって、もう恥ずかしくて死にそう。死ねる。

「取り敢えず話をしよう!話せば分かる!俺に悪い所があつたなら謝る!直す!約束する!いや、こうして寒空の下連れ回してる俺がいつてもアレかも知れないが!!すまない!!やつぱり、駅前のイルミネーションで我慢するべきだった!!」

「そゝんゝなゝはゝなゝしゝしゝてゝなゝいゝ!!ばかゝあゝあゝあゝ!!つゝいゝてゝくゝんゝなゝつてゝ、いゝつてゝんゝたゝよゝおゝ!!うゝわゝあゝあゝあゝんゝ!!」

一生懸命走つてると、人混みを抜けて遊具場みたいな所に出た。何となく目についた滑り台を駆け上がったけど、途中で滑つて一番したまで滑り落ちた。滑り台から落ちたギリギリの所で止まったけど、オレが倒れてるそこはもう高虎の足元である。

ふと見上げると、なんとも言えない顔した高虎とがつつり目が合う。よく分からないけど涙がぼろぼろ零れた。激しく悲しい。

「くゝうゝきゝよゝめゝよゝおゝ!!ばあかゝ!!つゝーかゝ、つゝかゝまゝえゝるゝなゝらゝつゝかゝまゝえゝるゝお!!おゝたゝんゝこゝなゝすゝ!!」

「捕まえて良いのか?!これ、捕まえて良いやつなのか!?捕まえるぞ、良いんだな?!」

「はやくしろよおお！うええええん！！」

ぼろぼろ泣いてると高虎にお姫様抱っこされた。

ムカついたので顔をポコポコ殴っていると、そのまま何故かぎゅつと抱き締められる。苦しい。

抵抗するのを止めると背中をポンポンしてくる。まるで子供扱いだが、落ち着いてしまつてる自分もいるので文句を言うのは止めておいた。

「少しは落ち着いたか？」

「癪だけど……ぐすつ」

「そうか。取り敢えず、どうした？つて聞いて良いか。答えたくないなら、それでも良いけどな」

そう良いながら逃がす気が欠片もなさそうで、オレは覚悟を決めて口を開いた。

「あ、あのな……高虎に、言いたい、こと、あつて」

「うん、聞いている。言いたい事か。なんだ」

「す、好きつて、言いたくて、ちゃんと異性として、すきつて言いたくて——うええええええええん！きもちわるくでごめんなああ

ああああ！」

「そんな事か。心配するな、気持ち悪いなんて事……え、あ、はつ、えつ、ん？す、

流れた涙を拭うように。

「二つめ、最近キスとかハグとか控えてたのは、ゆたかの気持ちを考えてだった。遅いかも知れないがゆたかに無理させてると、思ったから・・・それで・・・な。してもいいなら、今だつてほしい。誰とでもじゃない、お前とだけだ。ゆたか」

そう言われて頬が熱くなった。

「そ、そつか・・・止める。あつ、あんまみんな」

「すつ、すまん。と、取り敢えず、降りるか？」

「お、おう」

オレが地面に下ろされた後、そこには何とも言えない空気が流れた。熱くなった体を冷ましながらかめて高虎に何を言うべきか考えてると、目の前にその高虎がひざまづいた。どうしたのかと見ると、懐から小さな箱を取り出して見せてくる。

「?どうした・・・?」

「本当は、もう少し早く用意するつもりだったんだが、思いの外バイトしてる時間がなくてな」

そういうと高虎は小さな箱を開いた。

中には綺麗な布地の台座に収まった、銀色に艶めく指輪が一つ入ってる。

「もう色々順序がめちやくちやであれだが・・・聞いてくれ、ゆたか。俺と結婚してく

れ。友人としてじゃなく、幼なじみとしてじゃなく、伴侶としてお前に側にいて欲しいんだ。俺はお前が知ってる通り面白みない男だ。服はろくに持ってないし、友人だつてもそんなに多くないし、外出して遊ぶより家で映画見たり読書するような暗いやつだ。何でも買つてやれるような財力はないし、お前が喜ぶようなこと何でもしてやれる人間じゃない。——だけど、お前が笑つていられるように努力していく。俺の出来る限りを尽くして、笑わせてみせる。だから……受け取つてくれないか」

真つ直ぐな目に見つめられながら、オレは震える手で差し出されたそれを受け取つた。胸の所に抱き締めると不思議とポカポカしてきて、心臓がきゆうつとしてくる。

「良いのか、俺で……?」

不安そうな顔に、頷いて返す。

そうしたら急に立ち上がつてきて、がばつと抱き上げられた。苦しいくらいだけど、今はそれが心地良い。嬉しくて、嬉しくて、また涙が零れて止まらない。

「……正直、話は、長くて、ちよつと分からなかったけど」

「おまつ……愛してる! お前と結婚したい!」

「結婚してるけど……?」

「いや、そうだが。そういう事じゃなくてだな……」

そんな言葉を聞いて高虎が困つたような顔になる。

そんな顔も可愛く見えて、オレは側にあるその頬をつついてやった。ぐりぐりと。

「っ、なんだいきな——」

そして振り向いた高虎の唇に、オレは自分の唇を重ねた。小鳥が餌を啄むような、軽いキス。

だけど、オレの初めてのキス。

ファーストキスはレモンの味がするらしいけど、思ってたのと違って少しのしょっぱさと、レストランで食べたケーキの味がした。それに高虎の唇は少し乾燥してガサガサしてたし・・・思ってたのと、全然違ってた。

でもその違いは、悪いことばかりじゃない。

この胸の高鳴りも。

唇に残る甘い感触も。

頭が蕩けそうなほどの幸福感も。

思ってたのなんかより、ずっと——

「高虎、オレな・・・お前のことが、好き。大好き」

—
ずっと、
幸せなのだから。

おもうてたより、蛇足なんですけど編

おもうてたより、乙女心は難しいみたいなんですけど

ちらほら雪マークが天気図に現れる今日この頃。

賑やかでまったりな1月も終わり、暦はついに2月を迎えた。去年の今頃、色んな意味（主に受験）で死にそうになってた事を考えると、特別やることもなく日がなコタツでヌクヌク出来る今年は天国と言えよう。

しかし、早いものだ。

高虎に気持ち伝えてからもう二ヶ月。

かなり覚悟を決めて告白したんだけど、あの日からオレたちの関係は相変わらずだ。懸念していたような事は少しも起きなくて、高虎はありのままのオレを好きでいてくれた。それまで通り休みの日は何をしてもなく一緒にコタツでまったり。ゲームしたり、映画もみたり。

平日は遊んだりはしないけど、ご飯一緒に食べたながら昼間にあつた事とか明日の夕飯の話して……うん。

……そう、そうなのだ。

オレたちはあの日から、そんなに変わらなかつたのである。いや、厳密にいうとボディータッチは増えた。前みたいにぬいぐるみか抱き締められるし、おでこや頬つぺたにちゅーもしてくる。意味もなく二の腕プニプニされたりもするし——でも、それだけ。それだけなのである。あいつ、唇にちゅーもしなければ、もつとこう、エツチな事してこないのだ。

別にそういう事がしたい訳じゃない。

正直まだ気持ち的に準備が出来てないのは事実なのだ。

実際そういう感じになつたら茹で蛸になる自信はある。最後まで出来る気はしない。多分意識飛ばす。そうでなくても限界がきたら即行逃げるだろうし。

だから、高虎がそういう事に慎重になつてくれてるのは素直に嬉しい。嬉しいんだけども……それでもやっぱり『何もしてこない』『求めてこない』というのは、それで結構くるものがあつたりするのだ。

すごいわがままで贅沢な話だけど。

そんな風に少し悩んでいるとオレの元にそれが届いた。

高虎のお姉ちゃんから届いた、一泊二日の温泉旅行券である。絶妙過ぎるタイミングに何故に？と思つて高虎のお姉ちゃんに連絡をとつてみると、大分遅いけれど俺達への結婚のお祝いなんだそうなの。

元々は結婚して直ぐ贈るつもりだったらしいんだけど、その当時大きな買い物をした直後でお金がなく、尚且つ宿の予約も取れなかった為、なんやかんやこの時期にずれ込んだだけらしい。エスパーじゃなくてホツとしたのはここだけの話。

そんなこんなでオレと高虎は高虎のお姉ちゃんの好意に甘え、新婚旅行ともいえる温泉旅行へと行く事になったのだ――。

「ねえ、どうしよう……天音え、オレ、どうしようう。どしたらいいのう……天音えええ」
――が、それはそれで問題だった。だって温泉つてことは、だってそういう事なのだから。

頭を死ぬほど悩ませてると、目の前の天音がアイステイーを音を立てながら一口飲み「はっ」と鼻で笑う。

「大事な話があると聞いてすっ飛ばしてきてみたら、これか。お馬鹿」
「でもっ、でもな、そんな事言つたつてさあ、分かつてるよお。オレだつてえ、でもさあ、だつてさあ……ていうか、今日はシロップ入れないの？」

「何処かの誰かさんのせいで良い塩梅よ。寧ろ、話の如何によつては砂糖吐くまであるわよ」

「?」

意味が分からず首を傾げると、呼んでないのにやってきた弓子がテーブルに突っ伏した。なんかブツブツ言いながら痙攣してる。よくよく見れば、なんかしくしく泣いてる。

あとそんな弓子姿に、オレたちの注文品のパンケーキ持ってきてくれた喫茶店の店員さんが酷く戸惑ってる。ごめんね、店員さん。

取り敢えず弓子が激しく邪魔なので、テーブルを空けるように揺すりながら声を掛ける。すると弾かれるように起き上がった弓子は揺すっていたオレの手を胸の所で握り締め、涙の滲んだ顔をぐいっと近づけてきた。

「止めて下さい！そんな話っ、私聞きたくありません!!——ていうか、どうして藤崎先輩とちゅーしたのに、私とはしてくれないんですか!ずるい!!私だっけしたいのに!」

「そういう話してないんだけど、とうかお前とちゅーする理由ないからな」

「したいからじゃ駄目ですか!」

「オレしたくないもん」

「くうううう!!」

思ったまま断ると弓子は悶絶しながら椅子の背もたれに寄りかかる。弓子は可愛いし、男だった頃なら普通にOKしてたと思うけど・・・今は女だし、女相手にそういう

感情湧かんし、何より高虎の嫁だから浮気みたいなことはノーサンキューなのだ。

まあ、仮に結婚してなくても、こいつとはちゅーしなかったと思うが。色んな意味で。「まあ、変態はおいておいて……で、結局あんたは何がしたい訳？セックスしたいの？」

「せつ……!?せつ、は、ま、まだ早いと、思うと言いますか、で、でも高虎も、年頃だし、興味があるのは、分かるし、だから、どうしてもって、いうなら、その考えるくらいは、すると言いますか、でも、やっぱり……」

「面倒臭さ……はあ、恋は人を変えるんだねえ。昔のあんたなら、面倒臭いと思った時点で考える事すら放り投げてるでしょうに」

「セックス!?セックスは駄目ですよ！先輩!!穢れます!この上なく穢れます!墮天しますよ!?!良いんですか!?!良いわけないでしょう!!」

一人で激しくスパークキングする弓子に、天音は優しいタッチで肩を叩いた。そこから流れるように天音の四肢が弓子の体に絡み付き——あつという間にコブラツイストが極っていた。オレでなければ見逃しちゃうね。

「良いわけないのは、あんたの頭の中よ!!ていうかつ、あんた!受験シーズンに余裕ぶっこいてて、大丈夫なんですよーねえええ!!」

「あだだだだだだだ!!受験っは、別につ、もん、だつあまつ、天音先輩!極つてます!完全に極つてますつて!折れます折れます!大丈夫ですつて!センター試験もばっちりでしたし!!本当にえ!?あててて!!」

ギリギリと弓子の頭を締め上げながら、天音はこつちへと視線を向けた。

「兎に角、あんた次第よ。ゆたか」

「オレ次第……」

「高虎くんが無理に関係を進めてくる事は絶対ないわよ。迷つてる限り、あんたの気持ちに絶対優先してくる。相手は中学の頃から下心を欠片も見せず、あんたと付き合い続けてきた猛者よ。私らでさえ、あんたにとつての高虎くんは過保護な兄妹くらいの認識だったんだから。結婚するつて聞いて耳を疑ったわよ。まあ、なぜか納得も出来たんだけど」

「そ、そうなの?」

「そうなの。だから、もし関係を変えたかつたら、自分からドーンといきなさい。大丈夫、高虎くんは受け止めてくれるから」

ちよつと想像してみる。

確かに受け止めてくれそうだ。

物理的にも。

でも、だ。やつぱり不安だ。

不安過ぎるのだ。

「でもな……」

「なによ、まだなんかあるの？」

「た、高虎の、高虎の、あれさあ……でかいんだぞ」

「……」

あの日以来、高虎の距離が近くなって分かったのだが、高虎の股間のそれは猛獣なのである。魔獣といっても良い。

それまでは意識してなかったので気づかなかったが、膝の上に抱っこされた時にお尻に伝わる感触とか、床にゴロゴロしながらじやれてたりすると見える股間の膨らみとか……見たり触れたりした結果、とんでもねえ化け物がある事が判明したのだ。

あんまりにあまりだったので、切れたシャンプーを詰め替えるという名目で高虎の入浴時に乗り込んで確認したこともあるんだけど、ふあっ!?! ってなった。おまつ、ふあ!?! ってなった。幼稚園の頃はちびっこウインナーだったのに!?! ってなった。

「……物理的にさ、もう、なんか、はい、はいらな、ない気がするんだよお」

「止めい、カフェでなんて話してんの」

「だってえ！おまえ、すっごいんだからな！おまつ、こんな！こんなだったんだから！何

だよあれ！馬鹿じゃないの!?兄貴のなんて、こんくらいだったのに!」

「止めえなさあいー!こつちが恥ずかしくなるわ!てか、お兄さんまで引つ張り出すんじゃないのお!知らんわ!」

弓子を捨てた天音はテーパーをバンってした。

グラスが揺れて、重なつてたパンケーキが崩れる。

「だって!痛い言うじゃん!最初、死ぬほど痛いつていうじゃん!!それが、あんな、あんな化け物が最初とか!死んじやいますけど!?死ぬよ!オレ死んじやうよお!嫌だ!裂けちゃうよ!どうしたらの良いの!あまねえーさん教えてよお!」

「どつ、どう、どうしたら良いのか、なんて、い、言われても、そ、それは、あんだ、ん、ん、ん、ん、ん、ん、人に寄るとしか言えないわよ」

キリつとした顔でそういった天音の隣に、そつと弓子が顔を寄せた。

「ゆたか先輩、無駄ですつて。相談する相手間違えてます。女にしかモテなかった天音先輩が知るわけじゃないじゃないですか。普通に処女ですよ、この人」

「どつせい、ごらあ!!」

「ほにやあつ!?!ほ、本当のこと、言っただけなのに!?!ぐえええ!?!ちよ、わ、私としては、嬉しいつ、ことなので、貶めつもりで、言っただんじや、にやいでひゅよ!」

「うるさいわあ!その口を今すぐ閉じなさい、お馬鹿!締め上げるわよ!!」

「もう、しつ締め上げてまひゅよお！」

二人がわいわいじゃれつき始めた所でさっきの店員さんがしかめっ面した上司っぽい人を連れてきて軽く注意された。定番の他のお客様のご迷惑になりますからと。

それで謝って終わり・・・かと思っただけで、隅っこの席に移動する事を促された後「休憩ぶんどってきたわ」と上司っぽい店員さん参戦。色々と相談に乗ってくれた結果的に何が解決した訳でもないけど、聞けた話は為にはなつたし、気持ちも吐き出した事ですこしすつきりしたので無駄ではなかったと思う。弓子は終始上司さん睨んでたけどな。男に誘うなとかなんとか。

それから二時間程話してオレ達は解散した。

去り際「女は度胸」とウインクして帰っていった上司っぽい店員さんの背中から溢れる男気・・・乙女気に敬意を称して敬礼したのは、今でも間違いいではないと思っている。アドバイスありがとうございます。

何も解決しなかったけど。

本当、何も解決しなかったなあ。

「早かったな。おかえり」

女子会を終えて家に帰ってくれば、高虎が台所で料理を作っていた。まな板の上に刻まれた野菜が見える。

「ただいまあー、何作ってるの？手伝う？」

「いや、作っているというか・・・カッパ焼きそばの具をちよつと足そうと思ってる。それだけだ」

「カッパ焼きそば？なんだよ、夕飯までには帰るって連絡したろ？別にカッパ焼きそばが駄目とは言わないけど・・・そんなの食べるくらいならちよつと待ってるよ」

膨れてそう言えば高虎は少し困ったような顔をして「まあな」と頬を掻いた。

「てつきり夕飯まで一緒に食べてくると思ってるな・・・久しぶりだろ？島原と会うの。それに受験関係で忙しい服部が態々来たってきいたからな、話は長引くだろうと——」

「でもオレは帰ると言いました。ちゃんとお、言いい、ましたあー。なんだよ、せつかくお惣菜買ってきてやったのに！ぷん、だ！もう貴様にはくれてやらん！カッパ焼きそばでもカッパラーメンでも勝手に食べてる!!・・・オレのヤツは食べるなよ！お前用のヤツだけだからな！あつ、デカラーメンは良いぞ。どうせ一人だと食べきれないし、あれはあげる・・・それだけだぞ!!」

買ってきた揚げ物を見せびらかしながらレンジの姉御の所へ向かうと、高虎にぎゅつと抱き止められた。万力のような力で体が動かない。不屈の乙女魂で踏ん張ったけど全然脱出出来ない。くそ。

「なんだよお！お前は野菜マシマシの焼きそばでも食べてろ！このカキフライとイカリングはオレが食べる！唐揚げもだ!!」

しゃーつと威嚇すると頭のとつぺんにチュウされた。

思わず固まると調子に乗って頬つぺたにもチュウチュウしてくる。

「分かった、俺が悪かったから。そんなに怒るな。頼む」

耳元で囁かれたそれは本当に申し訳なさそうだった。

隣にある顔をチラ見してみれば、眉を下げながら熱っぽい視線を向ける高虎の瞳がある。

そんな高虎の目を見てると膨らんでいた怒りが萎んでくる。その内割りとどうでも良くなってきたので揚げ物を少し分けてやる事にした。

「カキフライは二つやろう。半分こだ」

「おう」

「唐揚げも半分・・・いや、やっぱりオレは二個だけで良いや。後はやる」

「おう」

「イカリリングは一個だけだ。後はオレのだ」

「相変わらず好きだな、イカリリング」

それから高虎が切った野菜をお肉と一緒にチャチャつと炒めて、味噌汁をパパつと作ってお夕飯にした。

買ってきたイカリリングは美味しかったけれど、旅行の件が頭の中を過りまくって食はあまり進まなかった。というか、あの上司店員さんの話してくれた体験談のせいでそれまで以上に色々考えてしまう。

高虎はその日も変わらず、アホみたいにおかわりしたけどな。こっちの気も知らないで。

「つつ?!?なんで、今つ、脛を蹴った……」

「べえ、つう、にいいー」